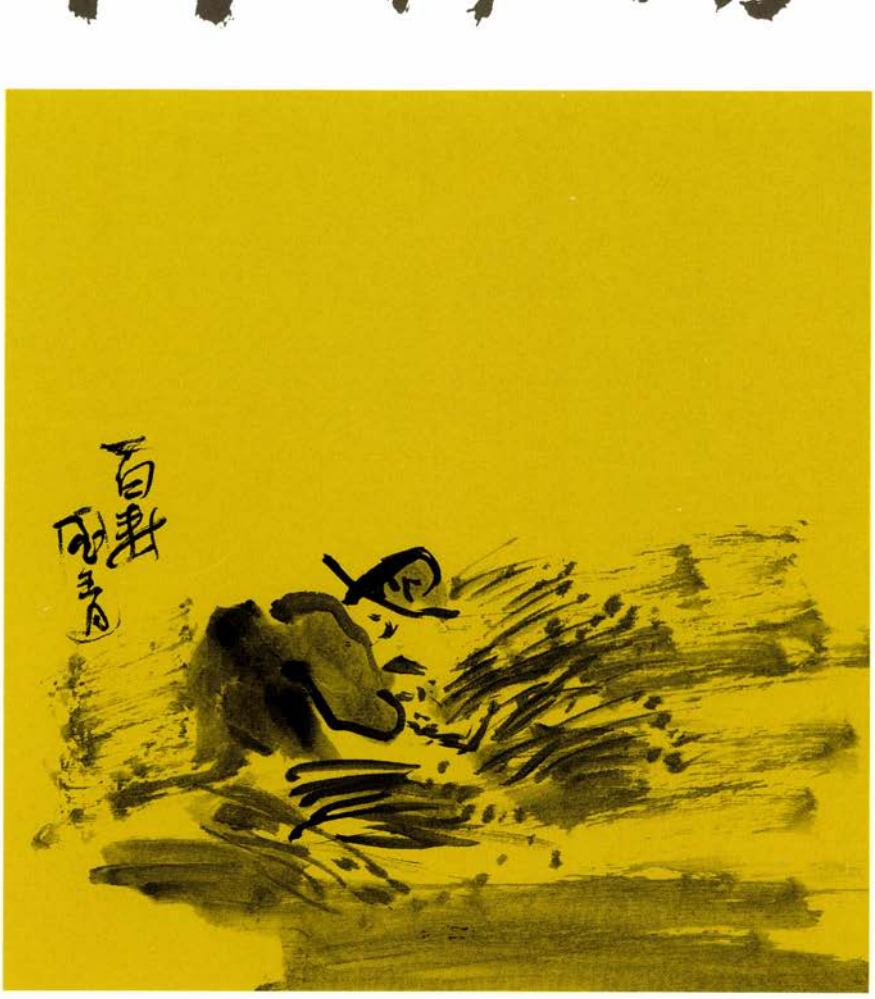
川柳塔

平成十五年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九一七号



日川協加盟

平成十五年度六賞発表

No. 917

十月号

第9回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と　き　10月5日（日）午前10時－11時
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3Ｆ生駒
（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441）
議　事　平成14年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成15年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と　き　同　日　　午前11時開場・午後1時開会
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4Ｆ金剛（中・西）
表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし　「古川柳のおもしろさ」　板尾岳人
兼　題　「揺れる」（大阪）江口　度選
「癒やす」（和歌山）松原寿子選
「午　後」（鳥取）白根ふみ選
「　絵　」（大阪）髙田美代子選
「　豊　」（北海道）大橋政良選
「当たる」（事前投句・締切りました）河内天笑選
◎各題2句・欠席投句拝辞
出句締切　正午・午後4時半終了予定
会　費　2000円（記念品呈）当日いただきます

＜懇親宴＞

と　き　同　日　　午後5時―7時半
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3Ｆ葛城
会　費　5000円
宿　泊　ホテル・アウィーナ大阪　8000円（朝食付）

○事前投句および懇親宴・宿泊の申し込みは締切りましたが、同人総会（同人のみ）・記念句会の当日参加も歓迎しますので、ふるってご出席下さいますようお願い致します。

主催　川柳塔社

連携プレイ

河内天笑

夏の高校野球が開かれる約三週間を、毎年タイガースは甲子園を離れて遠征に出ます。八月三日は遠征に出る前の最後の試合で、対中日21回戦を一塁側アルプス席で観戦しました。娘夫婦が早朝から並んで席をとってくれましたので、私達は午後三時ごろ球場に入っていい席（下から一七段目）に座らせて貰いらくちんです。

その頃から阪神の選手の練習が始まって、ランニングや外野手同士の遠投が見られました。目の前で見るアリアスは男前で大変な人気です。一時間余りで中日ドラゴンズの練習になります。去年まで阪神のストッパーだったバルデスが丹念にランニングをしています。そしてエースの山本（昌）の大男ぶりにはびっくりさせられました。

目の前をライトスタンドへ一直線にとび込む桧山選手のホームランなどで、この日もタイガースは七対一で快勝。今年の阪神、甲子園では勝率なんと八割を越えています。

テレビ画面で観る野球と現場のそれとではいろいろ異なった楽しみ方があります。すこし前までは試合前の練習、特に内野のトスバッティングやシートノックなど多分にアクロバティックな動きで観衆にサービスしたものですが、今回はそんなサービスはありませんでした。

テレビ画面では分からないものに、各野手の守備位置の移動があります。「王シフト」なんて懐かしい言葉を覚えておられる方も多いと思いますが、打者の習性で打球の方向をあらかじめ予想して、野手がそれぞれ守備位置を変えるのです。打者が変わる度、アウトカウントにより、また、ランナーが出ている場合、などなどその場その場で守備位置の微妙に移動する有様は球場で観る醍醐味の一つと言えるでしょう。ホームランやファインプレイは野球の華ですが、目に見えぬファインプレイを見せてくれるのも球場ならではのたのしみです。ダブルプレイを成立させる内野手の連携プレイは胸がスーッと致します。また、外野へ抜けそうなゴロを魔術師のように止めて一塁でアウトにするプレイは、まさに神技と言えるでしょう。

長い間句会部のお世話をさせて頂きましたので、句会の進行に関しては人一倍関心があります。語尾のはっきりした素晴らしい披講、間髪を入れずに返す大きな呼名、そして二度よみのあとの脇取のお返しの呼名と、すべてリズムよく運ばれる句会が私の理想とするところです。披講、呼名、そして脇取の呼名はまさしく「連携プレイ」であります。「今日の句会はたのしかったな」と思える素敵な連携プレイの句会を全員の協力でつくって参りたいものです。

座右の句
旅人も月もやがては去る砂丘　（薫風）

私の句
手に汲めば無色となりぬ青い海　松下比ろ志

川柳塔　十月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　連携プレイ……河内天笑…（1）
これからを楽しもう……政岡日枝子…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
自選集……（51）
水煙抄……板尾岳人選…（56）
平成十五年度　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞
茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞……（78）
■句集鑑賞『喜寿薫風』白日紅虹……乗原道夫…（88）
麻生路郎物語（22）……東野大八…（90）
愛染帖……波多野五楽庵選…（93）
誹風柳多留二四篇研究　59……（96）
茴香の花……藤田泰子選…（98）

これからを楽しもう

政岡　日枝子

小さな小さな川柳勉強会が、七月に呱々の声を上げました。

病気持ちで歩行困難な女性と、非常に多忙なため、時間に拘束される句会への出席が出来かねる女性と私の三人の会です。

勿論、会の名前はまだついていません。訪問看護ならぬ訪問川柳教室とでも言うべきでしょうか。

まあいいか、やってみようと私。

人情味溢れるこの方々、先ずお茶会から始まり、地域からの孤立とまではいかなくても、情報が余り入らないゆえどちらかと言えば、チョボラに明け暮れている私をアンテナがわりにして、世間ばなしに刻がたつ。

しかし、こういう流れの中から本当の自分を見つめ、住む場所の色になろうとしている独居の方々の前向きな姿勢が窺える。

そんなこんなで、本命の川柳といえば、短歌あり、俳句あり、標語あり、つぶやきあり、その中にやや川柳らしきものは、ほんのひと

「ラッシュ」……播本充子選…(100)
一路集「タクト」……山本蛙城選…(100)
「ソフト」……平松かすみ選…(101)
初歩教室「そろそろ」……三宅保州…(102)
秀句鑑賞「同人吟……川端一歩…(104)
水煙抄……浅野房子…(106)
■句集紹介『慈母観音』……波多野五楽庵…(107)
第4回 四万十川川柳全国大会参加の旅
四万十川の青い輝き……西内朋月…(108)
はるばる来にし……志田千代…(109)
九月本社句会……(110)
■エッセー 市電と川柳……中原比呂志…(114)
各地柳壇（佳句地十選／山口美穂）……(115)
柳界展望……(131)
十月各地句会案内……(132)
■編集後記……楓楽・希久子…(134)

座右の句

月見草ひとりの湖をもつ人に　（智子）

私の句

春の七草秋の七草母思う

小西小雪

つかみ。紙一面に何句となく書いてある。悲鳴をあげる前に、その集中力に思わず感激する。

「何を書いていいか判らないけど、何か言いたかったから」

そうです。それでいいのです。

俯いていたって、追憶にばかり耽っていたって、ストレスは溜まる一方なのです。

不完全燃焼で終わるより、楽しみながら、ワイワイ喋りながら、人生を仕上げていく意気込みはたいしたものだと、私もまたそのように生きたいものだと思います。

前髪をワインカラーに染めている一人が、「来月も楽しみに待っています」なんてプレッシャーをかけてくる。

私も楽しみにしてますよ。

さて一ヶ月たち、さすが短歌、標語?は無くなり、川柳らしき型になってきました。

彼女達はもちろん私も喜びました。そして、愈々新聞柳壇デビューです。この稿を書いている時はその結果が、幸か不幸か出ていません。

変わった事と言えば、鉛筆とメモと辞書の三点セットが、身近かに置いてある日常になったという、喜ばしい展開になったという事です。

川柳塔

河内天笑選

どの球もこの頃妻は打ち返す
遺伝子をこの頃いじり過ぎないか
白昼を背広で走る忍者たち
立派とは他人が決めてくれること
長男も次男も船を欲しがらぬ
意味もなく笑う日本人のクセ

鳥取県　石谷美恵子

カタカナ語溢れて漢字忘れられ
CMに目を輝かす一歳児
ゲーム機を考え出した人の罪
候補者の公約ぼかし入れてある
暇出来て金に不自由しています
嘴の黄色い親が子を育て

堺市　村上玄也

ああ夫婦やっさもっさのペアカップ
ポシェットも恋も女のアクセサリー
朝顔にしっかりせよと叱られる

和歌山市　木本朱夏

落し物届いたちょっと佳い話
片道の切符でジャンプする若さ
薄味に慣らされ頼りない命

鳥取県　新家完司

学ぶ気があればナメクジさえ教師
弱虫の顔で血糖値を測る
あきらめは良い　髪の毛はあきらめた
パトカーと救急車には道譲る
どんな顔で見舞いに行こう癌末期
腕二本抱き合うように出来ている

砂川市　大橋政良

標識を僕より犬が知っていた
善人の地獄を踏んできた匂い
卒寿まで生きれば母の歳になる
この人と心の底で丸くなる
ひょいと来て喋りまくってもう居ない
馬鹿らしい楽しみをする無駄遣い

京都市　都倉求芽

来た道を納得してる足の裏
首のばす心の中へ降る花火
消火用バケツにほうふらが元気
汗かきの家に買われた洗濯機
小気味よく西瓜ざくっと夏を切る
そこまで来てる夕立恋し屋根瓦

鳥取市　武田帆雀

慢心の背中に虫が這い上がる
外面はかごめかごめのお姫さま
インテリで美人で野茂の大ファン
寄らば刺す構えの蜂の巣の真下
割り箸で豆腐を切ってビヤ旨し
肩力抜いてスタイル良くなった

愛媛県　中居善信

淋しくてうっかり心許してる
酒好きで流されやすい男だな
好きなどとそんなに軽い物でない
饅頭の一つに妻が文句言う
やっとこの頃忘れ上手になってきた
男も女も平気で臍を出している

愛知県　早川盛夫

仕様がないから食べている倦怠期
半分は女性客なりビアホール
ハワイなど行きたくないね肥満体
満足な躯で心病んでいる
沈黙が一番怖い蟠り
ガム噛んで土にツバしてホームラン

八尾市　生嶋ますみ

朝顔を数えて今日が動きだす
比べたらあかん一生丸い鼻
三人の子を育てたが利息なし
人の名が出ないガリガリ飴を噛む
一匹の金魚不満の泡を吹く
少子化で老人社会パンクする

横浜市　清水潮華

お座なりの気休めとても罪深い
ネットでの買物当り前になる
五年先見守る余裕忘れられ
役割へ頭を下げる事に慣れ
うなずいて貰い治まる愚痴話
煩悩を静めてくれる忙しさ

弘前市　高橋岳水

政治家の舌の裏から出る疑惑
残高がゼロなら御の字と思う
死に下手となって馬齢を積み上げる
靴に足合わせた昭和史の誤謬
肩書きを脱いだ肩から陽に晒す
懸命に生きて絶えないかすり傷

黒石市　相馬一花

大物のミスを狙っているカメラ
セクシーな声にがらくたつかまされ
少年を嫌でたまらぬカブトムシ
カリスマの美女も帰れば胡坐かく
飲み屋ではお目にかかれぬ発泡酒

弘前市　福士慕情

手の爪を切ってから切る足のつめ
読経して直系親族と語る
輪の中へ入りそびれた蟻の鬱
また一軒ツケの利く店閉じられる
絶滅の危機にある種は守られる

弘前市　髙瀬霜石

青竹と一緒に過去を踏みつぶす
カラオケは下手を一番よしとする
若者の柩のような高級車
風邪引いた途端前言ひるがえす
年金もわたしも風に揺れている

弘前市　今愁女

音もなく太陽こぼす凌霄花（のうぜんか）
はまなすが低く広がりゆく砂丘
はまなすの実紅く熟れて夏終る
台風逸れて漁火あかい西の浜
晩夏から燃えはじめたは百日紅

弘前市　櫻庭順風

焼戻し古希が挑んだエベレスト
身動きも出来ぬ岩場で待つばかり
じわじわと襲いかかってくる寒気
だんだんと薄い大気が重くなる
わくわくとなる登頂する日のカルテ

青森県　西谷大吾

八月の空が壊れた物語
梅漬ける亡母待つごとく梅熟す
蝉鳴かぬ夏には山背ばかり吹く
畦道の右も左も休耕田
生き急ぐこともなかろう秋刀魚焼く

佐倉市　岡井やすお

いやがらせにじっと耐えてる不戦国
総裁があっての党と豪語する
自由利かず多い方へと巻かれてく
そうでした老人ホーム皆他人
仙ちゃんが今年は猫と言わせんぞ

東京都　清原悦子

イメージは同じと濁す久し振り
左手で描いた絵筆が生き生きと
旅支度終えてあくびを一つする
それ以上言えば危険な溝となる
もめ事を意外な人が片付ける

東京都　岸野　あやめ

すれ違う海の匂いのする男
すれ違う花の香りのする女
この上はころりポックリ雲の峰
鰻屋の老舗も江戸と浪花の差
老いてゆく身をしみじみと墓の前

東京都　後藤　早智

黙祷の鐘肺腑衝く原爆忌
五千余の名が慰霊碑に追加され
平和への老女の手話が逞しい
三月です健康ですと子の電話
水天宮参りがきっと効いたはず

横浜市　保田　絹子

婆さまはボタン操作の機器苦手
暗算と漢字まだまだ呆けはせぬ
擦れ違う度に警戒心奔る
白黒の映像ゆえに在るロマン
朝顔に映る晩夏の走馬灯

横浜市　菊地　政勝

朝市に旅が集まる宿ゆかた
手をほどきお化屋敷を先に出る
上乗せの値段にあったおまけ分
介護した障害の子がひとり立ち
開墾の苦労は見せぬ千枚田

横浜市　小野　句多留

物言えば唇寒い国の舌
結局は自分のための手摺りです
欲深な涙少しは聞いてやる
セントラル一足早い挽歌聞く
暇と金あっても夢のないお人

富山市　舟渡　杏花

最後通告めざしゆっくり裏返す
順番がなかなか来ない塀の穴
拗ねているうちに大福かき消える
たまさかの顔忘れずに釘をさす
石ころに似た宝石にしばられる

富山市　島　ひかる

空の青　風の音きく峰に立つ
すいとんを作る八月十五日
人前結婚甥から届く佳い便り
両親の思い通りにならぬ宴
長雨が上り立山見て挙式

滋賀県　中　宗明

現代は短絡的で怖い世だ
短冊に書けば駄作も映えて見え
サバイバル生半可では潰される
兄弟で金の貸借他人めく
宇宙から招待状が来る白寿

京都市　高島啓子

受付はあのネクタイと憶えてる
笛吹ケトル鳴らし只今化粧中
少女十一大人の鏡欲しくなる
飽きたとは言わず出直したいという
海へ来て答えの出ないまま帰る

亀岡市　井上森生

八十路まで生きると決めて朝歩き
石段で気力もテスト二百段
まだまだがまだまだまだといつまでも
そういえば初めて二人切りの旅（湯原温泉）
生き方を確かめ合える同期会

京都府　稲葉冬葉

夏そこに来ている抹茶かき氷
噂では死んでいる元気なわたし
やさしくてときには怖い酒だった
義理人情捨てる覚悟の自己管理
信楽のたぬきを笑えないおなか

京都府　丹後屋肇

外人が擬宝珠を撫でて風に立つ
出棺にボリューム上げる経の僧
流鏑馬の乾いた音が的を割る
風船のアルプス席で子は眠る
刷毛の先触れる縄文人の骨

大阪市　西出楓楽

目を瞑る会いたい人に会うために
どっこいしょ言うたび残り時間減る
昼寝する蝉のゴスペル聴きながら
話したらわかるだなんてきっと嘘
反省が年々くどくなってくる

大阪市　古今堂蕉子

プチ家出言葉軽すぎ中身重すぎ
地蔵盆　路傍の君も今日主役
海山に縁ない夏をすごす年齢
うっかりと亭主いること忘れてい
四十年身内になったり他人だったり

大阪市　神夏磯典子

果物の丸さはわたし諭すよう
油蝉よもっと鳴いてくれ終戦日
いい格好したらこの頃狙われる
死んだ方が得か保険のコマーシャル
ああ車椅子お互いに歳をとり

大阪市　板東倫子

末法か末世かこの世住みにくい
人間は不実ペットは裏切らぬ
今宵一刻憂さ忘れよと大花火
笑うたら損しますのか女店員
悲しいね刑務所満員と言う話

大阪市　川久保　睦　子

連休に手もち無沙汰の花いじり
大ジョッキ一気に猛暑吹きとばす
冷蔵庫賞味期限の締切り日
ふたたびの出合いを胸に花手桶
ポケットの一つに炎もえ残る

大阪市　小　糸　昭　子

貧乏を知ってる人のいもの味
縋りつくものが欲しくて仏様
悔しさは昔無くしたパスポート
水を買う事に慣れるという怖さ
一粒の種が荒野を喜ばせ

大阪市　町　田　達　子

お別れの河内音頭がよく弾む
帰省組去って静かな盆団地
盆僧の短い経に過去揺れる
極北の自然星野道夫展を見る
仕舞風呂で反芻今日のスケジュール

大阪市　本　間　満津子

ひとりずつ降りて終着駅近く
丸いもの集めて隙間だらけなり
海老で鯛申し訳ない御裾分け
どうでもよいので調子合わせてる
気休めに鍵は一応かけておく

大阪市　鈴　木　トヨ子

花火のように私を残し逝った夫
感謝の忌元気な体くれた父母
胡瓜みのれ美味しいモロミ待っている
世の色に染みてく息子信じてる
喉ぼとけ機嫌直して中ジョッキ

大阪市　玉　置　英　子

サングラス外したような目の手術
昼ソーメン明日もきっと昼ソーメン
大人には描けぬ笑える子どもの絵
台風の翌朝も蝉賑やかに
よく聞いて心の垣を取り外し

大阪市　渡　部　さと美

中年離婚果たし光っているおんな
出おくれて草ですませた蝉の殻
ようく噛むために玄米混ぜて炊き
耐える事知らずに育つ子が不憫
岩清水ちょろちょろ音にいやされる

大阪市　津　村　志華子

哀愁の露を抱いてる月見草
他人さんのプレッシャーには動じない
自惚れがすぎて孤独の影を踏む
アルバムに思い出たどる箸ぶくろ
どの彩にしようか秋の試着室

大阪市　津守柳伸

薄切りにする八月の土びんむし
湧き水の神秘へ威儀をたださんか
アイドルの素顔脚色する策士
莫山を気取り失敗せぬ習字
使い捨て時代認識して生きる

大阪市　津守なぎさ

今以上加齢させない基礎化粧
ウインドーを冬色にして涼を呼ぶ
真夜中のトイレ気合をかけて立つ
デパ地下の試食一巡して帰る
うっかりが増え生傷が治らない

大阪市　星野きらり

独り居は何してようとほっといて
欲捨てた日からからりと鬱も晴れ
昔菓子よ私のむかし知ってるか
夏祭り氏神様もくじで呼ぶ
芒の穂息をひそめて茎の中

大阪市　中澤伽羅

ごめんなさい今朝もパンです仏さま
外面は気楽とんぼに見えるらし
油断して出た溜息を笑われる
知ったふりまた勇み足してしまい
粗品だけお客の顔でもろてくる

大阪市　西川更紗

短冊に毎年同じ願い事
義理だけの祝儀包んだいい日和
PLの夜空彩る風物詩
青春を球に託して燃えさかる
恋をして服もルージュも派手になり

大阪市　前たもつ

カーナビにお伴させます新仏
暑気払いおはぎを食べて鰻食べ
水たまり好きでお城の土の道
問診へちぢんだ背丈書いておく
昼寝して半時ほどは呆けている

大阪市　寺井東雲

外見はどうあれ内臓見てほしい
熱愛でなくても夫婦五十年
人間を続けたいからめしを食う
無理矢理にバリウム飲んで胃を調べ
土地買ったまだまだお金残ってる

大阪市　川原章久

お目当ての娘の輪へ移る頬被り
笛の音のどかに浮かぶ海女の桶
父の魚籠釣った小鰺と買うた鯛
医者の顔今日も安心買うてくる
安うて美味い地元の人の行くめし屋

臨月のお腹と出合う佳き日なり
善人と錯覚されて肩が凝る
定年の計百聞と鱒二読む
一日に百人自殺する国よ
寝たきりが逝く悲しみと安堵感

大阪市　川端一歩

問診のウソが検査ですぐにばれ
しょうもない女と知らずツーショット
ふしだらに真夏日過ごす妻の留守
ブランドの鞄に女夢を詰め
一日を黙り込んでる休肝日

大阪市　鶴田遠野

七月を食べてしまった長い梅雨
強がりも酒が切れたら直ぐしぼむ
遺産分け母のオマケもついている
苛めてた嫁の介護に救われる
金婚で素直に言えたありがとう

大阪市　奥村五月

ぬるいけど文句言わない妻の燗
旨そうに飾り立ててるマニフェスト
面構え大きいけれど気がこまい
指定席決めてた呑み屋店を閉め
餌のいらぬ電動猫を飼いはじめ

大阪市　岩崎公誠

ひきこもる児らが出て見る流星群
壁のしみ昨夕マリアできょうムンク
咳すればそこだけ風が動くごと
もめごとはアテネの丘で勝負しま
焼け残る湯呑出て来る老舗かな（再興法善寺にて）

大阪市　浦田綏子

わたしより少し不幸で馬が合い
矢印の通り進んで迷う地下
すんなりと許してあげる嬉しい日
神様に意図ありそうな巡り合い
格言が骨身に浸みていて無口

大阪市　大川桃花

お隣が垣根の棘を睨んでる
返事もう鼾となって夫昼寝
鬼灯の赤くふくらみ墓参り
朝顔が海より深い碧に咲く
乳房痩せて包容力が萎み出し

和泉市　中川楓

ごろ寝とはいいぞ総理の夏休み
マニフェスト　リコール制は書かんやろ
やめてんか弔辞述べてという予約
火星接近浮かれる望遠鏡屋さん
変わりばえせんなフセイン変装画

泉佐野市　山本蛙城

極楽へ行く気の顔で聞く法話
割り箸をパシッと好きな出石蕎麦
ちょっとからスタート結局梯子酒
自慢した嫁が別居を言いにくる
政官財とても上手な隠し芸

茨木市　藤井正雄

太陽を弾く球児のエネルギー
盆の家仏と孫の入り乱れ
一日を無為に過ごすもそれはそれ
一昔みんな朝顔咲かせてた
梅雨明けを待ちに待ったと蝉時雨

柏原市　永浜加津子

浴衣着た孫に女を見る踊り
過去帳に知らぬ歴史が生きている
末吉に黙っておこう嫁身重
専用車気恥ずかしいと乗らぬ妻
血圧が下がり今度は血糖値

交野市　森本弘風

地球儀のたったふたりじゃないですか
旗色でふいに主張を変えてくる
玉の汗知らず天才などと言う
一番星心豊かに見た記憶
大物か本当は鈍いのだろうか

岸和田市　岩佐ダン吉

鈍くても時々ヒスを起こします
言いかけの言葉呑み込む苦労性
一度だけ買ってカタログ攻めにあう
ほどほどに化かし合ってる夫婦仲
計量のスプーンでだせぬ母の味

岸和田市　原さよ子

幼児死すその屍に涙涸れ
たそがれて妻との距離を計ってる
買い置きのたばこを出した気がねして
一円玉集めてビンが満ちてくる
叱られる意味がわからず腹が立ち

岸和田市　藪野けい子

毎日がスランプなのに食進む
爪を噛むくせ忘れてる立ち直り
此所一番貧乏揺すりしてしまい
商売気離れて客の愚痴も聴く
自画像と話して生きる答出す

堺市　山本半銭

人は人我は我なり青い空
まだ生きる刻みキャベツの好きな人と
そんな日もあったネアンタ　アン・ドゥ・トロワ
風は秋　日がわり山の幸海の幸
ダンジリの子サンドウィッチを食べている

堺市　志田千代

だめ押しを丸く言う人とがる人
くやしいが波を立てずに一歩引き
聞き違え内緒にしとく待ち呆け
人間のエゴだと思う氷中花
毎日が忙しすぎる幸もあり

堺市　西村　りつえ

白無垢で三つ指つくな泣いちまう
連れ合いに非の打ち所あってよし
妻の目で覗くとどんな僕だろう
子に個室与えて意志が遠くなり
うっかりがあるから留守居させられぬ

堺市　和田　つづや

朝寝坊低血圧で逃げている
しっかりと聞いていたのに鼾かき
とうちゃんの睨みがとんと通じない
転ぶでと子供に注意されてます
嫌いやと思てた人に助けられ

堺市　齋藤　さくら

四　五日の儚い恋よ蝉しぐれ
騒ぐ子を叱ってママに睨まれた
ハハハハと笑顔で躱すおばあちゃん
動じないあのおおらかさ見習おう
語り部の間合想像ふくらませ

堺市　源田　八千代

何事も一緒に回り出す絆
またひとつ夢のくずれる音がする
一歩引く事をおぼえてから粘る
思い出の話二人でくい違い
跳び越えてそれから足が震えだし

堺市　宮本　かりん

梅雨明けを待っていました壺の梅
頼りない二人の知恵を足して生き
肝心な事は覚えてない記憶
今日を見る眼鏡きれいに拭いておく
赤い服着ると自分の歳忘れ

大阪狭山市　矢野　梓

解放で恨まれているあほらしさ
飛び込みはあかんと言うて川浚い
台風がずかずか入る奥座敷
あの人も見ているでしょう窓の月
割り勘で素直に締めるクラス会

吹田市　野下　之男

くされ縁しっかり保険掛けてある
好きな子の靴を隠した日のいけず
コスモスの庭を渡って来たピアノ
台風一過舞台が回り風は秋
負けん気が後ろ見せない星条旗

吹田市　岩屋　美明

八月は過去と向きあう辛い日々
盆おどり花火に夜店浴衣下駄
そもそもはシャネルの5こそお仲人
解放感ことば行き交う露天風呂
ケータイは分身　ないと困ります

吹田市　瀬戸まさよ

カメラマンの中に詩人がいるテレビ
遊女幻想四十六歳芭蕉翁（みちのく秋日　2句）
伍長の墓はむかし娘を売った村
損得で友情諭す親も師も
ある悲哀教育勅語今も言え

吹田市　早川棲世

吹きだまり袋小路を出られない
耳鳴りの今日の鈴音調子いい
こだわりか人とは車間距離をとる
この歳でまだ猫に似た甘えぐせ
主治医にもたずね分らぬのが余命

吹田市　大谷篤子

三年も座った石の温かさ
正論を吐いたばかりに島流し
淡々と生きて賞罰何もなし
お役所の用語が抜けぬ天下り
仏前で背なへ聞かせる老母の愚痴

吹田市　穴吹尚士

わらべ唄手足は忘れない踊り
火も水も風もしっかり自我を持つ
キャッシュカードに現実を教えこむ
十年のブランクひとことで埋める
九十五歳いよいよ神に近くなる

吹田市　山本希久子

蜘蛛の巣を払えば少し見えてきた
しっかりと掴んだ杖は放さない
結構なご身分なのに不眠症
息が詰まる深呼吸でもしてみよう
その先を見たいならコマーシャルを見よ

高石市　浅野房子

愛の巣は華麗でないが温かい
性格は知らず顔みて好きになる
刃物より深い傷負うペンと口
頑なな気持を捨てて娘に甘え
母親は娘の恋愛が気にかかり

高槻市　井上照子

ありがとう旨い傘寿の祝い酒
敬老日その気になれぬまだ八十路
いつの間のマグマか老妻のサボタージュ
家計簿をきっちりつける赤いペン
頷いて信じていない目の動き

高槻市　江原秀夫

高槻市　傍島克治

生命線自慢の友が先に逝き
大和路の黄金の波に見た卑弥呼
天国行きのキャンセル待ちをしています
晩成を期待する子も早や五十路
まあ言えば薬味のようなおひとです

高槻市　左右田泰雄

同じ穴のムジナが腹のさぐり合い
ふっくらとペアの布団を屋根に干す
畳の目じっと見つめる膝頭
自己嫌悪空ろにひびく高笑い
湯上りに梅酒乾杯してねむる

豊中市　安藤寿美子

詩魂燦燦米寿薫風お待ちする
連敗で阪神らしうなって来た
お迎え火胡瓜の馬がまた倒れ
顔つきも寝相の悪さも親ゆずり
身障者手帳を使う事がない

豊中市　水野黒兎

少年の直球さても小気味よい
綿菓子の白さ甘さよ母の胸
入道雲名付けた人を賞したい
扇風機けだるく昼をかきまわす
入道雲はるかな下に人が住む

富田林市　藤田泰子

英雄の母戦争を嫌いぬく
向こうから開く扉に気をつける
ダイレクトメールに忍者の影がある
手は出さぬ負けると分っている勝負
さびしいな自分で買っている指輪

富田林市　中崎深雪

弱き者の痛みを知った松葉杖
トルコブルーの海の神秘にひざまずく
美しい南の島に核施設
権力の動きいよいよ見張る時
心まで洗いたくなる青い空

富田林市　片岡智恵子

ダイエットの話おやつを食べながら
灼熱と球児の似合う甲子園
いつか使う核まだ捨てぬ猜疑心
万歩計　医者の梯子をしています
言い訳の多い政治に慣らされる

富田林市　大橋鐘造

天秤にかけて選んだ妻と住む
あどけない顔が反旗を振る怖さ
偽善者の笑顔にまたも騙される
こぼれ種思い思いの花咲かせ
肩書と一緒に消えていく野望

河内長野市　井上喜酔

道草でときどき狂う万歩計
百均で掘り出し物の老眼鏡
年金で生きる楽しさ身につける
握手して心の中は分るまい
採れすぎた野菜配るのが大変

河内長野市　村上直樹

一滴の水にもあった命の芽
寡男でも生き抜くプラン出来ている
父さんのエプロン踊る日曜日
エイヤッと捨てたら見えてきた明日
一夜明け潮目選んだ仲直り

河内長野市　山岡冨美子

ロゴマークとれて身の丈知る名刺
少年の夢の兆しを摘む過保護
パラサイト自分の駅を探せない
待ちぼうけ駅の明かりが眩し過ぎ
知り過ぎて恋が壊れるシャボン玉

河内長野市　植村喜代

漁師から頂く蝦蛸なつかしい（子供の頃の堺　5句）
夕方に魚重なる夜市の日
しゃこ蝦のバケツ一杯どないしょう
おはらいは袂の着物に神参り
天さんまで海やったんよとおばあちゃん

寝屋川市　冨山ルイ子

十年も会わない友を見まちがう
もどかしいだろうに連れて行ってくれ
消費者金融と銀行手を結び
財産もないが借金せぬ暮らし
絶対の保証などない明日の朝

寝屋川市　山本三郎

覗き魔は忍者のように忍び寄り
くの一の忍者姿のアルバイト
炎天下いのちを燃やす蝉時雨
さんま焼く煙に猫が寄って来る
雨の降る夜は静かに一人飲む

寝屋川市　堀江光子

名水の噂の里の冷や奴
通と行く袋小路の京料理
一泊にしては嵩張る袋提げ
飼猫の女客には顔を出し
一日を言葉少なに終戦忌

寝屋川市　江口度

とき時は灰皿になる紙コップ
炎天の地下でラーメン吹いている
まるなろうまるくなろうとしてる水
蓮の花開く気合が聞こえそう
殺されてしまう　とき時顔を出す

寝屋川市　平松かすみ

ドクターに合掌されぬよう歩く
洗ったら縮む分まで買いました
使い捨てしよう旅のシャツパンツ
チンされて夢が溶けます冷凍魚
掃除洗濯のロボットほしくなり

寝屋川市　酒井勇太朗

僅かでも身銭は切らぬ社用族
食中毒恐い三食ビール飲む
賽銭は僅か鈴の音高らかに
少年が大罪犯しへらず口
拉致疑惑解決済と脅される

寝屋川市　坂上髙栄

川遊びの子等見当たらず休耕田
河鹿鳴く姿見えぬが立ち止まる
勝って泣き負けて涙の青春譜
もがいても一日たった二十四時間
同居する重たい腰をやっと上げ

寝屋川市　森茜

出発のポーズは誰も光ってる
日々多忙わが身ばかりを考える
湧水をくしゃくしゃにして菜を洗う
かまきりのプライド斧を振りかざす
気合負けした力士へも拍手する

寝屋川市　籠島恵子

モネの絵のように睡蓮咲かせている
ネムの花母が頷くように揺れ
こだわって付けた折り皺から破れ
三六五日の手垢包丁の黒光り
ヌスビトハギ付けて帰ってきた男

羽曳野市　安芸田泰子

輝いた日が額縁の中にある
手が掛からぬ頃には孫は寄りつかぬ
贅沢へ追い打ちかけるコマーシャル
煮え切らぬ話へビール苦くなる
酒ついで回る男にある打算

羽曳野市　徳山みつこ

里山の癖を知ってる登山靴
セコムしてもらっていますマイホーム
ケータイが鳴って話が折れました
おぞましいニュースに慣れてくる怖さ
身を低くしては避けてる流れ弾

羽曳野市　三好専平

装甲車追ってイラクの子が走る
熱帯雨林そのうち砂漠になるだろう
人の後追わない足は躓かぬ
とりあえずイラクに行くと駄々をこね
人間は所詮根っから博打好き

羽曳野市　川口信子

毎朝の顔を鏡に問うている
豆粒ほどの愛をしっかり離さない
心配がないのに白髪増えている
さり気ない言葉へ痛み分る人
数かずの微罪写経の筆で消す

羽曳野市　吉川寿美

つまずいた分だけ人間まるくなり
十階に住んでて高所恐怖症
よく辷る口が波紋を置いて去ぬ
合わす手の隙間もれたか願いごと
鮮やかな嘘さり気なく尻尾を探す

東大阪市　谷口義

海に出て魚は差別されている
全身を鏡に映し靴を買う
通天閣に一度も昇ったことがない
催促が出来ずだんだん遠ざかり
明日があるあさってもある楽天家

東大阪市　中岡妙

風に乗り墓守りに来た葉鶏頭
岩清水ごくっと心まで染みる
いい雨だ屋根の重みを嬉しがる
置き忘れされて包丁無気味なり
笑顔なら気持ち裏腹いつもする

東大阪市　北村賢子

嘘つけぬ顔が本音を言うている
八月の空へそれぞれ疼く胸
使い分ける顔持っている生き上手
今だけのいのちを燃やせ蝉しぐれ
優しさへいつしか心まるくなる

東大阪市　笠井欣子

モシモシと海の向こうの赤い靴
厭なことなんでも歳のせいで逃げ
妻ビール僕は飲めずに運転手
子ばなれはしたと言いつつ待つ電話
ながながと生き恥晒すのも美学

東大阪市　安永春

君が居るそれだけでいい僕の朝
病室に花はいらんと男部屋
城崎か熱海にするかアミダクジ
ギャル神輿黄色い声が傾いた
寄付金をたんと貼り出す盆おどり

東大阪市　指宿千枝子

お皿でも割ってスカッとしたい日も
割り算も掛け算もありわが暮らし
道連れは蝉に蜻蛉に昼の月
しきたりを重んじた盆　祖母の頃
ゆっくりの時計と過ごす小糠雨

枚方市　海老池　洋

自問自答止みそうもない小糠雨
物忘れ人にも言えず秋の風
謙遜も過ぎれば自慢めいて見え
父病んで弱り果てて菊の鉢
揉めながら妻と渡った橋の数

枚方市　宮川珠笑

奥さんは留守かと保険屋が帰る
CDに太鼓あわせて盆踊り
遅刻わびながら会議に横車
今日生きたあかし深夜の日記帳
胃カメラが終り入歯を返される

枚方市　二宮山久

最北の宗谷岬は雨の中
ハマナスも咲いて宿とる北の旅
停年をまってましたとラベンダー
野仏に両手あわせてする散歩
梅雨晴れの洗濯物の花盛り

枚方市　寺川弘一

星の数より知りたいことがうんとある
喜ぶ前に驚いてやる思いやり
停電に立ち往生する自動ドア
山奥の椿もぽとり散るらしい
臍出しルック女性だったら許される

枚方市　鈴木政子

年金の減額通知に諦める
トラトラの朝刊並ぶ駅売店
心ブラの髪へ吸いガラ降ってくる
五座消えて道頓堀も淋しいね
戦死の彼居ませば今年傘寿祝

藤井寺市　中島志洋

全身を耳にして聞くいい話
ひょっとこのお面の下にある涙
熱燗のお代わり欲しい秋の冷え
爽やかな瞳に嘘を引っ込める
ペンギンに蝶ネクタイを贈りたい

藤井寺市　太田扶美代

死に方を考えながら昼寝する
悲しくて少し威張ってみたりする
信じられないファックスも携帯も
ガラクタと言われています宝物
くくられたままでも恋愛はできる

藤井寺市　髙田美代子

太陽に負けたくはない赤い服
千羽鶴を折るのに忙しい十指
どこからが余生でどこからがおまけ
長いこと姓で呼ばれた事がない
下手したら死ぬかも知れぬダイエット

藤井寺市　鴨谷　瑠美子

提灯に甘い郷愁盆おどり
上澄みを捨てて素顔をお見せする
気がかりを生き甲斐にする母となり
本棚の隙間に過去が離れない
ざんざ降り無理な逢瀬はせぬことだ

松原市　小池　しげお

詫び状の返事は来ない方がよい
生きていることはいいこと生ビール
躓いた道で見付けてきた答
苦心したことは言わない丸い石
もう過ぎた事にしている再生紙

箕面市　岩津　ようじ

よりどころ首相の人気だけ与党
お盆です墓地いらんかな電話くる
赤い靴履いてるあんな歳の女
沢山の資格を持っている無職
柳人の闘魂ここに喜寿薫風

箕面市　出口　セツ子

核の無い未来を祈る原爆忌
初盆に返事しそうな遺影立て
ゆっくりと生きよう土になる命
親が子の機嫌とってる核家族
少しずつ譲って丸くするこの世

八尾市　宮西　弥生

乗りやすい女の指に光るもの
相田みつを座右の銘がたんとある
まだ欲と切れず女の中にいる
身の丈に合わぬホテルでひとを待つ
飾らない主義へ毛皮だ宝石だ

八尾市　内海　幸生

付け焼刃それでいいよと仏の瞳
紅葉は死に化粧なのお静かに
植物園月下美人を陽で咲かす
茶で箸を濯ぎひとりのめし終る
マニュアルを読んで悩んで聞きに行く

八尾市　髙杉　千歩

一日の早さ言い訳ばかりする
出直しは恥でないよと母傘寿
好きなことばかりへ逃げて片づかぬ
右左ずれるエアロの天邪鬼
神様がついてるらしい強すぎる

八尾市　宮崎　シマ子

台風に備えて花を家に入れ
脇役のセリフが多い村芝居
一本足で筋を通している案山子
後継ぎはちゃらんぽらんのひとりっ子
とことんまで言わぬこちらもつらいから

八尾市　神原　まさと

オーダーの服が昔を恋しがる
墓の草抜き易くして嵐去る
父母の背を流しています墓掃除
若返る努力続ける妻の頬
台風が去って残った非常食

八尾市　山本　宏至

そっと塵拾う姿を見逃さず
これからも妻が副木の旅だろう
あはははは皆とそろって笑いたい
回転すし孫に教える魚偏
ぼけが出て人間丸くなってきた

八尾市　吉村　一風

いい笑顔幸せそうでつい笑う
惜しまれて死ねるか妻にきいてみる
アドリブが暮らしの活気温める
花落ちてご苦労さんと水をやる
やさしさに触れられるから休まない

八尾市　長谷川　春蘭

点が線に闇に浮き出る大文字
初蝉の鳴く声聞いて眼を覚まし
チビッ子が真っ先に駈け海開き
傘立に覚えなき傘梅雨明ける
ビール飲む大大阪を見下して

八尾市　村上　ミツ子

長梅雨の後は台風大あばれ
だし醤油でひと味違うひややっこ
ご心配なくと言われて心配に
だめでもともと怖れずにやってみる
がんばれと責任のない外野から

八尾市　井尻　民

子らの声砂に染み込む青い夏
鏡台に魔女の素顔が見えかくれ
朝市のトーンを上げた頬かぶり
黙秘権妻が王手をかけてくる
水かけ不動のしずくに光る悲喜のうた

大阪府　籾山　隆盛

秋彼岸ほとけと対話深くする
お彼岸に牡丹餅にぎる母だった
引退の贔屓力士に代えがない
シンクロ競技プールに咲かす万華鏡
分類のゴミの日記すカレンダー

大阪府　澤田　和重

靴下の穴から暮らし推しはかる
強がりを吐いて孤独を振りはらう
マイペース守ってさりげなく競う
内緒とは知らずにお礼妻にくる
腹からの和解が出来て呑み直す

ひと呼吸おけば何でもない話
仲人は耳学問の一夜漬け
好奇心ふくらみ過ぎて眠れない
自慢するほどでないがと並べたて
油抜かれて歯車の盆休み

大阪府　米澤俶子

下積みがこつこつ築く人間味
我が家の味舌に合ったか肥える嫁
夫婦より強い絆の嫁姑
ほどほどの毒が私を変えてゆく
逆風が交差点から向きを変え

神戸市　山口光久

あとでするそのまますっかり忘れてる
何年振りばかりがつづくタイガース
妻の声いつも敵意のにおいする
不平不満あるから生きる張りが出る
宮仕え以上の気づかい定年後

神戸市　池田善守

言い訳にわたしの名前使われる
人混みで知ってる人とすれ違う
この橋を渡りひょうたん島へ行く
母の忌にあげ羽蝶々庭に舞う
許されぬことも平気でするゲーム

芦屋市　黒田能子

戦争はいやだいやだと蝉しぐれ
言い訳は止そうわたしが駄目になる
暗い世へ祭りが活気つれてくる
迷い来た人生だから味があり
キャリア脱ぎ親しみやすい貌となり

尼崎市　内田美也子

豊かさの証蛙の鳴く田んぼ
武士道が色濃く残る城下町
病院で怖い話を聞かされる
ヒーローは手荒い祝福を受ける
ずん胴の赤いポストが懐かしい

尼崎市　田辺鹿太

八月や過去回想の日が巡る
犬掻きで目標目指し泳ぎ切る
交番は無人で蝉が鳴いている
万歩計余分の肉を少し抜く
葱生姜夏の夕餉に涼を盛る

尼崎市　春城武庫坊

初盆のしきたりお寺さんに聞く
漫才を笑えなくなるふしあわせ
赤紫蘇の色は恋しい母のいろ
生年月日だけは間違わずに言える
エンゲージリング肥える気配で抜いておく

尼崎市　春城年代

尼崎市　長浜美籠（澄子改め）

七年の月日を思う蝉の声
老いたとは言うまい明日よ開けゴマ
私と青春してるハワイアン
一歩先まで立ち入らぬ電子辞書
花も実も手折らぬ内が美しい

尼崎市　山田耕治

ゆっくりと起きて独りのカレンダー
思い出も捨てられません症候群
傘の絵を書かれたことのある二人
群羊帰る駅の階段
託老所着替え持たせて手を握る

伊丹市　山崎君子

山小屋は特等席よ遠花火
お迎えだんご孫の帰省を待ちながら
五山の火モダンな浴衣若夫婦
モナリザも平和を祈る温い笑み
木の匂いはき出すように鉋ひく

三田市　北野哲男

元気よく孫は甘ぁい方へ来る
天声人語ゆっくり呆けるために読む
年金の蜘蛛かなピンと巣を張らず
朝ドラがロビーで済んでバスが出る
自由食個人負担のことらしい

宝塚市　嵯峨根保子

大阪の女で義理に熱くなる
ロッカーへ行き着くまでの八重洲地下
借金も無いのに首が回らない
ライバルに炎の丈を悟られる
目の手術したらお化粧したくなり

西宮市　長谷川淳

缶詰が好きな夫へ妻の愚痴
フィルムが何度も切れた傘寿まで
バス市電消えて町名判らない
蝉止んで満を持してる秋の虫
球場の空にはヘリと赤トンボ

西宮市　亀岡哲子

無添加を確認出来たパンの黴
ふるさとの今確かめに行くツアー
揺れながら笑い絶やさぬヤジロベー
二世帯を自由に往き来猫と孫
片耳を塞ぎ電話の蝉しぐれ

西宮市　門谷たず子

不動明王滝の霊気を持ち帰り
喜びと悲しみ交互夏の雲
炎天に義理一つ抱く墓まいり
ハンドルの遊びこの頃忘れがち
思い切り悪くて自己主張ばかり

西宮市　山本義子

変換キーときにユーモア語録出る
不義理には頓着をせぬ歳になり
京菓子に日本文化は厳とある
まだ勘で歩ける道がある余生
年金枠で十分食べて遊んでる

西宮市　西口いわゑ

二日月あれは天女の窓だろう
くどくどと言い訳してる負の境地
祈るよりすべを知らない母である
ジャンボくじシャボン玉にも似たるなり
幸せを追いかけ転んでばかりいる

姫路市　古川奮水

焼酎の試しに釣られボトル買う
牛乳でテンポを合わす休肝日
混雑も勝利の余韻電車乗る
禅寺の正座に足を奪われる
寝不足に弱音は吐かぬ旅道楽

兵庫県　大谷幸次郎

一邑を洗い夕立遠ざかる
丑の日の鰻人間恐怖症
渋皮の少しは剥けて初帰省
サングラス濃い人もいる墓参り
日焼けした球児の上げる砂煙

奈良市　天正千梢

杉花粉ふとん干すのも気をつかい
石庭に謎かけられて目をつむり
ふる里の山の起伏にいやされる
今日の妻無理を言うてもおこらない
金メダル人は上下をつけたがり

奈良市　米田恭昌

創世期のアダムとイブに戻りたい
友情の無利子無期限無催促
ラブシーン醒めた眼で見る子ども
少子化に子離れ出来ぬパパとママ
ITの流れに乗れぬお父さん

生駒市　飛永ふりこ

感情に流れぬ太い拳持つ
ちゃん付けで呼ばれて過去が舞い戻り
匙加減すると喧嘩が間延びする
兄弟のように話せる元仲間
せいいっぱい存在知らす蝉時雨

橿原市　居谷真理子

ハイテクのオフィスで辿る獣道
皓皓とコンビニ人は闇を抱く
別れると決めた男に出す地声
昼の酒ちあきなおみを聞きながら
意志の弱いやっちゃ煙草をやめよった

人生ゲーム試算誤算をくり返し
のりかえの心配ばかり女旅
絵手紙のバラが恋していると言う
見届けてやれぬと思う子の未来
頼ること甘えることを忘れねば

橿原市　安土理恵

さようなら駅の別れにある演歌
焼き肉の誘いふり切りつつ家路
どん底で見上げた月は母に似る
男運まだひょっとする赤い服
褒められて生きる意欲がどっと湧く

香芝市　大内朝子

燃える秋画布いっぱいに筆躍る
行間に熱き思いの月見酒
ここだけの珍味箕面のもみじ揚げ
大輪をがんじがらめの菊花展
ノクターン鍵盤躍るピアノソロ

大和郡山市　坊農柳弘

トラ優勝頓堀さらいスタンバイ
夕焼けの少女トンボと響き合う
人生のガラクタたんと溜めてある
我を折って少し人間見えてくる
リストラの河童の皿が干し上がる

奈良県　渡辺富子

初孫と出会う白髪を染めにいく
天使来る孫の背中に羽根をみた
乳のみ子の匂いはほんにやわらかい
西郷どんと呼べば眉から笑いだす
頂いた鯛みぎに左に持て余し

和歌山市　楠見章子

立秋や切手一枚旅に出る
千切られた夢も道化師だったのか
風呂敷に包むこころを買いにゆく
訣別へとても重たくなる秘密
似顔絵のわたしも歳は隠せない

和歌山市　西山幸

故郷の風は稲田を走る頃
夕凪に盆の仕度をする半裸
折角の気合がへこむ炎天下
一杯のビールが夏を和らげる
善人と飲んで私を浄化する

和歌山市　榎原公子

むなしくて亀裂の溝がうまらない
さりげなくつねって様子読み取ろう
仮面のなかで納得出来ぬ日の涙
ひたすらな夢星空に赦される
運命とや悩みを通過して女

和歌山市　松原寿子

長梅雨が明けて嬉しや心太
太陽が眩しくなって夏休み
ご機嫌を尋ねてくれる薬箱
神様がくれた休暇は白い部屋
嫁った子と話が弾む昼下がり

和歌山市　玉置当代

バスツアーまたあの人が戻らない
でぼちんの絆創膏と二日酔
使い回しされて輪ゴムもくたびれる
三文判と胃薬だけはポケットに
湿っぽい話はよそう大ジョッキ

和歌山市　古久保和子

ほんわかと余韻残して友帰る
たむろする若者の目が淋しすぎ
語尾荒れていつも淋しい人なんだ
夕立を待ちくたびれる夏野菜
鈴虫もメダカも友の贈り物

和歌山市　細川稚代

六甲おろし聞くたび倍になる元気
今年また無事でお盆の墓参り
迎え火を焚いてその後を語り合う
親の目にどの子も光るものを持ち
男気を出して財布の軽さ知る

和歌山市　吉村さち子

真夏日も応援楽し家族の輪
恋あかり胸に抱いてる盆の月
気合十分荒波越えた夫婦舟
生きている証でしょうか生臭い
おふくろのレシピは心目分量

和歌山市　松尾和香

年金の気楽外野で貝になる
闘病へナースの笑顔神に見え
リストラを支える妻は楽天家
弁解のたびに墓穴を深くする
芸のない妻にはあったいい笑顔

和歌山市　青枝鉄治

ガイドさんの指の先より秋が見え
オレンジのタオルが少し売れ残る
ハーレムの鯉はうろこを輝かす
叶姉妹のバストを重たそうに見る
アリバイに持って帰った箸袋

和歌山市　福井桂香

振り出しへ戻って風の向きを読む
人の情けをふるいにかける一人部屋
あの世この世の真ん中辺か現住所
ご近所とおんなじ花が咲く平和
やることが目白押しです老けられぬ

和歌山市　桜井千秀

和歌山市　牛尾緑良

黙祷のあれから五十有余年
綻びを互いに知っていて家族
万華鏡の中で戯れ合う夫婦
自立とも放し飼いとも母ひとり
定年を無事越えてきた後頭部

和歌山市　福本英子

夏休み子供の声がする隣
赤メダカ孵化三日目のやんちゃくれ
卵割る今日はお盆の十四日
戒壇で慣れてくるまで目をつむる
お盆来ぬ間に秋連れて法師蝉

海南市　三宅保州

心斎橋並みに賑わう河童橋（避暑旅）
マッチ箱に蟻乗った如黒部峡
室堂に期待どおりの夏の雪
慰霊碑も忘れてならぬ黒部ダム
晴れてさえいたらと口惜しがるガイド

海南市　堂上泰女

タイガースの優勝読んだ川掃除
就職難祈りの鶴に飛び火する
紀州ぶんだら男の指も撓うてる
主婦連のパワー全開夏祭
ゴッホの絵見てるようです夏の山

和歌山県　中後清史

善人の仮面へ増える義理の数
少しだけ翔んでみようか神無月
足踏みの跡青竹の皮にある
貧乏の頃の家族は温かった
並ぶのは性に合わない長い列

鳥取市　宮脇道子

敗け力士大きな背中悔しがり
待つことの楽しみを知る老いの日々
この夏は路の迷いかまだ寒い
命少し買い増しても夢みたい
老いの牙剥き出しにして襲ってくる

鳥取市　杉本孝男

人情に触れる小さな旅が好き
いつまでも笑顔の続くはずがない
悪の芽は親の死角でよく伸びる
靴下の穴から若さ溢れ出る
天ぷらへすぐ変身の野草たち

鳥取市　福島庸二

盆迎えにぎわう墓に蝉しぐれ
太陽の季節がくれる小麦色
あさがおに今朝も元気のエール受け
短所から人間らしさ滲み出る
波長合い幸せの波押し寄せる

雨止んで笑いぐすりを飲みに出る
子猫にも甘く見られている私
腰痛にせっせと食べるカルシウム
阪神が勝ってお祭り近くなる
ひまわりが元気な庭にする真夏

鳥取市　録沢風花

はるばるの精霊と会うおがら焚く
生かされて百態ドラマおもしろい
閣僚のセクハラ騒ぎ格差見る
喉仏の不可思議な謎未だ解けぬ
新天地タマチャンきっと元気付く

鳥取市　山本益子

窓少し開ければ違う風も吹き
天高くおいしい物が多過ぎる
朝の音いつもの順に聴えだす
運不運　謎のまんまに歳をとり
金と物余って愛に飢えている

鳥取市　植田一京

太陽が傾くころに出る元気
八つ当たりすればむなしさだけ残り
我が家には子供ニュースがよくなじむ
後戻り出来ぬと知らず渡る橋
嘘もある自分史だから面白い

鳥取市　岸本孝子

スーツにし母の遺した羽織着る
私のアップ写真で皆笑う
小さい梨大きな芯を持っていた
ワープロがヘルプ使えと急き立てる
小学校増築をするニュータウン

鳥取市　有沢せつ子

傘寿へもおんなじ鬼を連れて行く
百薬の長がマイクを放させぬ
老兵はバトン譲れば愛される
向かい風受けるとファイト湧いてくる
残り火を楽しく燃やすネオン街

鳥取市　美田旋風

美辞麗句並べて今日は披露宴
束の間の晴れ間慌ててふとん干す
あんぐりと歯医者の椅子は隙だらけ
先に寝た方は極楽高いびき
風吹いてハンガーのシャツよく踊る

鳥取市　永原昌鼓

人の価値不運の時に試される
少しずつやればと肩の力抜く
自然体私の好きな言葉です
ひとまわり大きくなれと言い聞かす
支えられ生きていること忘れまい

鳥取市　春木圭一郎

鳥取市　夏目一粋

心臓を突き刺すような肩叩き
はるばると来て引き返す休館日
ときどきはこころ分解掃除する
軒下を燕に貸して徳を積む
人の世は歳の順とはいきません

鳥取市　倉益一瑶

サバイバルわたしも渦の中にいる
しっかり者と言われて傘がたためない
老いてなおあの煌めきはなんだろう
忘れたいことが渦巻く夕暮れよ
翼のあとがしっかり残る老母の背な

倉吉市　野口節子

ハートまで根ぐされしそう雨続き
座を蹴った男の背が燃えている
ブランドに群がる列は脛かじり
祭り囃子が轟き渡る腹ん中
子子孫々祭マニアの血が溢れ

倉吉市　松本よしえ

笹舟は水の流れに逆らえず
バランスに苦心しているやじろ兵衛
蛍見に行こうと裏の戸をたたく
はまなすの可憐が棘を従える
監査役むかし栄えた大地主

倉吉市　牧野芳光

眼鏡拭くまなこの曇りだと気付く
どんな嫁が息子にくるか見物だ
一徹で恥を知ってる人が好き
くたびれているアフガンの白い鳩
原稿の半分くらい削られる

倉吉市　最上和枝

バランスを一途に産んだ二男二女
湖のしじみが自慢城下町
音無しの構えで癌の芽が進む
首飾りれんげの花に蜜匂う
商店街栄えた夢は今おぼろ

倉吉市　森川あらた

謎をもつ人に興味がわいてくる
喧嘩する相手がおってがんばれる
夢をもつ人のこころは腐らない
うがいするとき大声を出している
来客がなくても部屋は掃除する

倉吉市　山中康子

球児らの熱に老いの血さわぎだす
苦虫をジョークで飛ばす孫の知恵
こぼれ種助け求めず花となる
ていねい語そっぽ向いてるちゃっかりや
色白に変えるメークは宝もの

倉吉市　米田幸子

親に似ぬあの子は神のミステーク
堂々と夫をあごでこき使う
神様の死角で爪を研いでいる
そのうちに大事な人の名も忘れ
寝たいだけ寝さしておこう妻の乱

米子市　野坂なみ

イラク法もうきな臭さ付きまとう
抜け切れぬ訛肩身がせまかった
ポリープと長い妥協を断ち切った
蜘蛛の糸さえ輝いて夜が明ける
平凡な余生へ旅を欠かさない

米子市　政岡日枝子

あたたかい手紙とび交う空がいい
新しい服が無言でふえている
新しい友はフラダンスが出来る
座ってるだけで給料もらってる
フルーツパーラーやっと女らしく見え

米子市　林瑞枝

太陽は心のすき間まで照らす
ほとばしる感動月の耕三寺
モネの睡蓮再現をした湖の花
駐車場の地主東京へ行ったきり
追憶のあの日へ飛ばす竹とんぼ

米子市　木村春枝

古里のお国訛りが出迎える
ぴったりと合わなくなった鍋の蓋
年重ね図太く生きる野辺の花
ぎりぎりの我慢の線が揺れ始め
秋日和研かえして登山靴

米子市　中井ゆき

まだ生きるつもり夏物バーゲンへ
妥協したわけではないが引いただけ
ぐっすりと夜明になってねむりこむ
時々は風に絆をゆすぶられ
夏花壇黄色い色がふえてゆく

鳥取県　村上信子

米不足あのころ南瓜うまかった
打ち水の終りの水が風を呼び
暑い日に熱いうどん食べている
ごめんねが言えず握手もできぬまま
厄除けの古いお守りさげている

鳥取県　奥谷彩子

二枚舌油をぬって待つ選挙
飽食の肥満を防ぐ万歩計
売り言葉発酵させてうつ溜まる
軽い指切りで低温火傷する
連日の殺人記事はななめ読み

鳥取県　山本正光

猛暑での熱い天そばなお美味し
今脱いだステテコ姿に客がくる
浅漬けの胡瓜や茄子の味と艶
花回廊ムーンライトの避暑気分
日に焼けた元気な子等の歯が白い

鳥取県　西川和子

この凪が続いてほしいホスピスよ
衰えの進む確かに下り坂
トンネルを出ても濃霧に阻まれる
世の流れ確かな音が拾えない
育ち盛り抱えラッシュになる厨

鳥取県　澤裕子

子と孫をスパイに仕込む嫁姑
サバイバル風の流れに逆らわず
謎解けたとたんに夢は冷えていく
ふるさとに立つと原点思い出す
最大の怪物それは天だろう

鳥取県　西原艶子

はじめてのテレビ録画の椅子にいる（鳥取まるごと505に出演）
純情を絵にしたような男（ひと）であり
別れたり結ばれたりと縁不思議
骨董品時間に耐えた艶があり
掴み取りなどと命をもて遊び

鳥取県　谷口次男

悲喜劇を演出するやセミしぐれ
朝市に虫の如くに人群れる
何万人ラジオ体操ああ平和
散歩する犬はうんざりした顔だ
青虫が青くなるほど野菜好き

鳥取県　田村きみ子

歳だけは内緒にしとこ忘れたい
煌いて料理してます新メニュー
コスモスが揺れてる人を恋うように
昔の名で誘われて行くラーメン屋
笑うまで待ってやりたい栗たわわ

鳥取県　前坂なお美

面倒なことも避けては通らない
唸るほど金があるから喧嘩する
ふるさとは幼い恋をそのままに
腑におちぬこと何度でも聞いてみる
胸が鳴るあなたに会える日ですから

鳥取県　吉田孔美子

平等のアンバランスをもて余す
おっぱいふたつバランスの原点よ
バランスの崩れて恋は成就する
宍道湖の夜明けに憑かれ越して来た
体内に進むものありドック入り

火を切ったつもりの鍋がこげ臭い
仮病して夫の愛を確かめる
スイカ畑カラスが先に味見する
親子でも茸の出所知らぬ顔
青春の苦しいドラマ書いてみる

鳥取県　太田幸枝

旅終えて真っ先に見る稲の顔
祖母からのとっても軽いプレゼント
減反のたんぼ涙をかくせない
お互いに手の届く距離守りたや
小包を開けて初秋の風を知る

鳥取県　石尾かつ乃

防空壕の跡地に植えた木も繁り
ポイ捨てをされて女が泣く港
このカーブ曲ると耳がツーンとなる
サマータイムの五時に晩酌しておれん
溝さらえ蟹もブツブツ僕もブツブツ

鳥取県　土橋はるお

赤とんぼやっと遊べる陽を貰う
ほおずきも真っ赤に熟れた花手桶
咲き誇るカンナの中で溺れてる
梅雨あけて蝉も命を燃やし切る
蕎麦すする音が聞こえる無人駅

鳥取県　土橋睦子

札束にやっぱり神もよろめいた
怪物になった今年のタイガース
音が出る物はなんでも蹴って見る
エネルギー真っ赤なトマト出し切った
泣き上戸笑い上戸と飲んでいる

鳥取県　蔵本悦子

さわやかな朝生きてることに掌を合わす
秋海棠が咲いて昔を語る庭
年金減額寺の志納はふえてくる
花火ドン続く平和を祈ります
衒いなく話す親子に明日がある

鳥取県　佐伯やえ

一生を笑いで通す三枚目
ご無沙汰を詫びて書き出す頼みごと
バーボンのオンザロックに溶けるジャズ
職退いて余裕を妻と分かち合う
嬉しさではちきれそうな娘のお腹

松江市　三島淞丘

熱帯夜あの人偲ぶ遠花火
計らずもぎっくり腰と二　三日
こけむした墓よいずれは吾が住家
手作りのオクラいとしく産毛なで
宍道湖のしじみおいしい朝の膳

松江市　佐野木みえ

松江市　安食友子

迷ったらハムレットさま想い出す
おちょぼ口守りとおした性でした
長い道ピエロになったから素敵
納得して長い睫も静思する
ぞくぞくとトンボの目玉見るわたし

松江市　川本畔

ぎしぎしと疑心暗鬼が音たてる
天命だろう朝のお葬式だよ
うなだれる視線の先に花の首
ささやかな倖せだったつゆ草よ
特別にミルクティーなど供えます

松江市　銭山昌枝

Tシャツとジーパンで来るお寺さん
どの局も同じニュースに有識者
簡単に痩せる広告信じない
毒舌の裏の愛には気が付かぬ
理不尽が通るお寺の奉賀帳

出雲市　園山多賀子

崇拝をされて向日葵陽を拝む
川柳のアトラクティブが我が命
父母の愛のギャップに子が揺れる
人偏を書いて人間辞められず
褒め殺す言葉ビールの泡も消え

出雲市　竹治ちかし

パソコンをつなぐと見える子の未来
ひたすらに進み　と金になりました
液晶の中空想をとじ込める
果物もうっかり季節間違える
街に出て汚れた水になった川

出雲市　伊藤玲子

気遣いがすぎると気がねしてしまう
いつからかメガネ私の一部です
折角の逢瀬携帯切り忘れ
夏が好きゆかたで踊る大きな輪
ハイビジョン滲む涙も写しだす

出雲市　岸桂子

一石の波紋の中にいるわたし
積木また一つ重ねた日記書く
時々は虹と遊んでいる山だ
青年を持続しているおじいさん
思い切り欠伸するしかないわたし

出雲市　小玉満江

雨続くポチが悲しい声で泣く
おばさんと言われなくなりおばあちゃん
どくだみが集団で咲く夏盛り
団子汁おいしかったな終戦忌
それぞれの施設へ出向く盆踊り

出雲市　城　多　喜

梅雨あがるこの世をパッと光らせて
淋しさを攫ってくれた南風
二つ三つ頬叩かれて目を覚ます
腕振って大きな顔で歩いてる
消してみる今のわたしの嫌なとこ

出雲市　吉　岡　きみえ

この雨が止むのを待って逢いに行く
ホップ利くビールがほしいせみしぐれ
幸せと思えば笑顔わいてくる
いい人いないか孫にきいてみる
平均寿命のびた蛙の面がまえ

出雲市　青　山　久　子

猫を飼う人のさびしさわかる猫
わたくしの氷を溶かす仕舞風呂
ジェラシーの刺が時どきさしにくる
山陰のおぼろになれて気もおぼろ
明日のことわからないからよく眠る

出雲市　佐　藤　治　代

太陽が笑う私も笑わねば
今のまま願う幸福色の中
青春の甘さが残る舌ざわり
神さまも知っていなさる悪い癖
血の流れだけは正常らしい脳

出雲市　小白金　房　子

十指みな動くしあわせ産着縫う（六人目のひ孫）
大ジョッキ女真夏の味を呑む
くよくよをするなと月が味方する
八十円貼って真心さし上げる
盆客の話仏も仲間いり

島根県　森　茂　美

砂噛んだ思いなつかし途中下車
宍道湖がそんなにいいか渡り鳥
甚平着て郵便局の窓に立つ
病妻に言う頑張らんでももういいよ
妻が逝く夫婦ドラマの花道で

島根県　伊　藤　寿　美

どうしよう夫が子供になっちゃった
何故何故と海に問い山に問う
目覚めればひとり病夫の匂いも残る部屋
銀河鉄道手を振っている病夫
勾玉の形で病夫が眠りこむ

倉敷市　小　野　克　枝

運命のいたずら愛が憎を生む
トンネルの闇に咲いても花は花
かすがいのはずれた夫婦でも夫婦
休みなく落ちる点滴なに思う
過ぎ去った未練と笑い話する

倉敷市　井上富子

底辺で一緒に野宿したあいだ
料理より皿にみとれる通の箸
漬物でもう一杯と言う茶碗
星の降る棚田を守るイボ蛙
キャンセルと無駄足ばかり日暮れ坂

岡山県　大石あすなろ

年輪を煮込んで夫婦丸く老い
目の保養ウインドショップして回る
医者に行く予定書き込むカレンダー
体力の衰え口でカバーする
夏まつり埴生の宿もにぎやかに

広島市　森田文

子等のこえ街が明るい夏休み
迫りくる軍靴の音よ八月忌
馴れてきて挨拶少し長くなる
長生きの秘訣丈夫な歯に感謝
雨しとどなかなか来ないバスを待つ

竹原市　正畑半覚

花で目をあらう心の眼を洗う
タンポポの綿毛が翔んで子が巣立つ
口笛がすきコスモスがよく揺れる
散歩道花に呼び止められ会話
宝石のような華より野辺の花

竹原市　古谷節夫

脇役で学んだ知恵が効いてくる
補聴器で雑音だけは確と聞き
ユーモアのランプときどきつけて秋
鰯雲一句したため出すハガキ
ライバルも酒量が落ちた縄のれん

竹原市　森井菁居

田舎での秘密はとかくばれ易し
感動的シーンをカメラ見逃がさぬ
災いのもとの多弁を戒める
計算ミス嗤う昔のコンピューター
負けん気の強さは老いた母ゆずり

竹原市　岩本笑子

扇風機斜めに眠るうちの猫
標的の向う側にもあるドラマ
一本の鰻を夫婦もてあまし
魚へんいくつ覚えた箸袋
バニラアイスさあこの夏を乗り切ろう

竹原市　三宅不朽

命日の母の形見だあの星も
散りたいだろう散れぬ造花の薄汚れ
上げ膳据え膳妻の味にはとうかりし
酒飲めぬ男が土産酒ときめ
嗚呼とのみ竜飛の風が黙らせる

竹原市　小島蘭幸

一番背の高い向日葵は父だ
墓掃除蝉が一匹来て止まる
墓の水古い井戸から汲んで来た
八月十五日長女も二女もご出勤
熊ん蜂が飛ぶ青空にある平和

広島県　藤解静風

老妻とゆっくり座る木のベンチ
情熱が放物線を画いて落ち
逢いたいと書いた手紙が迷いだす
言い訳はしない黙って笑っとく
夫婦いまルームメートとして生きる

広島県　福島万年

メダカ孵化ミリの命が競い合う
クロールもバックも孫に追い越され
負荷下げてスポーツクラブ続けます
夏休み孫台風を迎え撃つ
休んだら動かなくなる亀の足

宇部市　平田実男

肩書きが目線を高く高くする
肩の荷を降ろせぬままに逝った父
減反の罰が当る日きっとくる
いい汗が流す心のわだかまり
自殺する勇気自殺をせぬ勇気

美祢市　安平次弘道

添え書きがあって気になる歳になり
地球儀を回せば過去が浮き上がり
夢のような話恋とはすてきだな
人間の罪か温暖化が進む
投函をすまし昨日は振り向かず

熊本市　永田俊子

戦中戦後語りつくせぬクラス会
年取ってせっかちになった時刻表
お安い御用あなたに花を持たせます
冷静に見れば花火という自爆
しんがりで私の歩幅狭くなり

熊本県　岩切康子

映像に合掌をする原爆忌
立腹はしないと決めて深呼吸
煽てには乗るまい黙って聞き流す
筋肉が眠らぬように水中歩
練習をサボり芽生える欠ごころ

唐津市　久保正剣

塁審にない軍配の差し違い
ワイドショーを暇にさせない十二歳
ダルマに目入れると公約仕舞こむ
嘘吐きをまた威張らせる投票日
藍浴衣すらりと寡婦の寺施餓鬼

唐津市　山口高明

列島を泣かせて回忌裕次郎
不況下に犬猫フードが良く売れる
爆竹の音賑やかに葬の列
町内に元祖が二軒のき並べ
猫舌のおとこグラタン持てあまし

唐津市　市丸晴翠

お財布で色どり競う診察券
オゾン層破壊の罪もある戦禍
あいさつに花実も育つ散歩道
恋を知り親の目盗む娘に育ち
思い出が邪魔して納戸片付かぬ

唐津市　樋口輝夫

逆転を祈る盛り塩ベンチ前
母の里ご馳走だった塩鯨
ハイハイの孫が昼寝の顔叩く
手放した田圃今年の作思う
文化人のつもり振りまくカタカナ語

東かがわ市　清川玲子

愛を盛る器はどれも欠けている
夢紡ぎ生きながらえる二人坂
スポットは当たらぬままで黄昏れる
タイタニック海に沈んでいるロマン
海開きかき氷だけ食べに行き

東かがわ市　伊勢八重子

盃がおはこの唄を誘い出す
小休止冷えた紅茶でよく喋る
孫帰し楽しい疲れ置いて行き
衣食足り心に渇き増すばかり
善と悪心に同居して困る

東かがわ市　池内かおり

プチ整形したい鏡とにらめっこ
嚊天下天の岩戸の昔から
見栄三分あとは本音で生き延びる
困ってる路上駐車が威張るから
もたれ合う人とつましい誕生日

東かがわ市　川崎ひかり

こだわりを捨てれば丸い輪が画ける
正解と限らぬ答え持ち歩く
風呂上がりモンローウォーク真似てみる
六人を育てホームにひとり住む
持ち駒が尽きて無口になってゆく

東かがわ市　神保坊太郎

空振りの人生だったと今思う
知らぬ振りするから飛んで来る礫
半分は昭和の頭のせている
広島も見ずに欲しがる死のオモチャ
核と和の搾木にかかっている日本

東かがわ市　成重放任

五十路過ぎやっと光が見えて来た
恋をする蛍に邪魔な人の群
褒め言葉ばかり並べる通夜の席
長雨に行き場をまどう粗大ゴミ
降誕の大内山も静まれり

東かがわ市　原賢

ネクタイを外すと長生きできそうな
蘭の鉢貰うて五年目花が咲く
茶柱を信じて履いた今朝の靴
片意地もほどほどにして丸く生き
幕おりるまで踊りたし唄いたし

松山市　髙橋宏臣

うっかりと捨てたノートに僕が居た
明日は発つ流れを変えてみる決意
つまずいた数は狙った数だろう
棘を抜くモカ一杯の昼下がり
三文の得をまどろむ朝寝坊

松山市　古手川光

台風は日本がとても好きらしい
公人で参拝しては怒らせる
手の内は明かさず探る聞き上手
食べ放題人が野性にかえります
お得意の曲を奏でる秋の虫

松山市　宮尾みのり

わたくしの青春でしたある訃報
命日をずらせて偲ぶ花手桶
歩道橋ふっとジブリの神隠し
貪欲なカラスが人を脅かす
顕示欲底の浅さに気づかない

松山市　丹下美津子

伍健師の教え守って五七五
ダイエット三日坊主の思いつき
意外にも財布はかたい楽天家
四万十の流れ絵になる屋形舟
なんにつけ感謝忘れている日本

高知市　小川てるみ

こげ飯の味が恋しい戦中派
逆らって見ても所詮は笹の舟
鬼灯を鳴らし幼い日が戻る
一匹の鬼を心に閉じこめる
魔女悪女願望だけは持っている

高知県　赤川菊野

青い瞳も鳴子で燃えた土佐の夏
満点でないから人が寄って来る
心ではいつもラブラブしています
夾竹桃燃えてあの日がまためぐる
白頭山近くて遠いチマチョゴリ

人様を愛する心子に譲る
原点に戻れば何か見えてくる
謝ればいいのに意地を張ってもめ
かじられて喜んでいる老いの脛

十和田市　阿部　進

へそくりににんまり笑う皺がある
蕎麦屋へ入ってからの蕎麦長すぎる
割り箸を素直に割れぬ夫婦仲
なにくそと病を倒す石を持て

青森県　小寺花峯

ひとことの闇に掴まる引きこもり
偏頭痛昼夜逆転乱調子
豊作を祈る神楽が風に乗る
弥陀に問う五体不調で生きる訳

弘前市　一戸ツネ

ためらえばまた後押しの妻が居る
麦秋の汗は知らないキリギリス
毎日の訃報ページは読み返す
補聴器に馴れない耳に届く私語

弘前市　相馬銀波

約束は残った方が読む弔詞
やっと梅雨明けて梅漬け色上る
ねぶた囃子夏日へ向けた笛太鼓
胸にどどんと津軽の夏はあと僅か

弘前市　宮崎ヒサ子

人生の節目に気負う力瘤
花野ゆくひとり芝居の小気味よさ
チンをした半熟たまご苦笑い
間引き菜のいのち戴き若返る

弘前市　岡本花匠

試食品全部をほめて買わず去り
ＤＮＡ代々続く低い鼻
親切に席を譲った茶髪の子
一枚のシャツにも妻の意見聞く

弘前市　須郷井蛙

仲秋の見えない月も楽しもう
二千円とある浴衣の着付料
風水に縋る黄色いインテリア
アンティーク家具が新居を落ちつかせ

東京都　播本充子

虫一匹殺したくない平和主義
胃袋に消化妨ぐ虫がいる
胸さわぎ慌て出掛けた走り書き
戦火跡楽園にする難かしさ

静岡県　薗田獏沓

恋人の消息を知るＥメール
北からの便りりんごは熟れている
鈴虫の次の命を託す砂
不揃いの稲穂に群れる赤とんぼ

池田市　栗田久子

刻印が田舎者です戎橋
謀反の日妻の掃除機唸り上げ
指先に生きる実感筆握る
物忘れ老いの轍が遅々進む

和泉市　西岡洛酔

若芽干す岬かなしい母の郷
スナックのママが占う社の前途
御主人がエプロン馴染む家平和
切り捨てた尻尾に出会う安定所

大阪市　安達はじめ

ノックしてドア開くまでの期待感
落ち込むと演歌を唄う癖がある
仲悪い友の間で悩んでる
いい話その気になって損をした

大阪市　榎本舞夢

懐しい友へ小走りいだき合う
あうんの呼吸夫婦の仕事ぶり
違う物食べて夫婦の丸い膳
おでん売る町内会の盆踊り

大阪市　松尾柳右子

ごめんねとよくもぶすぶす注射針
病院で刺し身こんにゃくお茶で酔う
翁面つけて妻待つ面会時
褒めたおし賞のちぎり絵手に入れる

大阪市　伊藤博仁

後もどりできぬ人生今が華
あっさりと認めていない顔の皺
古時計孫と一緒に歌ってる
道草の楽しみ知って年重ね

大阪市　榎本日の出

夕映えに染まり迷いが吹っ切れる
仕事一途　家族丸ごと妻まかせ
安心と空しさ女性専用車
突然に男の涙見てしまう

大阪市　小泉ひさ乃

まだ役に立つらし子からの召集
三部経すめば胡坐の老和尚
駅からの電話にクーラースイッチオン
水茄子の一口ごとに亡母の笑み

大阪市　清水絹子

恋したかタフなあの子がおとなしい
一族で重役しめて社のピンチ
朝一番初蝉が鳴く梅雨あけか
台風の過ぎた岬を照らす月

大阪市　中田あい子

十本の指がそれぞれ持つ役目
夏やせを知らぬ私の体脂肪
靴箱にまだ母がいる七回忌
日めくりがだんだんやせて盆の入り

大阪市　熊代菜月

川柳誌先ずあの人の句をさがし
忙しい中であれこれよく遊び
孫五歳ピンクの浴衣気に入らず
蛇嫌い鰻も食べぬ妻である

大阪市　中村叡子

夢をみるにも金がいる宝くじ
愛犬がふり向いて聞く独り言
カタカナがやたらに好きな評論家
戦友の血書六十年褪せず

大阪市　杉澤汀

宮大工地震に強い五重之塔
屋根直す前にお参り城南宮
ひとときが平安のゆめかるたとり
幼い日御御飯(おごはん)ですよお父さん

交野市　山川日出子

死にみやげとか何とかで甲子園
雲湧いて生の総理のストライク
浴衣着た娘の婿にちょっと惚れ
ゆとりない生活なので保険かけ

河内長野市　水谷正子

カラフルな浴衣に勝る藍の染め
手花火の喚声上る里帰り
カタカナのメニュー苦手なイタリアン
空白の目立つ八月予定表

岸和田市　井伊東吉

僕に似て丸くならないシャボン玉
妻病んでとたんに僕は虫の息
ガン保険掛けているので告知して
活字しか信用できぬ野暮なひと

岸和田市　木村正剛

バイオリズムの底で拳を握ってる
冷凍庫満杯茶漬サラサラと
楽天家装う芸を身につける
豚饅を二つに割ってひとり食べ

堺市　矢倉五月

落第生だったが黒字経営者
夏の恋まだ後始末揉めている
太陽とおぼしき人に巡り合う
見せしめにまたベテランが叱られる

四条畷市　吉岡修

入れ歯外しお身内だけの顔になり
叱れない親を子供に見抜かれる
仮面下に褪せた情熱しまい込む
子に抜かれ悔しくもまた嬉しくも

吹田市　太田昭

逢いたくて回り道する雨あがり
旅立ちは貴女とならば幸せだ
八方美人どこへでも顔出したがり
一歩ずつ歩んだ道に影がない

大東市　児玉蛙

会えばただオーと一言それで済み
Uターン盆と正月だけの孫
外来魚琵琶湖で鮒と交戦中
幽霊で出て来て欲しい人がいる

大東市　南原正和

むかついた切れたとほざく青二才
言う事に事欠きむしゃくしゃしてやった
検挙率二割減とはうそ寒い
うっかりと頭を掻いて済む程度

高槻市　乙倉武史

行き過ぎてふと振り返る肉体美
ナツメロの歌手今は亡き人ばかり
古写真これが俺かと感無量
物忘れ器用に使う老いの知恵

高槻市　生田義一

おばさんのパワーが欲しいぬれ落葉
留守番がラーメン肴にワンカップ
病院でストレスたまる診察順
禁煙をしたので酒は様子見る

高槻市　西谷治三郎

アスファルト剥げば地球も涼しかろ
老友も電話の声は勇ましい
省エネも我慢も限界弱クーラー
初盆の御供え涙新たなり

豊中市　山門タミ

忙中閑　海が見たくて周遊券
盆休み身辺整理時忘れ
欲出さず惰性で続く老いの店
知らぬ間に亡母の二倍も生きました

豊中市　岸田知香子

涼しい夏地球も拗ねてみたいのか
知らないと損する世なり損ばかり
花の値の高さも墓に告げている
ケイタイを持って成程なと悟る

豊中市　吉田あずき

梅雨の日のウツをとばすか揚げ花火
蝉が鳴き夏まっしぐら黄蝶舞う
今日のいのちムクゲの花は競い咲く
蝉しぐれ亡父を呼ぶのか忌はめぐる

豊中市　樫谷郁子

末席の正義が波を立てている
反省を重ね余生の一里塚
不細工な十指が握る花ことば
蝙蝠が白い壁から動かない

富田林市　中井アキ

サロンパス心の凝りは直せない
凝り性で考え方に幅がない
ベテランと言われてからの気の驕り
ベテランの目分量にはかなわない

羽曳野市　酒井一壺

墓掃除盆だけお会いする隣
白飯に卵を割ってまだ生きる
離婚せず浮気上手の二人なり
わかれの日妻は流しを磨き上げ

枚方市　安達忠央

こんがりと焼目つけねば気がすまぬ
師のおわす町は何処か米子駅
借景の山にかこまれ美術館
大山の霧はやさしく樹々包む

枚方市　森本節子

冷奴とそーめんだけで夏が過ぎ
若い日の日記に泣いた跡がある
言いたい放題したい放題永田町
他人ごと別れた方がいいと言う

藤井寺市　楠昭子

お互いに傘傾ける雨の路地
くま蝉があまりのことに姦しい
心深く拝むひとりの墓まいり
莫山のようには出来ぬ筆さばき

松原市　國見蘭香

十二歳こんな犯行悲しすぎ
骨太の改革どこへいきました
猫みえず西表島後にする
同窓会男のぐちは聞きづらい

守口市　井上桂作

以下同文もらうカップが軽くなる
脱線を気にせず走る縄電車
忘れ癖惚けの恐怖もない笑顔
真っ直ぐに生きたつもりにある微罪

相生市　中塚礎石

曽孫抱きなぜか豊かになる気分
バスツアーガイドの声も夢の中
住み慣れた家無造作にブルドーザー
台風のニュースに旅の子を案じ

伊丹市　小熊江美

五十八年終戦の日はまだ昨日
勲八等の墓八月の蝉が鳴く
慰霊祭まだ戦前派居る限り
一分間黙祷で会う生き残り

尼崎市　軸丸勝巳

梅雨明けて夏の仁王は汗くさし
残り火だろう　胸熱くなることがある
盂蘭盆会　まなうらに来る父母祖父母
冷酒飲むグラスに透ける夏の涼

尼崎市　松下比ろ志

スマートにマネキン着てたスーツ買う
小児でもシャンプーリンス手順よい
一輪が今朝咲きました貰い苗
浅漬けの茄子に見惚れて朝の箸

尼崎市　林昭三

川西市　米原雪子

真夏日が老いと若さをくっきりと
ブランドの傘忘れられ惜しかろう
五回戦さすがに遠い甲子園
一発が出ない悔しさ試合果て

神戸市　山口美穂

犬の名を知ってるだけのおつき合い
褒められて乗った軽さを嘲笑う
バーゲンを待って出かけるショッピング
蝉の声朝寝を笑うかのように

神戸市　木村貴代子

ベトコンに敗れ今またモスレムに
ゲリラにはハイテク兵器歯が立たず
反戦を誓った国が派兵とか
キャンプから洗濯物と帰るなり

三田市　久保田千代

中年のいのちが燃える祭馬鹿
タイミング義理の拍手は一寸ずれ
クーラーが壊れ生きるのいやになる
グランドに送る選手の背に拍手

川西市　西内朋月

また喋りすぎたと飲んだ帰り道
故郷とつないでくれている仏事
寝違えて夜まで首が回らない
肉じゃがの肉は並だと決めている

西宮市　秋元てる

ブランドに囲まれ独身貴族とか
生けた後の挿木が根付くコアジサイ
友と居る気安さ呆けもサカナなり
UVが未だ入用と母元気

西宮市　井上松煙

葉刈りしてさわやかに風吹きぬける
お施餓鬼のならわし孫に見せておく
なつかしの幼馴染みも傘寿なり
コルセット腰を伸ばして上を向く

西宮市　刈田泰司

缶ビールあしたも職を探す手に
美人にはすぐに名刺を出す課長
目覚ましが二度鳴るまでは寝ています
日の丸で涙をぬぐう金メダル

西宮市　菊池トミヱ

河原には昼顔自由に咲いている
ミニトマト自由にお取りと農園で
黒部ダム忘れられない雄大さ
夏祭揃いの浴衣風に揺れ

西宮市　坪井孝一

頑張ります気軽に言える逃げ言葉
偏屈と変ってしまう正義感
出世する言った易者はどこ行った
塩だけのお握りだった母の指

和歌山市　田中みね

休まれては困る心臓抱いて寝る
浄土への旅へ不参加申し上げ
年中無休妻のお口がよう回る
酔い醒めて何ぞ失礼言いました

和歌山市　山口三千子

途中下車出来ぬ列車に乗り合わす
返り咲きシャクナゲ愛おしく愛でる
恵まれて子はエリートの道を行く
横車今まで耐えたこと悔いる

和歌山市　武本碧

虫のいい話に弱いぼくの影
本心はモザイク掛けた話し合い
幾たびか迷路くぐった土踏まず
主婦脱いでマイナスイオン浴びる旅

和歌山市　上地登美代

防犯カメラ睨みきかせる悲しい世
人ひとりまだ許せない自己嫌悪
朝顔と今日いちにちの案を練る
一万円賭けて禁煙試す父

和歌山市　宮本三喜夫

夏祭り盆踊りにと疲れます
のんびりと静かなとこで過ごしたい
あの姿次の立候補諦めな
びくびくと国会を去るお気の毒

海南市　谷口義男

美しく老いれば外に望みない
グルメ飽き鰯の方が口に合う
老いの目にはらはらさせる若い親
出る杭も使いようでは役に立つ

鳥取県　上田俊路

無名でも同人として誇りある
盆帰省　空港までの孫迎え
ぢぢばばと呼ばれ孫とは手をつなぐ
盆休み終れば老いの疲れでる

鳥取県　林露杖

リモヘリで農薬散布天仰ぐ
孫去んでふたりの夕餉冷奴
阿と吽の呼吸が合わぬ老いふたり
口喧嘩大きく惚けた方の勝ち

鳥取県　埆寛子

それなりに四君子描け書家という
ぼけた花黒くふちどりして構え
やっと描けた花は葉っぱで無国籍
お遊びだ肩の力よ邪魔するな

鳥取県　乾喜与志

川流れ負けぬと喉を張り上げる
十年も自転車やめて弾む足
疲れた時にグッと一杯飲むクスリ
干涸びた虫一匹に蟻の群

鳥取県　近藤春恵

良い返事北朝鮮はいつくれる
東大合格したが塾には行かなんだ
辛い日は妻の笑顔に救われる
失敗が笑い話のタネとなり

鳥取県　平尾菜美

マイペース押せばリズムに乗れそうだ
慣れてきた挫折に度胸ついてくる
雨の日は義太夫唸る父の癖
残り火を煽ぎもくもく生きている

鳥取県　鳥羽直市

心地よい汗を流して老い防ぐ
わかる日もいつかあろうと我慢する
食卓へ妻の苦労も食べている
余生です後は気楽に暮らしたい

鳥取県　鳥羽玲子

音楽会風邪に足止めさせられる
家建てるはずんだ音に若返る
涙腺も笑いの場面好きらしい
なるようになる悠々と起床する

鳥取県　山下節子

煌めいた結婚指輪枷になる
短冊の無理な願いで笹撓む
頂点の椅子を目ざしてサバイバル
メークして出かける妻が他人めく

鳥取県　下田茂登子

嫁説得どの角度ならよかろうか
不器用で愛の言葉がみつからぬ
子を守る親がガタガタ揺れて闇
金婚は私一人の旅に出る

鳥取県　平井栄翁

それぞれがニュースを聞かす夕餉時
仏壇に早生梨一つ採り帰る
家中の靴が揃って灯が消える
秋茄子で飯を多目に炊く夕餉

鳥取県　国森武子

連日の雨にうんざり立ち話
晴天はあんまりなくて盆の月
じりじりと蝉鳴く夏は何処いった
夏らしい夏を待ってる草も木も

鳥取県　奥田保子

よく喋る人に出合って遅刻する
人間は死ぬまで進化するらしい
謎めいた行動惚けのはじまりか
逃げ腰になってる自分恥ずかしい

鳥取県　小谷はるみ

冬眠をしそう脳みそ動かない
泣き事を言えば人間らしくなる
濃厚な愛が私を溺れさす
少年の闇に怪物棲んでいた

倉吉市　猪川由美子

豊乳でそのことばかり評価され
女帝論へ男児たのむよコウノトリ
添加物すぐに見破る舌を持ち
サラ川の佳句にはプロも出来ごころ

倉吉市　山本玲子

吹く汗に拍車をかける草いきれ
風下で仕掛け花火は煙の中
温泉で喋り疲れた同い年
いそいそと出掛けた先は墓地だった

鳥取市　前田一枝

火事さわぎ混乱空巣にねらわれる
ニュースよりチラシに注ぐ目が早い
盆参り顔ぶれみんな若くなり
野仏も野の花いっぱい手をこぼれ

鳥取市　岸本宏章

年金のわが家にもあるマニフェスト
腰上げるときにも口と手が動く
言い訳の怪我は包帯派手に巻く
生きて行くための毒なら飲んでみる

鳥取市　冨山檳榔樹

老いてなお燃える真っ赤なバラを抱く
五線譜に走るドラマのキー叩く
煽てられ血気に走り臍を噛む
思い出の数だけハート並べ見る

鳥取市　西村黙光

薬草は土用に威力発揮する
薬草酒の杜氏わが家に一人いる
ハチミツと薬草とても仲がいい
薬草酒　晩酌替わり嗜める

鳥取市　山宮愛恵

湧き水を水神さまへ入れ替える
さあどうぞかまえた胸を茶がほぐす
子守歌バァちゃんが寝て孫が起き
納涼祭踊って捨てた羞恥心

鳥取市　中村金祥

謎めいた噂話が風に乗る
煌めいた苗に減反語らせぬ
議員の座なくし峠が越えられず
煌めいた第九条がくすんでる

鳥取市　加藤茶人

賢母ではあるが良妻とは言えず
三面鏡私を映す自己嫌悪
男から仕事を取ればなまけ者
衣食住足りてモラルが欠けて行き

鳥取市　福田登美

過去総て丸く納めた墓の守り
普段着の気持ちで住める町にいる
自問自答倖せのため小石積む
晩学は大きい文字の辞書頼る

米子市　木村富美子

山男の耐える強さに魅せられる
乗り越えて護られたなと仰ぐ空
言い過ぎた言葉が胸をはなれない
アパートに一人住む夢見る娘

米子市　青戸田鶴

激動の昭和も遠くなりにけり
御来光待つ頂上の墨絵かな
つゆ草の青早起きの目に沁みる
何に使うのだろう背番号つけられる

米子市　白根ふみ

黙祷に五十八年生なまし
忘れてはならぬひもじいあの時を
健診が自分のことで億劫な
送り火を焚き強欲に区切りする

島根県　榊原秀子

CDがはめこんである祝電
台風がそれてほしいと願う夜
几帳面な友の変らぬお中元
裏だけどしっかり洗っておく踵

島根県　多々納テル子

老骨も角とれてきた冷奴
雲低く行く当てもなし雨読する
朝採れのトマト囲んで朝の膳
携帯が部屋から部屋へ喋り出す

出雲市　富田蘭水

土用波こえると梨がうまくなり
スケールの小さい奴ほど自慢する
美しい波紋を残しいったひと
心まで写る携帯待っている

出雲市　石倉芙佐子

初めからアンバランスの夏帽子
二度三度つないだ糸も切れそうに
裏表紙のすみでひっそり息をする
力水飲んではみたがもう傘寿

出雲市　板垣夢酔

年金が下がって別れ話やめ
刈る稲の手元で跳ねて飛ぶ蝗
酔うた夜去った諭吉をもう忘れ
本気です笑わないでと離縁状

出雲市　岡あきら

公園のベンチに目あり耳もある
診断の結果注文つけてパス
説得は無駄です老いのやせ蛙
泣き言はみっともないと影法師

出雲市　久谷まこと

土地改良蛍飛びかう小川消す
夏草の背丈午睡もままならぬ
ゲンコツを思い出させる墓そうじ
また一人友連れてった流れ星

湖の花火と月を見て帰る
待ちわびた四時草春の色に咲く
甘えたい鍵っ子が待つ日暮れ時
味方減っても冒険にある魅力

松江市　松本知恵子

白紙にも心にもある裏おもて
誘惑に勝ってむなしい遠花火
雨を呼ぶ風かもしれぬ但し書
風のこころ土の小径に恋をする

松江市　津川紫晃

無口な者どこかやっぱり損してる
抗争の顔を映したダムの水
ライバルと追っかけ合いの出世道
地下水も汚れてしまう世を嘆く

松江市　小川注湖

少年少女羽化の青さが気にかかる
停退へナビゲーターの妻が居る
階段は続く一段毎の闇
多数決のいくさも敗けることがある

岡山県　小林妻子

バランスを取っては孫の初歩き
味噌汁がいつもこぼれている器
呱々の声握り拳にある力
愛紡ぐ終章にある紙おむつ

岡山県　福原悦子

百薬の長に呑まれて救急車
飽食の中で少年飢えている
噂話のまん中にいて動けない
幸せをつかむドアーを開けておく

岡山県　国米きくゑ

わたしってどじねえ　夕陽浴びながら
昨日まであったポストが消えていた
よかったわねえ凡人のわたし達
風に舞い花に酔うての遠まわり

岡山市　川端柳子

価値観の相違ガラクタだいじがり
明日は散る花懸命に咲いている
心にもない言葉吐く酒を悔い
毎食後十種のくすりわけて飲む

岡山市　井上柳五郎

頂いている肩書はボランティア
百薬の長を減らして飲むくすり
恐いのもヒト科優しいのもヒト科
髪白くなっても元気よく伸びる

竹原市　時広一路

8・15　平和記念日読経の日
雑踏の中に見つけた亡父の背中
古里の祭り太鼓に誘われて
巷の灯　瞬く星より美しい

竹原市　石原淑子

熊本県　高野宵草

決断はサイコロ振ろか僕の無知
妥協せぬ武器が地球につき刺さる
バランスも崩れ巨木の幾世紀
チャルメラをうまく吹けないラーメン屋

唐津市　井上勝視

価値観はズレてもやはり古女房
知りつくした傷にさわらぬ共白髪
余生など区切り目はなし畑を打つ
暗号が胸をくすぐる古日記

唐津市　宗水笑

釣り銭に魚の匂いの港町
今日の宿　女将太めで安堵する
納豆もゴーヤも妻に慣らされる
年金に断りたまの特うなぎ

高知県　小澤幸泉

老母さんの化粧くずれが愛らしい
ゆれ動くこころポストは待ちつづけ
ホラ吹きの本音ちょっぴり顔を出し
こんなにも静か八月とおい海

高知市　北川竹萌

行水をすませ夕顔花数う
立秋の日本縦断台風禍
すれすれに去ってよさこい盛りあがる
卒寿越え家のテレビで踊り見る

東かがわ市　瀧井勝

最大の誤算は癌になった事
新聞と共に朝食パンがよい
自由得た犬が路頭に迷うてる
スランプの出口探している夜更け

石見川柳会

創立25周年記念川柳大会

日時　11月8日(土)　前夜祭16時～
　　11月9日(日)　10時～
会場　千畳苑（0855-28-1255）
宿題（各2句・11時30分締切）
「田　舎」天根　夢草　選
「メンバー」小林由多香　選
「晒　す」但見石花菜　選
「遊　ぶ」新家　完司　選
「斑(まだら)」原　章峰　選
「港　」金築　雨学　選
「都　会」内田　久枝　選
「ゆるゆる」佐々木　裕　謝選
会費　2000円（欠席投句1000円）
　　前夜祭　4000円
主催　石見川柳会

番傘とらふす川柳会

一周年句会

―辻スミ「朱の塔」発刊―

日時　**10月26日（日）**
　　12時30分開場
会場　和歌山市勤労者総合センター
　　市バス「市役所前」すぐ
宿題と選者（3句吐・13時50分締切）
「これから」　中村　重治　選
「　門　」　三宅　保州　選
「奏でる」　牛尾　緑良　選
「明　日」　中田たつお　選
「続　く」　森中恵美子　選
句集鑑賞　木本　朱夏
会　費　1000円
懇親宴　5000円（申込10/20まで）
申込及び問い合わせ
辻　スミ（☎073－425－7448）

自選集

このところとどこおりなく生きてます
喜びも悲しみも金の月に溶けて
提灯は一つでカップルのほたる
蝉の貌お前充分哲学者
ゆっくりゆっくりしますこの世は面白い

橘高薫風

ひっそりと半寿迎えた葉月尽
持て余す暇などはなし余命表
いのち燃ゆ私も炎えた知事選挙（黒田了一さんを偲ぶ）
革新のとりで築いた大手前
川柳も作った歌人　黒田さん

田中正坊

朝市の赤かぶ言葉飾らない
ごぶさたの法事あんさんどなたです
セコムより信頼できる犬がいる
コンクリで川を固めている文化
柳誌読む僕を苛めるカタカナ語

玉置重人

何気ない仕草で心掴まれる
前向きになって辞典に知恵もらう
まだ生きてビールの泡や終戦忌
学歴が役に立たない機転機知
カラー舗装してもモラルは欠けている

恒松町紅

病院の窓が笑ろてる遠花火
お人好しとわたしの顔に書いてある
娘の安否拝めば亡母も来て座り
化粧する孫と広がる車間距離
冷房を逃げる団扇の老いでいる

遠山可住

この世から消えてなくなる時がくる
煙草代珈琲代も持っている
徘徊をしている白い雲と雲
盂蘭盆の墓参に孫を連れてゆく
雷が落ちた大きな穴がある

土橋螢

高校野球まだまだ傘寿の血を燃やし
不順だぞ真夏のリズム　イレギュラー
アメリカをまごまごさせて大停電
もう呆けも本格知人の名が出ない
蝉の声猛暑に負けたように鳴き

西田柳宏子

小さい秋多弁になって立話
残暑とか花にも時々ほしい水
おいしいネみんながほめる冷やっこ
夕立がサッと雀のお宿どこ
目が合えば尾を振る犬と仲がよし

西村早苗

世界地図国防色で塗り分ける
塗り替えた地図人民に与えられ
ばあちゃんの心の地図は地蔵から
お社とお寺が消えた村の地図
参観日通学地図に駄目を押す

仁部四郎

癌告知自己診断に委してる
肝臓癌またかと決めて覚悟する
鎧袖一触癌何ものぞ覚悟する
覚悟した命名医に助けられ
癌に勝つパワー気力を維持しよう

野村太茂津

かくれんぼピエロは森の風だろう
痛みかな青いグラスで酔っている
漿草がはじけてからの黙秘権
悔しさを知るまい死亡診断書
夕されや第四楽章始まりぬ

波多野五楽庵

地震　台風　宿命にしては重い
問題山積　地球は平穏ならず
会うていて憐れな病無表情
夏休み済めば政界秋の陣
気候異変夏は短し爽秋の風

藤井明朗

ひとり旅きままな風にまた出会う
充電もせずに卒寿の坂越えた
生きるとはこんなに激しい人の渦
秋風がやんわり包む野の仏
落葉の布団風が着せてる野の仏

藤村〆女

スマートな美女がそろった税関吏　（北京）
出国にてんやわんやの残り元　（北京）
飲食の匂いがしないエアポート　（天津）
両側をポプラで仕切る高速道　（北京）
思い出がいろいろつまっている北京　（北京）

芳地狸村

大正の頑固を今も持ち続け
大正生れめえへん若く見てくれる
良く冷えたビール三十五度の昼
顔の艶酒が肥料になっている
すっかりと酒の虜になって生き

宮口笛生

美酒も飲むべし天国の入口で
運命を狂わすまいと算木組む
春愁を押さえて汚染の町歩く
振り向けば己の影がお辞儀する
独りでも明日の構図は確と描き

森下愛論

盆の仏から見るといとしむものばかり
弱虫になるのを叱る辛子漬
送り火の向こうはすでに秋景色
わたくしの秋を養う露地野菜
精進の膳我が身にも仏にも

八木千代

ゴッホゴッホひまわり畑にカメラの目
薬缶の湯直ぐにやかまし自己主張
蟻の列地下に浮世があるらしい
乳呑児のやっと目を閉ず蝉しぐれ
そこに山あるから好きな登攀具

八十田洞庵

脇役のままでこの僕死ねるかい
農業の曲り角です土も泣く
傷ついた鬼にも都合あるらしい
成人の主役は晴れ着かも知れぬ
溢れ出た愛が蒸発してしまう

両川洋々

少々は不満を抱いたまま和解
生真面目が過ぎて世相に乗り遅れ
一と言が足りず不仲になった友
反省の甘さ空白埋めきれず
脇役に徹していても疲れ気味

阿萬萬的

内視鏡百面相をして巡る
頼りない夫でも最強の味方にし
鯛だって腐ればボイと捨てられる
孑孑のダンスうれしくなる金魚
近づけばそれだけ逃げる虹の橋

石川侃流洞

十月というのに恋をする万年青
出刃を研ぐやさしい音が聞こえます
コスモスよ恋はするべしご自由に
決断は素速く愛は奪うべし
十月の恋は盲目藷を煮る

板尾岳人

ひっそりと逢いひっそりと笑い合う
殺すかも愛の怖さといとおしさ
哀しみに耐えはまなすの鮮やかに
いらいらをふわふわに変え北の旅
ノサップ岬軽やかにまた日は昇る

奥田　みつ子

うっかりと返事大役回される
言い勝ったところで消えぬ蟠り
こけそうで止まらず回る夫婦独楽
十三夜友を誘って酌み交わす
鳥渡る無事をと祈り仰ぐ空

河井　庸佑

無位無冠でいる幸せに気付かない
風船がしぼんで悔いが多くなる
手紙では素直にごめんと言えたのに
鉛筆の芯を明日へとがらせる
おたがいに影を踏まない距離にいる

川島　諷云児

旗日には日の丸　老いの意地を見せ
矢が尽きた事は内緒にして置こう
碧空へ一際弾む万歩計
一寸だけ折れると丸い輪ができる
やがて散る花　懸命に媚を売る

木村　あきら

幽谷のセセラギ寂し亡妻の声
新人類出雲に頼らず結び付く
お隣の厚い情けに生かされる
旧姓で呼ばれて和む同窓会
棲み着いた猫から愛を感じとる

工藤　吟笑

順番にバツを貼られて眼科出る（白内障で入院　3句）
眼の手術梅雨明けはまだ遠い
手術して六甲山が眼の中に
捨ててしまえば三文の値もないいのち
独身に馴れた干場は賑やかに

黒川　紫香

好意抱くソフトな言葉炎をつける
リラ冷えを同窓会で吹きとばす
訃報欄私はご飯まだ美味い
脳味噌も洗ってプール引きあげる
余生の灯父のタクトはゆっくりと

小西　雄々

溺れる子見てもわたしは泳げない
孫達に甘くて嫁に叱られる
給料が安くて腰が落ちつかぬ
食いしばる歯もなし我慢もうできぬ
数うてば当る鉄砲うってみる

小林　由多香

牛追いの唄のリズムで踏む水車
角を出すたびに絵になる蝸牛
金賞の薔薇は孤独とプライドと
地方紙が見抜く小さな善意の灯
コスモスと柔軟体操一二三

斉藤劭

一週間ほど早く送ればいい物を
編輯に何時も迷惑かけちゃって
来月からは早く送ります
川柳が好きで迷惑かけてます
辛棒をして川柳についていく

田口虹汀

光触媒　大気を浄化する舗装
海水で発電　ファイバーの出番（耐久性FRP）
来日の投手乱れる高湿度
同業で逢うかも工業高よ勝て
外来語を英語に戻す嫁の声

竹内紫錆

阪神に恋わずらいをしてしまい
恋は盲目ドブ川へ飛び込んだ
人形をしばらく仕舞うくいだおれ
ダメ虎を耐えたマグマが爆発す
とび込みを危なさそうに見るグリコ

河内天笑

番傘創立95周年記念全国川柳大会

—新・類題別番傘一万句集発刊—

日時　11月9日（日）10時開場　締切12時

場所　三井アーバンホテル・大阪ベイタワー

祝辞　㈳全日本川柳協会会長　吉岡龍城氏
川柳塔社主幹　河内天笑氏
ふあうすと川柳社主幹　泉　比呂史氏

講演　「大阪学余話」
作家・帝塚山学院大名誉教授　大谷晃一氏

宿題　「見抜く」（東京）加茂如水選
「寄る」（愛知）奈倉楽甫選
「力」（石川）山田圭都選
「好意」（広島）定本イツ子選
「印象」（徳島）福本しのぶ選
「本気」（福岡）堤　日出緒選
「つなぐ」（大阪）田中新一選

事前投句　事前投句・宿題とも各題1句、事前投句締切10月10日

会費　4500円（軽食・一万句集・記念品呈）

懇親宴　10000円　17時～18時30分（予約制）
事前投句・懇親宴他申込み10月10日までに左記へ
〒530-0047 大阪市北区西天満5—6—26—605
番傘川柳本社　☎06—6361—2455

主催　番傘川柳本社　**後援**　㈳全日本川柳協会

板尾岳人選

札幌市　三浦強一

若者の辞書から消えた差恥心
ロボットに生産ライン乗っ取られ
八度目となれば上手に転んでる
コップ酒言いたいことを言いなさい
居酒屋で処理をしている不発弾

和歌山県　村中悦男

無念とは雀のとまる案山子かな
はなやかでないが愛しい稲の花
父母逝った里にもあろう蓮が咲く
虫のいい話　もみ手でやってくる
副作用なくす薬をたんとのむ

奈良市　乾春雄

望まれて座った席に刺がある
神の名も知らず祭りが活気づく
高望みしない傘寿のシャボン玉
うぬぼれの紙風船がふくらまぬ
迷わない愛のレールは一直線

京都市　清水英旺

介護証来たぞ老人の仲間入り
戦わん赤いネクタイ締めていく
ねっとりと肌にまつわる夏の澱
免れ得ぬ日本の鬱の中に居る
いち早くひざが察する梅雨気配

神戸市　山田婦美子

慰めの言葉は傷を深くする
刃物より優しい言葉に刻まれる
立たされし記憶の中の油蝉
日ぐらしの声のむこうにある憂い
沐浴のお湯に広がる子の未来

神戸市　両川無限

愛哀し優しい嘘を待っている
いい話拾うアンテナ立てておく
蹴とばしたチャンスは二度と戻らない
男はつらいゴメンが言えぬから唸る
もう一度かがやくために種をまく

伊丹市　延寿庵　野　靄

メリハリをつけてしっかり皺隠す
おもちゃ屋でしっかり黙秘通す孫
実印がポロリと泣いた空手形
人並みに伴走の妻耐えて生き
五輪書武蔵の生きた証読む

岡山県　矢　谷　冨士野

老いてなお女を捨てぬ試着室
走馬灯愛の絆が断ちきれず（夫逝きて）
歳月が涙を枯らす花手桶
酷使した陰に詫びてる丸い背な
回転の独楽はほこりをよせつけず

横浜市　布　山　嘉　信

キュウリより自由が欲しいキリギリス
よく見れば雑草なりの花をつけ
不況にも子の作文が旅をさせ
森林浴元気にうたうホトトギス
台風に治山治水をチェックされ

横浜市　川　島　良　子

血糖値　真綿で首を締めてくる
ワンランクアップで挑む秋の陣
美しい誤解よ永遠に一目惚れ
天国は楽園ですか仏さま
優柔不断叱るわたしの影法師

河内長野市　大　西　文　次

看板に偽りがあるぼけ封じ
明治より大正昭和ひとまたぎ
空元気九十三のバースデー
鯛の骨喉につめたと言うておく
開いた口締まらず話かみ合わず

河内長野市　石　堂　潤　子

掌をこぼれ個性が動き出す
堪忍の笑顔しんどいなと思う
阿修羅とは由々しき店名心太
シナリオが整い過ぎた偽証罪
揶揄されているなと思う耳の栓

富田林市　稲　川　惠　勇

欲捨てた分だけ器でかくなり
借金を返すとでかい顔で来る
失恋の余熱ジョッキで冷ましてる
はじめから負けてやる気のにらめっこ
不況風吹いても温い路地住い

アルゼンチン　松　井　美稚子

骨抜きも世渡りうまいするめ烏賊
句に混ぜるほのかな愛と手前味噌
張り合った移民仲間の天の川
二番目にあの方の句をそっと読む
伴奏に日進月歩夫婦づれ

ややこしい話は避けている暑さ
争いが続く地球は丸くても
土壇場で思いもかけぬ力瘤
うっかりと返事は出来ぬ茶が渋い
これ以上深入りすれば傷がつく

島根県　武島　ちよえ

変る世に戦の文字が見えかくれ
農一途汗の笑顔を見て育つ
趣味を抱き余生に光る夢を追う
残り火はゆっくり風を読みながら
子に残す一途に越えた丸い背な

出雲市　加藤　スズコ

あれそれで話も弾む夫婦なり
張り裂ける思い打ち明けられぬまま
無印の駒が天下を黙らせる
ちちははよ力ください実るまで
最強の味方やっぱり妻だろう

鳥取県　福西　茶子

母の荷は心も解ける花結び
針千本のんでも言えぬ胸の内
露の玉キラリ私に夢くれた
もう一度巻きなおしたい金婚日
お隣の鼾に耐える旅枕

鳥取県　西垣　美知子

余生とや総て八分で過したい
年寄りになれるだろうか若者よ
こわい子がますます増えていく日本
妥協癖弱み知ってる酒の席
ひや汗も応援してる舞台裏

鳥取県　吉田　弘子

お盆には亡母と話せる墓洗い
気の合った友と繋いだ手の温み
じわじわと押し寄せてくる物忘れ
人生の壁へぶつかり回り道
あ　うんの仲だからこそ喧嘩する

鳥取県　橋谷　静江

終戦日夾竹桃は白が好き
世の中が悲しいくらいわからない
遠回りしても堂々生きている
建て前の話だ裏は読めている
母の里へ三里歩いた頃の足

鳥取市　森　美智代

雑踏の中で揉まれている訛
倖せの方程式に孫がいる
気取っても出雲弁から抜け出せぬ
妥協癖ついた帽子で頼りない
妥協したらしいすっきりした背中

米子市　足立　由美子

浅知恵でうっかり足を掬われる
油断して浅瀬に足を掬われる
友情の太いパイプで結ばれる
後もどり出来ぬ我が道ひたすらに
古希迎え老いの哲学幕を開け

倉吉市　酒井　芙美子

延命を拒否する覚悟試される
困らせて老いのつらさを教えるか
悲しさの圧縮袋持て余す
忙しい心で深い空を見る
ひとつかみ塩が見せてる底力

松江市　松浦　登志子

核の危機鐘うち鳴らす原爆忌
負けて得るものこそ大事甲子園
米百俵年貢納めの総選挙
ただ一夜月下美人が咲き誇る
この棚に物は載せるな父の作

大阪市　近藤　正

許す事続く拳の捨てどころ
アドリブが上手く飛び出し身を守る
他人さまに見せぬ手抜きで生き延びる
晩学へ辞書を背負って夢燃やす
風鈴の散らかる音に秋掬う

大阪市　三浦　千津子

熱い茶を吹いて言い訳考える
気まずさが空気伝染して寒い
三猿で人の傷には触れぬ主義
小さ目の相合傘で恋すすむ
家具運び込まれて新居息をする

大阪市　升成　好

トラの威を借りて経済活性化
鉛筆も削れぬ子等が何故キレる
国産を愛国心が選ばせる
飲み薬忘れるほどの回復期
新築の壁にローンの音がする

大阪市　寺井　弘子

方寸の庭に一匹蝉の声
施餓鬼寄進社交儀礼と仏心と
盲点と言えば聞こえはいいけれど
休肝日要らぬお世話と自立する
酒がつい進む　年金減るという

和泉市　小坂　凡英

石橋をたたいて結論先送り
トックリがまだ半分の話好き
知りすぎてからの一歩がふみこめぬ
定年で出番なくしたかくし芸
前歴は知らぬのれんの同じ席

和泉市　横山　捷也

泉佐野市　稲葉　洋

ひと夏の命の讃歌蝉時雨
ゲームでもゴッコでもない有事法
ボロ傘と見たか雨まで横なぐり
天高しさて胃袋よ肝臓よ
彼岸花冥府の秋は如何です

池田市　多田契子

筆圧が弱くかすれてお茶にする
そして朝ニュースに合わせ味噌汁が
自己嫌悪そろそろ消える折り返し
恋人の嘘にショックも夏は好き
恋狂い赤いカンナが炎あげ

吹田市　二宮栄子

古里に辛くて甘い水がある
水を買う今を先祖はたまげてる
反省をしたりさせたりして夫婦
いい顔に映る鏡をはなさない
昼寝した束の間亡母と童歌

吹田市　木下敏子

暑いけど好きな笑顔に逢いに行く
美しい嘘を包んで友見舞う
目も耳もしっかり開けて見てた夢
たのみ事ばかりしている父母の墓
食べて寝てビタミン剤の里帰り

羽曳野市　福田悦子

テレパシー守ってくれる亡母がいる
秋夜長一人さびしく柿をむき
ふり返る今年に母の顔がない
秋の虫鳴く背を照らす月あかり
この秋はどんなドラマがあるだろう

八尾市　平川幸枝

玉砂利をサクサク私語の今朝の秋
揉めごとを仏に任す盆供養
昨日今日セミの抜け殻千の傷
全開の心は夏に向いている
母として心に明日の戦あり

八尾市　松葉君江

大胆に淑女気を吐く大ジョッキ
休日のストレス癒す土いじり
次つぎの怪我にがまんを教えられ
遺伝子が同じでとても気がかりな
横道にそれて話が進まない

八尾市　寺川はじむ

熱さましどれも効かないトラ人気
ひらがなが似合うような歳になる
好調な時には何でも良く似合い
熱いうち打ち過ぎまいとした不覚
実る穂へ味見を先にするスズメ

藤井寺市　喜島芳江

裏切られなぜか憎めぬ人がいる
惜しみなく愛をあたえて生き甲斐に
やんわりとさとし厳しく躾けてる
気がねない仕舞風呂には掃除つき
あっけなく過ぎ去った日々たぐり寄せ

藤井寺市　西村栄一

洗濯を詰めたカバンが帰省する
ストレスも共に投げ込む洗濯機
冬までに男の嘘を丸洗い
ずる賢い奴はこつこつ働かぬ
たんぽぽの軽いイノチを運ぶ風

藤井寺市　鈴木いさお

いつまでも賞味期限の切れぬ妻
嫁いだら母さんみたいになるがいい
内心はベストの妻と思ってる
宝くじ当てたら妻に言うやろか
丹念にセットしたのにこの風め

藤井寺市　俣野登志子

鄭重に娘さらいに彼が来た
夕陽背に渚を駈けた日の二人
痒い時痛い方がと思うエゴ
気にしてる八卦なんかと言いながら
月下美人せめて逢いたいもう一夜

今治市　塩路よしみ

霧吹けば蛍は命ある限り
ひとりの灯点し静かな女の譜
意地も見栄も捨てて女が髪を梳く
一期一会いのちの証　沙羅双樹
残像がひしひし胸に未練抱く

今治市　野村清美

胡坐かき肩怒らせているかぼちゃ
泡立草すくすく伸びてあざ笑う
ひまわりの笑顔に夏を乗り切ろう
頬杖がぼんやり見てる残り月
ポケットへわたしの夢をふくらます

愛媛県　花岡順子

他人から見ると不思議な夫婦だな
ピエロの汗知っているから手を叩く
流れ読む時は無心になっている
攻撃のチャンス辛抱強く待つ
うっかりと忘れたふりをする狸

高知県　西森善蔵

愛煙家値上げ一円煙に巻く
傘寿でも幼馴染みのちゃんで呼び
母の日の人気やっぱり母性愛
正論を何故目の上の瘤にする
手を挙げたグリコが強い虎に化け

青森県　福士トキ

ジャガイモが日照り不足を克服し
七夕に年甲斐もなく願いこめ
今一度手に取る雨月物語
皺に負けない心磨いているつもり

秋田県　湊　修水

雨に負け風にも負けて老い進む
茶の間まで球児の汗がとんでくる
よく見れば意外に冷めたピエロの目
縄のれんどこもトラキチ大気炎

日立市　加藤権悟

ひまわりの芯に昭和の飢えがある
風をよむ男よ寝返りが早い
むかえ火を焚けば笑顔の母に会う
お多福の妻をたよりに生きている

東京都　やまぐち　珠美

雨が打つ素顔へ傘はさしかけぬ
並走の車窓ワタシを観る私
蝉しぐれ明日の虹は唄わない
グッバイをさわやかに吐く歯は白し

横浜市　金森徳三

溜息が出る雑草の伸び盛り
プライドも置いて社を出た定年日
梅干が朝の胃腸に活を入れ
梅雨明けてやっと広がる四畳半

横浜市　長島亜希子

庭を褒めご主人褒めて花もらう
辛い坂越えたところに花がある
ベッカムのためなら雨も何のその
仏壇に故郷の土産話する（ルーツを辿る旅）

横浜市　芦田鈴美

うれしくて内緒内緒と触れ回る
曲がり瓜の味は知らないキリギリス
デパートをひと回りして汗を消し
値上がりにまた禁煙を持ち出され

富山市　松見たえ

やんわりと男の気持引く化粧
どう向きを変えても見えぬ遠い道
ハードルを一つ下げれば楽になり
誤解から揺れに気付いた日の焦り

岐阜市　平野あずま

鬼老いて医師と馴染みになった夏
贅沢を知らない母が秋刀魚焼く
瘡蓋を剥がすと過去が喋り出す
ゴキブリを殺しいのちをふと思う

草津市　久保和友

秋だからベッドの隅にシャガールの絵
涙はむらさき色だった古い日記帳
路郎師と飲んだ松崎町の店
鉄道病院わたしは公傷でタダでした

京都府　前上英一

部屋の空気の流れを読んでいる無口
欲深い鬼一匹を胸に飼い
欲望をしかと包んでおく理性
いくつかの悔いを日記に積み重ね

大阪市　中村忠敬

富士山は遠くで眺め愛でる山
百均で主婦大散財知れたもの
この国の巨大赤字は誰返す
セクハラと騒ぎたてられ辞める羽目

大阪市　池上清治

遅刻せず会えて安堵の待ち合わせ
犯人が割れて意外の十二歳
墓参りちょっと組入れ盆の旅
リフォームで部屋も気分も生き返り

大阪市　尾崎黄紅

中国産に韓国産で満腹に
奥様がかみさんになる不況風
天皇を神と呼ぶ日がまた来そう
二で割って決まりつけたいお人好し

大阪市　辻本登季子

去りゆきし人達逢いに盆の墓
年忘れ女盛りを今一度
若き日のアルバム見ては元気でる
朝顔の花がつかない淋しさよ

大阪府　大向ナツ子

重心を優しく包むスニーカー
夏休み家族の靴が右ひだり
きっぱりと言えずに裏で泣いている
穏やかな一日暮れて心太

柏原市　伴洋子

逆らえば倍の力が押し戻す
大往生炎閑かに音を消す
荒れる子へ祈る他なし蝉時雨
虎の威を脱げば気弱な風見鶏

河内長野市　坂上淳司

イエローもレッドも赦し共白髪
尻尾ふる事が嫌いで野良のまま
後がないうっちゃるだけの腰もない
休肝日つくりしっかり飲んでいる

河内長野市　木太久正一

益軒の心がわかる歳になり
快便を大事に散歩キャベツ食べ
うなぎ買う盛夏今年は幾匹ぞ
耳朶の硬さに練ると亡母の声

河内長野市　印藤智子

八月は鎮魂の鐘メモリアル
老いの兆し銀の色してやって来る
遊ばない夫の側で肩が凝る
鈍行で駅弁を買う旅が夢

化粧して今日一日は躁になる
濡れ落葉妻の母性を呼び起す
孫の絵の太陽だけが大きすぎ
呑んべえは失敗せぬよう家で呑む

岸和田市　土橋房枝

つらい事皆んな呑み込み生きている
初めから相手を呑んで勝負する
子の歩み計りながらの雅子様
熱心に家事に精出す男の手

岸和田市　森元ふみよ

挨拶は心を開くカギになる
同僚と男のロマン語り合い
この気持計れますまい貴方でも
幸せは気の持ち方でやって来る

岸和田市　雪本珠子

虎優勝よりもバーゲン好きなママ
幸せに暮らしているに気がつかず
太陽が沈むと元気出る男
他所の子を叱るおばさん今はなし

岸和田市　坂口英雄

縁台の百物語遠い夏
孫来襲やっぱり泳ぐ蚊帳の中
叱られた数で花咲く盆供養
七転び後は天命空碧し

堺市　柿花和夫

何もかも知ってたような亡母の顔
すまんなあ耳に残った亡母の声
禁酒してやっと分った酒の味
遊び下手知恵の輪ひとつ外せない

大阪狭山市　羽田野洋介

平凡にまさる幸なしきゅうりもみ
立場上本当のことは伏せておく
遠花火情熱的で儚なくて
公園は無口砂場もぶらんこも

吹田市　須磨活恵

我が家にも何れ自家用宇宙船
蝉捕りの上手な兄の盂蘭盆会
赤紙を知らぬ総理の九段坂
庭の木が僕の昔を喋り出す

吹田市　木村無禄

ご都合で強い女が弱くなる
永劫の旅で地球へちょっと寄り
少年の姿に化けた鬼子母神
天国へ一歩近づく雲の峯

高槻市　田中初恵

人生の乗り換え駅の混み工合
玉砕は知らずレジャーで誘う島
その兆し鯰のヒゲに聴いてから
あるがまま生きればいいさ団扇かぜ

豊中市　源田啓生

豊中市　藤井則彦

情報も噂も知らぬ深海魚
さっきから猫が鏡を見つめてる
安普請内緒話のない暮らし
ネクタイは妻の見立てと言うておく

富田林市　古田千華

坊さまの都合早目の盆支度
似顔絵は良いとこどりで美人なり
衿あしが宿の浴衣に解放感
颯爽と季節先取りしたむかし

寝屋川市　岡本勲

自己流の道を走って古稀迎え
自分史に残したくない事多し
かばい合い登ってきました古稀の坂
この道を選んで悔いなし我が人生

羽曳野市　吉村久仁雄

二代目もそろばんはじく小商い
ジンクスはあると認める無神論
ストレスは別腹に入れ楽天家
青春の蹉跌は書かぬ偉人伝

羽曳野市　森下一知

間違いの数を重ねた人間味
断りの中途半端を攻められる
正直の汗に時間の空回り
エリートに育てて田畑荒れている

東大阪市　田中美弥子

思いきり弾んで老いを謳歌する
踊りたくないが踊っているピエロ
片方が引くと解けてるもつれ糸
生きたくて補助食品を買いあさる

枚方市　荘司弘之

虫食わぬ野菜を人は食べたがり
今生の別れとセミが大合唱
灯明の向こうにあの世見せる盆
生きていく自信もらいに墓参り

枚方市　二宮紫鳳

旅の日々見て来たような体重計
北の旅なまり飛び交う露天風呂
でっかい道財布のひももリラックス
停年の夢ふくらますフルムーン

藤井寺市　吉田喜代子

土用の日ウナギにょろにょろ逃げたがる
泣き下手な蝉懸命に歩き出す
年金を都合も聞かず減らされる
友を皆子供にかえす里の風

藤井寺市　若松雅枝

幸せになれそう赤い花が咲く
うとうとと呉越同舟終列車
病い癒えこんなにきれい遠花火
青い星仲良くせよと月が照る

今生のもつれた紐を解いて行く
海が凪ぎ心も凪いで旅に出る
自分史へロマンの彩を添えてみる
耳鳴りが磯笛に似て風止まる

八尾市　脇　俊子

糠床の色鮮やかに母の味
ちらし寿司妻に似てきた嫁の味
原爆忌炎に見せた神のエゴ
同じ手でまた欺される欲の皮

八尾市　西川義明

馴れそめは小粋なゆかた盆おどり
時がたてば汗も涙もみんな夢
脳みそも干涸らびないよう水をやる
電報のような電話が息子から

八尾市　中島春江

少しだけ余裕のできた貰い泣き
招き猫片手の爪は研いでいる
人生の表札深く日が昏れる
頂点に危険な橋がかけてある

八尾市　田中トシエ

景気呼ぶ打出の小槌ないものか
羽音消し視界横切る忍者の蚊
辻褄の綴り合わせがほころびる
生きざまをバランスシートに載せてみる

八尾市　赤木妙子

端正で紅が燃えてる彼岸花
一面のコスモス畑癒されて
ガーデンでホットコーヒー似合う秋
快調で喜ばしくない秋太り

大阪府　藤井郁代

折鶴と鐘で平和を願う子ら
義足でもやれば出来るよ甲子園
攻防へカラスに負ける知恵比べ
百円の買物五円を引きずって

大阪府　野田栄呼

常識が同じ物差しいい夫婦
あっけらかん亡母の最期は理想郷
ほっとする幼馴染とちゃん付けで
サラリーマン漫画見る目の真剣さ

大阪府　神野千恵子

初成りの西瓜嬉しくお仏前
好きなもの買う約束で孫と墓
世話の分花はきれいな彩で咲く
紙とペン仲よくすごす雨の午後

大阪府　小栢こずえ

老いの耳呪文のような会話きき
夕暮れに微笑み飾る立葵
村人の暮しのあったダムの底（一庫ダム）
陽のさして朝取りの茄子紺の華

大阪府　畑中節子

急激な暑さに愚痴り飲むビール
ドラマには携帯電話が必需品
墓まいり虚ろな経と蝉シャワー
台風が残暑見舞か縦断し

大阪府　高木道子

またひとりするりと抜けた踊りの輪
身構える子の虫網に蝶の舞い
リストラにプライドの灯が揺れ動く
歳の差も気にせず嫁ぐ娘を案じ

尼崎市　河津正治

音のする金でしっかり神頼み
診察券輪ゴムでちゃんと止めて置く
旅帰りあんま鍼灸フルコース
外人にならねばならぬパスポート

川西市　井本清山

きのこ雲夏の日射しよ夾竹桃
蝉時雨少女にもどる終戦忌
仮の世を恋しくうける月見草
入道雲亡夫の顔で消えてゆく

篠山市　谷田多美子

料理して罪を感じる蜆汁
げんこつに愛がみえたり隠れたり
ずぶぬれの靴に一役新聞紙
先ず器褒めてゆっくり舌鼓

三田市　石原歳子

煮えきらぬ男の顔に棲むおんな
気丈夫が哀しみ煽る大うちわ
近況を聞くだけ聞いて助けない
鬼になると決めてO型貸している

西宮市　片山忠

蒔かぬ種生えて難儀の休耕田
ヨッコラショ朝から何度言うたやら
大ピンチ妻に謀反の兆しあり
後を継ぐ者がないよと田に詫びる

兵庫県　安達厚

先ボケた方が勝ちやとほくそ笑む
人生街道見込み運転ばかりです
マッチ箱ローンが済んだ住み心地
海のさち山を育てて得る恵み

奈良県　江波正純

にわか雨軽いジョークと缶コーヒ
炎天を見上げ溜め息瓜の花
気楽さの向こうに見える曇り空
羨望の中で孤独に耐えている

和歌山市　土屋起世子

輪の中で噂話を取り仕切る
大小は置いて古疵二つ三つ
弱点も晒し裸の処世術
肩書きを外した肩へ肩叩き

和歌山市　喜田准一

老母すなお勝手が違い拍子抜け
腰低く見える人ほど腹据わる
今月は懐ピンチ妻の酌
愛猫が睨みをきかす恋敵

和歌山市　根田美子

血圧計敵は汝の愚かさよ
安楽死したくて三度のめしを食う
蝉しぐれ耳からこぼし秋を待つ
労働歌　蟻の御旗は赤だった

田辺市　大峠可動

噛み合わぬ善意へ少し距離を置く
プラス志向後悔という文字はない
みそ汁を作る自分のためだけに
味付けは濃いなと思う幕の内

和歌山県　森下順子

夏草を見てから湧いてくる気力
もやもやを捨てに出かける散歩道
平常心金の無いのも慣れである
良寛を少し齧って生きている

和歌山県　辻内次根

捨てるもの金出して買うゴミ袋
唄のよう妻の愚痴聞く共白髪
仏壇に今日の懺悔を詫びる夕
読み書きの日課八十路の晩学か

鳥取市　山口千代子

ふる里のあの日に戻りたいひとり
酒をつぎ足して寄り添う久しぶり
逆らってみたい魅力のある本だ
耕して大きく育つ夢を待つ

鳥取市　大坪天涯

踏んばって抜かれまいぞと庭の草
凄いこと長寿日本世界一
しなやかに橋を渡れば待つ浄土
炎天下梅はきれいな皺になる

倉吉市　前田喜美子

バーゲンへ渋い財布をノックする
アパートの無口をゆする震源地
正座した我慢の膝が笑いだす
猿犬の中へ顔出すきびだんご

米子市　猪森スミヱ

美しく老いたき夢は捨てられぬ
打つ打たぬゴジライチロー朝の記事
生かされる薬もらいに内科外科
六感が時どき老いて昼寝する

米子市　小塩智加恵

玉手箱まだ開けぬのに白くなり
粗食でも赤い血となり肉となり
詮ないが言わねば胸が納まらぬ
運命の手綱さばきも遅れがち

鳥取県　毎田信翁

鳥取県　細田裕花

サバイバル　ビタミン剤が味方です
噛み合わぬ歯車になりはずされる
健康食謎を解いたらただの草
思いっきりボールを蹴って道決める

鳥取県　平木公子

老後への橋ゆらゆらと頼りない
それでいい今のまんまで素敵だよ
怪物も妻には弱いとこも見せ
謎全部解けたらきっとつまらない

鳥取県　鈴木一弘

転んでもあしたに続く道がある
鳴き砂を掬い潮騒抱きしめる
君と僕言葉なくてもわかる仲
背を向けて逃げる言葉で敵を刺し

鳥取県　岡村孝明

リストラへよろめく体妻支え
目が覚める今日も心臓止まるなよ
苛立ちを海へ向かって吐いて来る
野菜畑人と獣がうばい合う

島根県　持田多輝子

人生は予測の出来ぬ明と暗
愛という錨でつなぐ夫婦船
都会にはなじめぬ母の国なまり
介護法浮世の風がきつくなる

島根県　菅田かつ子

夕茜ほっと佇む影法師
愉しさが去って楽しみまたひとつ
梅雨疲れ茄子も歪んでぶらさがり
お爺ちゃん機嫌いいのか行って来い

島根県　毛利幸

裏街で秘密の策を練っている
里いもの葉っぱに宿る朝の露
苦労して流した汗に褒められる
過ぎ去りし昔の風は温かい

島根県　福間博利

久し振りの蚊にも出合った墓掃除
じっと見てあきないものに夏の雲
ひょう変自在一瞬わたしも雲になり
われもひともこの道をゆく曼珠沙華

出雲市　川島和歌子

言い勝ってむなしさ残る熱帯夜
老いてなお腹の立つ虫飼っている
土に生き土を愛した母八十路
好き合って一緒になったはずなのに

宇部市　高山清子

ダイエット忘れる母の握り飯
健康と呆けぬことだけ祈る老い
老い二人いつまで漕げる浮世舟
晩学の頭のどこか穴が開き

祠の前素通り出来ぬ母の愛
賽銭の額の程度の願い事
賽銭の額神様も気が軽い
異教徒の子の幸祈る鎮守神

唐津市　坂本兵八郎

晩酌を一本増やすいい知らせ
一徹でよし生き方に自負を持つ
マンネリの暮らし感性鈍りだす
ゲキ辛を前立腺に叱られる

北九州市　岡田幸生

孫よりも曽孫の方が多くなる
おろし金大根重く一と休み
欲もなく月日は夢の間に過ぎる
子守した昔に帰るねんころり

宜野湾市　杉谷一栄

花屑を一気に流す俄雨
損得の話になると座がしらけ
満腹に睡魔が誘う雨の午後
こだわりを水に流して青い空

松山市　山之内八重美

スランプを抜け出すために書いた裸婦
絢爛に咲く一輪にある孤独
背伸びした足が地球に届きかね
一呼吸して相槌の言葉選る

今治市　渡邊伊津志

田舎へと大型店が活を入れ
海近く住んで泳ぎを知らず老い
盆供養男親子へ寄る絆
健康な限り野心はまだ捨てぬ

愛媛県　宮本末子

台風の試練に稲が耐えている
湯治場であれこれ思う蟻の性
打ち水の涼を貰って将棋指す
負け犬が酒場の隅で吠えている

愛媛県　安野かか志

体調の良い日は酒もいい薫り
青空と妻にせかされ野良仕事
鎮守の樹剪られることのない誇り
台風をハウス野菜は知らぬまま

南国市　小原圭二

もう出番来ない夫婦の登山靴
あやふやな知識ばかりに自己嫌悪
窓に風母にあげたい鈴の音
一絃で虫の音を奏き秋を待つ

高知県　貞岡佐紀子

至近距離笑顔で話す糸電話
かくれんぼ見つけてくれる鬼を待ち
戦友会名簿へ斜線また一つ
とっくりと同士討ちする妻の留守

高知県　近森功

噂では敵も味方も同じ趣味
鬼門から来る話にも夢を見る
すかすかの骨をテニスで酷使する

日高市　根岸方子

器など不要おとこの握り飯
暇な日は笑う練習して見るか
八月の雲に青春闇の中

秋田県　秋野宏

電子レンジに夕べのチンの遺留品
道迷いお陰で稼ぐ万歩計
それなりのリズムに乗った千鳥足

東京都　井上つよし

根に持たぬたった一つの長所です
亡母の背あの温もりがまだ消えぬ
しょうむない新語が犯す日本語を

武蔵野市　亀井円女

お茶割りの焼酎不精の味がする
自己弁護妻にすすめる酒の味
夕立も入道雲も知らぬ夏

横浜市　平達也

間違いが分ってからの自己嫌悪
少子化が年金族を慌てさせ
へたばった去年の暑さが欲しくなり

横浜市　石原三郎

嫁ぐ子に糠床少し分けてやる
ペットにも肥満解消ビスケット
相談に乗ったふりする甘い罠

横浜市　巌田かず枝

気前良い保険つぶれはせんだろか
自慢する相槌だけは打ってやる
神様の割当て大事に今日も呑む

新潟県　高野不二

ロボットに癒されないよ一生涯
手相よりまだ延びている私の手
迎え火に集う息子の幼な顔

静岡市　中西雅

ハイテクで折れる鶴ならつまらない
たまたまの朝寝を起こす蝉時雨
朝顔が一番早く夜明け知る

京都市　三宅満子

あちこちの赤信号が疼きだす
点滴を見上げて今日も安息日
カラオケでお歳が知れる愛唱歌

大阪市　伏見雅明

宝くじ買ったつもりの酒を飲み
落花生五個や六個で収まらぬ
一癖も二癖もあり頼られる

大阪市　井丸昌紀

蝉しぐれ目覚ましがわり有り難う　大阪市　吉内タカ子

犬散歩私が犬に歩かされ
遅まきで焦れば駄目よ句読点　大阪市　平井露芳

皇太子一家で公園デビューする
齧られていたのか痛む俺の脛
屋上も帽子代りに花を植え　大阪府　桑田ゆきの

水着の娘肥満を隠す斜め撮り
虎勝ってにわかファンになった父
寺詣り善男善女の顔となり　生駒市　小西稔

討論も選挙近いと熱入る
政治家の法螺吹く態度まだ続く
笛吹けどメールに夢中踊らぬ子　泉佐野市　備後三代子

家じゅうの椅子集合の帰省客
垣間見た女性上位の子の家庭
バースデー倖せいろのケーキの灯　交野市　田岡九好

孫ありてよく生きんとす花木槿
この茎を食べていたのか芋畑
イヤホーン小さな世界持ち歩く　門真市　矢阪英雄

山陰は夏の膳にも蟹を出し
朝市のばあちゃん八十路口元気
かがり火に群がる鯉に花火そえ　岸和田市　堤楢代

小泉さん甲子園まで顔をうり
入道の雲に見られて露天風呂
かけ声を一つ増やして老いの坂　岸和田市　中島寿海

貸してやる仏顔した鬼畜生
外国の会社が増えた保険業
問診でろくろく聞いていない医者　岸和田市　亀井皎月

こおろぎの啼く音坪庭秋にする
夕映えの山に感じて振り返る
秋夜長人の心を迷わせる　堺市　奥時雄

若い娘にもてて上司に睨まれる
熱血の師の鉄拳を覚えてる
気がつけば似合う夫婦になっていた　堺市　河盛龍三

生き甲斐を目指して今日も一つずつ
人間の次の支度をする地球
折角の原発なのにこの冷夏

おだてには脆いしっかりもんの妻　堺市　荻野像山

突然の悲鳴にお化け腰抜かす
諦めるときは他人になり切ろう　高槻市　大崎侑子

自信ある意見ゆっくり立ち上る
信頼も徐々に薄れる遅刻癖
遅刻して主賓の横に座る破目　高槻市　執行稲子

からからと耳をくすぐる風車
チャンス待つ少年の眼に蝉の殻
敬遠はイメージできめる花言葉　高槻市　安田忠子

庭の木を短く切って夏支度
夢舞台水琴窟の心地よさ
それぞれの思い繋がる夾竹桃　寝屋川市　中川恵香

紙とペン頭の体操金いらず
おしゃれして首にスカーフ風楽し
雑学で荒稼ぎするクイズ狂　羽曳野市　永田章司

熱中のゲームに母の声がとぶ
試着室自分の肥満気付かされ
蝉しぐれ短い命ほとばしる　羽曳野市　濱口フジ

早生米（はやばまい）台風一過稲を刈る
台風が過ぎれば騰（あが）る生野菜
雨戸閉め台風一過の時間待ち　東大阪市　今岡貞人

空も樹も心も笑う梅雨晴れ間
一つ覚え二つ忘れて母達者
冷房で終戦語る平和なり　枚方市　小川良吉

考えに欲がからんで騙された
蝉しぐれ起きろ起きろと攻めたてる
世は不況花火ドンドン知らぬ顔　枚方市　大昇隆広

久し振りの友も苦労へ余力あり
酒旨し情知る仲間泣き笑い
町静か悲喜が漏れない壁と鍵　藤井寺市　伊藤アヤ子

雑草は生きるところを選ばない
雑草に生きるてだてを教えられ
納涼を台風一過につれさられ　藤井寺市　増井ヨシ枝

良いことが続いたあとの偏頭痛
窓開けば隣の犬がかけてくる
植木屋がハサミ忘れて行かはった

見解の相違しぶしぶ加算税
この五体悪くないのは口と腹
巨大迷路うろうろ出口あったのに

箕面市　寺井柳童

脱け殻が哀しく揺れる蜘蛛の糸
青空に着飾る雲はボクのママ
不景気で空の旅からバスの旅

八尾市　笹倉ひろし

楽しさと優しさで押す車椅子
まばたきをする間に事件起きている
拘泥をなくし流れのままに生き

兵庫県　黒崎美紗子

日の長さ退屈ごころ辛抱す
沢庵噛む音へはずます昼ひとり
低温の今年の夏がものたりぬ

兵庫県　岩本美緒子

蝉しぐれ元気を貰う朝の風
お茶どころ宇治の街並濃いみどり
日日草紅白咲いて仏前に

尼崎市　古川正子

渋い顔出来ず神様聴きいます
極楽は人手不足の重労働
行きずりに紫陽花くれる花の主

尼崎市　桑原東園

富十郎二子誕生に古稀も燃え
かたくなに前例守る敬老会
八起きめで逡巡している影法師

神戸市　伊勢田毅

少しだけ中心ずらして生きようか
嫉妬心少しぐらいは生きるバネ
角曲がりいつもの景色見て安堵

神戸市　田中章子

孫と祖母リズム音痴の夏祭り
流行に負けずと携帯メールする
初盆は亡姉とすてきな夢デート

三田市　辻開子

夏が好きうちわ片手に生ビール
私にも時効になった秘密ある
燃え尽きた焚き火の跡か悔いはない

奈良市　成橋邦柳

うっかりはちゃっかりよりも僕は好き
うかつやな　しっかりしいやと仏間から
苦あれば楽と教えてくれた亡母

奈良市　矢野良一

役どころ心得犬が吠えて出る
楽しんだ分だけえらい帰り道
愛子様手を振るポーズ決まってる

奈良県　藤村重之

奈良県　南海　美知夫

好奇心ちょっと覗いて見るヌード
削られて野仏の影うすくなり
手斧跡太古の匠の脈が打つ

橿原市　藤永　実千代

饒舌も寡黙も癒す船の旅
人情も自然も大地の中に生き（北海道）
礼状に幸せの文字満ち溢る

和歌山市　橋爪　佐一

正直は得か損かと自問する
街に出て若さを拾うコツ憶え
老眼鏡縁がないのが金儲け

和歌山市　今一歩

遠花火ときめく空へ背伸びして
台風一過満月に笑み取り戻す
届かない想い日記へ綴りゆく

鳥取市　岡田信恵

大あくびとたんに入歯踊りだす
過去はよし今はなおよいくずさずに
仏壇に面影偲ぶ手をあわせ

鳥取市　近藤秋星

灯籠流し遠き日に見た亡母の里
いのちあるもののよろこびカンナ燃ゆ
名優になって人生演じよう

鳥取市　西尾敬之介

井手川の水争いもなく流れ
頬杖をついて眺める古代蓮
見栄を張る国産ウナギ高値でも

鳥取市　河田のり代

紫陽花の色鮮やかに茶人待つ
ドライブも目的無しのショッピング
情報がアンテナ通し洩れて来る

鳥取市　谷岡清子

懐かしい蝉思い出す里の夏
ラムネ瓶懐かし飲んで玉眺め
送り火に煙と帰る仏様

鳥取県　西原真一

楽しんだ後はかたづけ待っている
私の好みやっぱり丸い顔
コーヒーの把っ手が右にばかり出る

鳥取県　池澤大鯰

登山電車ゆっくり山になれて行く
傾いたまま案山子山田に残る
傾斜地に建つ家みんな直立す

鳥取県　竹森富久江

深く追い寝た子を起すことはない
機嫌よく喉を震わす四季のうた
海ほおずきの波と戯れても恋路

孫が寝てほっと一息妻とお茶
妻の日もあってなおよし夫の日も
漁火と一緒に点す盆迎え

鳥取県　竹信照彦

カットして気分さわやか風に会う
風鈴も秋風好きとよい音色
渋い茶が時には心落着かせ

鳥取県　山岡久枝

子育てへ我慢すること教えこむ
ダイエット我慢がたりずすすまない
ほどほどの我慢楽しむ貯金箱

鳥取県　藤山弘子

エプロンをすると美味しい味きまる
戦する度に命の火が消える
ぼんやりと来世の夢を見る一瞬

鳥取県　岩崎和子

夢の中映画のようなラブシーン
いつまでも二十歳の気持ち夢を追う
追いついて声をかけたら違う人

倉吉市　大下智子

人生に抱く夢があり力湧く
生涯の歌は変らぬ友である
友達になりたく離婚する二人

倉吉市　青砥菊枝

掃除洗濯できる男をさがしてる
読み切れぬ厚い句集を読んでいる
リストラの首を切っても血が出ない

米子市　池尾保子

ふるさとの風はやさしい色してる
墓掃除語りつくせぬ四十年
人生の勲章ですとシミに皺

松江市　山根邦代

いい訳の視線の負い目揺れている
早朝に家族と繋ぐしじみ汁
真夜中にまだ漁火が燃えている

出雲市　荒木英子

見栄誇り忘れて旅の露天風呂
好きだった酒よと盆を飲んでいる
老人力負けてなるかよ雲の峰

安来市　原煩悩児

台風の進路気になる旅鞄
にっこりと無心に笑う母といる
観覧車自由に空を泳ぐ夢

倉敷市　撰喜子

進化する流れの中で風となる
婆ちゃんが一番好きな田植唄
きのこ飯食べて体のリフレッシュ

岡山県　土居ひでの

台風一過空の青さと鍬を打つ　府中市　馬場利子

ねじれ茄子器に盛れば喋り出す
野の風がわたしの指に触れたがる　唐津市　岩崎實

出かけるよ皮膚科に内科鍼灸院
月水金忘れてならぬゴミ捨て日
助手席で減点してる妻を乗せ　東かがわ市　向山治延

老農の鍬握る手に胼胝幾つ
老農が腕で育てた棚田米
無人駅腰をおろせば秋の風　愛媛県　黒田茂代

喧嘩する愛も無くした夫婦独楽
風鈴がとても眠たい軒無風
今日一日生きて長生き考えぬ　高知県　百田幸

日々多忙これが生き甲斐かも知れず
時偶に転がる缶を蹴ってみる
仏にも鬼にもなれず老いてゆく　高知県　桑名孝雄

酒五合年齢テストする目盛り
大望は捨てて付いてる蟻の列
看護師にナイチンゲールの貌が消え
思うこと多く惚けてる暇がない
晩年の慰め貰う人に逢う
秋祭り汗の香りが風に乗り
行く夏を惜しむか今日の祭り笛　（前月分）岸和田市　亀井皎月

平成十五年度
高野山合祀法要
於・高野山大霊園

日　時　十一月八日（土）雨天決行

集合場所　南海電車「なんば駅」三階中央改札前
午前九時三十分集合（九時五十分「高野号」乗車）時間厳守
午後五時五十分頃なんば着予定

費　用　五千円（交通費・昼食を含む）

締　切　十月二十日（月）本社事務所宛
○別の交通手段で参拝される方は、直接会場へ十二時三十分までにお越し下さい

合祀者　浦辺　静江・野田素身郎・権代　康女
越智　一水・石原　靖巳・高須賀金太
山門　幸夫・酒井　輝・西沖　彰雄
松本ただし（敬称略）

平成十五年度 路郎賞

弘前市

髙瀬霜石

手の中の虹を時々舐めている
空気ってこんなにうまい雨上がり
割り箸がきれいに割れて仲直り
赤ちゃんがくれるちいさな南風
福耳を毎朝映す洗面器

世間が「笑い」を求めているのだろう。「川柳の話」をしてくれという依頼が多くなった。話の中味は当然、話す相手の性別、年齢で大きく変わるが「俺に似よ～」で始まり、「古くとも～」で終わるのだけは変わらない。

僕の川柳人生の中で、最も重く大きい名前。死ぬまでにはと思っていたその賞が目の前にある。さあ、困った。次の目標が定まらない。

柳歴

昭和六十一年　川柳を齧りだす。
　　弘前川柳社入会
平成　六　年　川柳塔社同人
平成十一年　路郎賞準賞
　　現在、弘前川柳社副主幹

路郎賞準優秀作第一席

藤井寺市　髙田　美代子

血統書卑しい真似はしてならぬ
もう武士に戻らぬ刀売ってきた
戻れない位置に男の駅がある
河豚も人も毒の辺りにある魅力
とんがって暮らすと穴の開くこころ

路郎賞準優秀作第二席

鳥取市　岸本　宏章

生きるとはチャレンジ靴を光らせる
欠点を除けば長所まで消える
少しだけ汚れにんげんらしくなる
正直に生きているからよく迷う
二十五時今日をゆっくり折りたたむ

平成十五年度　川柳塔賞

高知市

小川　てるみ

きっかけが欲しい火種は抱いている
いい事が降って来そうな青い空
ふる里の駅から続く花明り
土壇場で女が見せる底力
現実に戻れば主婦の顔になる

川柳塔賞受賞の報を受け、一瞬身も心も震える思いでした。このような名誉ある立派な賞を頂き、ほんとうに感激しております。

これも川竹会長始め諸先輩、柳友の方々の温かいご指導の賜物だと感謝しております。今後はこの賞の重さを肝に銘じ、一歩一歩精進してゆきたいと思っています。今後共どうか宜しくお願い申し上げます。

ありがとうございました

柳歴

平成九　年　高知川柳社入会
平成十二年　川柳塔社誌友
平成十三年　高知川柳社同人
平成十五年　川柳塔社同人

川柳塔賞準優秀作第一席

河内長野市　石堂　潤子

絆創膏スパッと剥がす人が好き
私のバイブル笑顔詰めてある
これ程に本積み上げていて無学
薔薇園でお伽の国の人となる
花菖蒲女さらりと美を競う

川柳塔賞準優秀作第二席

神戸市　山口　光久

飾り気のない人だから気を許す
疑いの眼で見ると月も欠け
巣立ちせぬ雛に気をもむ親ごころ
義理という杭があるから迂回する
貧乏と仲良くできた子供たち

路郎賞得点表 （応募総数200名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高　薫風			5	2		1		3											4	
河内　天笑	3			2	5											1			4	
板尾　岳人			5				4					2	1		3					
斉藤　　劦		3	5			2									4	1				
島　ひかる						1							4	3	5					2
大内　朝子		5	4			1							3			2				
加島　由一							2						4			1	5		3	
塩満　　敏		1	2		3	5												4		
髙杉　千歩			5		4	2								3		1				
谷口　　義	1		5	3			4	2												
津守　柳伸		3	5						2				1							4
宮崎シマ子		1	2				5		3									4		
田辺　鹿太		1							4					5	3	2				
西口いわゑ								3	1					4			2			5
春城武庫坊							5										4	2	3	1
榎原　公子			4	1			5				2			3						
福本　英子			5		1		2	4							3					
植田　一京			2		1	5						3		4						
鷲見　正子			4		2	3						1		5						
西原　艶子			5						1						2		4	3		
森山　盛桜			1				2		4						3		5			
竹治ちかし			4		2		5		3					1						
松本　文子			5		4		2	1						3						
吉岡きみえ	1				3		5										4	2		
井上　富子		4			3	2	5											1		
藤解　静風						1	2							3	5					4
赤川　菊野		3												5		4			2	1
中居　善信			4				3							5	2		1			
	5	21	㉒	8	28	23	㊶	13	18	0	2	6	13	㊹	30	12	25	16	16	17
	土橋はるお	中井　アキ	高瀬　霜石	古久保和子	山本　半銭	徳山みつこ	髙田美代子	神夏磯典子	門谷たず子	小糸　昭子	林　瑞枝	安達　忠央	海老池　洋	岸本　宏章	高橋　岳水	福士　慕情	城　多喜	徳田ひろこ	小林　妻子	中井　ゆき

川柳塔賞得点表 （応募総数 95名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高　薫風	4						2					3			1				5	
河内　天笑	1			3			5					4								2
板尾　岳人				3	2				4									5		1
斉藤　劦				5								3	1		2					4
島　ひかる	4	3		2			5										1			
大内　朝子		1					3		2			4								5
加島　由一									5		4	1			2					3
塩満　敏					2	3	4		5								1			
髙杉　千歩				5		4									3		1			2
谷口　義	5								4		1	3						2		
津守　柳伸				3			4				5							1		2
宮崎シマ子						4		2			3	5			1					
田辺　鹿太	4	5					3										1			2
西口いわゑ				2								5		1	4					3
春城武庫坊				2					1	4								3		5
榎原　公子				1		2						3				5				4
福本　英子				4			1		3			5						2		
植田　一京	2			4		3												1		5
鷲見　正子	1			2	4	5												3		
西原　艶子					5		1			2		3								4
森山　盛桜						5			2			3		1						4
竹治ちかし											4	5			2			1		3
松本　文子				2	4	1					3							5		
吉岡きみえ	5	1			2						4						3			
井上　富子				4		1						2					5			3
藤解　静風				4			5			1	2									3
赤川　菊野	3				1		2					4								5
中居　善信								1			3		2	5						4
	29	10	0	㊻	20	28	35	3	26	7	29	㊸	3	7	15	5	12	23	5	㊹
	両川　無限	井上つよし	根田　美子	山口　光久	加藤　権悟	巌田かず枝	三浦　強一	平野あずま	大西　文次	清水　英旺	黒田　茂代	石堂　潤子	永浜加津子	千葉　武	三浦千津子	大峠　可動	江波　正純	森下　順子	桑名　孝雄	小川てるみ

二賞選考規定（要約）

①路郎賞　川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞　水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、**8月10日必着**で本社宛郵送する。

②第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④第二次選者
本社関係　名誉主幹・主幹・理事長
地方関係【　】＝ブロック（　）選者数
【北海道・東北　関東　北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名

地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

⑤川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

①川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。

②自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。

⑥路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。

⑦愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。

（備　考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

お祝のことば

河内天笑

二賞選考方法が改まって五年目になります。応募締切日を昨年通り八月十日とし、同十二日に第一次選者六名が本社事務所に集まりました。応募自選作品を昨年までの八句を五句に改めた事がこれまでと異なるところです。

これによりひとりひとりの個性が極められ、第一次選の集中度も増すものと考えた結果です。応募作品から全員で二賞各四十人を選出。その優秀作品より各二十人に私が絞る作業はわくわくもしますが、辛い作業でもあります。

断突で路郎賞に輝かれた高瀬霜石さん、準賞の高田美代子さん、岸本宏章さんおめでとう。

川柳塔賞を得られた小川てるみさん、たゆまぬご精進が実を結びました。準賞の石堂潤子さんは、昨年の各地柳壇賞に続いての受賞となりました。山口光久さんおめでとう。

愛染帖賞には福井桂香さん、茴香の花賞に山本希久子さん、一路賞に前たもつさん、そして各地柳壇賞に原苑子さんと、今年の受賞者の皆さんは、地域的にも男女の割合もよくバランスのとれた結果となり喜んでいます。

二賞選考経緯

木本朱夏

第二次選者を昨年に引き続き今年度も全国を九ブロックに分け二十五名を選出し、名誉主幹、主幹、理事長を加えて二十八名と決定した。応募締切後の八月十二日、第一次選者が本社事務所に集まった。

まず規定違反がないか、全作品を川柳塔誌で確認作業にはいる。選者全員が全応募作品と慎重に真剣に対処、選出した二賞それぞれ数十編の中から主幹が各賞二十編ずつを選出。コピーし二次選者に郵送した。

返送されてきた葉書を二十一日に整理し、規定違反がないか再度確認のうえ、受賞者が決定した。今年もまた応募締切後に届いた作品が何通かあった。必ず締切日を確認して応募して頂きたい。

今年も残念だったことは、昨年度より応募者が少なかったことである。昨年も書いたが改めて言いたい。伝統と権威ある路郎賞、川柳塔賞に応募することは、一年間の自分の作品に向き合い、見直す絶好の機会である。お祭りは観るより参加してこそ楽しいものだ。常にチャレンジ精神を失わず、来年はより多くの方々のご参加をお願いしたい。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	鳥取県	富田林市	弘前市	和歌山市	堺市	羽曳野市	藤井寺市	大阪市	西宮市	大阪市	米子市	枚方市	枚方市	鳥取市	弘前市	弘前市	出雲市	鳥取市	岡山県	米子市
川柳塔賞	神戸市	東京都	和歌山市	神戸市	日立市	横浜市	札幌市	岐阜市	河内長野市	京都市	愛媛県	河内長野市	柏原市	和泉市	大阪市	田辺市	奈良県	和歌山県	高知県	高知市

平成十五年度　愛染帖賞

受賞作品

和歌山市　福井桂香

燃えながら紅ほおずきは淋しがり
心太つるんと雨はまだ止まぬ
受胎する予感ふるえて花粉の黄
やるせない吐息に光る雨蛍
沸点にとどく涙は容赦なく

評　愛染帖の選を受けた時から桂香さんの句のロマンチシズムに注目をして来た。その作品の多くは省略の裏にある抒情と共に、深い呼吸のリズムが伝わって来るからである。受賞の五句にはその抒情の優しさが溢れていて、短詩型である川柳の美を見せてくれた。

燃えながら紅ほおずきは淋しがり

紅ほおずき哀記とも言えようが、「燃えながら」の表現はなお鮮明なイメージを伝えている。

（波多野五楽庵）

福井桂香

憧れの愛染帖賞を戴けるなんて、まるで夢のようです。イメージを膨らませ、縮め、苦しみ、これからも自分の歩幅で歩いて参ります。選者の先生、励まし応援して下さった柳友の皆様に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

柳歴

昭和五十五年　三幸川柳教室入会
昭和五十九年　川柳塔賞準一席
昭和五十九年　川柳塔同人
平成　六年　和歌山文芸まつり知事賞
平成　八年　川柳句集『花の館』出版
平成十二年　茴香の花賞受賞

準賞作品

海南市　三宅保州

お手頃なお値段ですという柩
温暖化だろうか微熱下がらない
私でない日があればなと思う

弘前市　斉藤劦

触れないでおこう紫陽花散るまでは
幸せがこぼれぬように眼を閉じる
さくらさくら一人が生まれ一人逝き

大和高田市　鍛原千里

鬼灯がきゅきゅっと泣いて夏の鬱
冬の絵に男心をあそばせる
花結びほどくと長い過去がある

平成十五年度　茴香の花賞

受賞作品

吹田市　山本　希久子

友達を数えて森へ来てしまう
不透明な現実がある海の彩
立ち止まり流れるものをせき止める
疚しくてたくさん使う修飾語
五月の風　私の殻をどう破る

評　異彩を放つ個性の持ち主ばかりの句に向かい、真剣勝負の最終選考でした。

山本希久子さんの句は、最初から目がはなせなく、引き寄せられるものがあり、茴香の花賞に推しました。準賞の高田美代子さんの句には、毎回脱帽の連続でした。千里さん、畔さん、ふみさん方からは、それぞれ目線の異なる句を頂き、受け止めるのに必死でした。

大勢の方々から佳い句をお寄せ頂き、茴香の花欄も賑わいました。お礼申し上げます。

（政岡日枝子）

準賞作品

藤井寺市　高田　美代子

影法師を捲くのは次の角辺り
せっかちで一つ飛ばしの数え唄
明日より今日一日を持て余す
財布全開連休る・る・ぶ　してしまう
泣き寝入り割り切れぬ日の二十五時

大和高田市　鍛原　千里

矢印の先にも一度賭けてみる
春はいい胸の扉がポンと開く

松江市　川本　畔

スイッチオン今日は何でも聞きましょう
ざわざわと異変があった川の水

米子市　白根　ふみ

気負わずにおろし大根ほどの愛
新樹の下で汚れた刻をさらけだす

山本希久子

受賞のお報せに一瞬耳を疑いました。そして少し間をおいてから、じんわりと喜びが湧いてきた次第です。

わかってくれるかなと思いながら、95歳の母に報告しましたところ、大変に喜んでくれましたので、私の喜びは二倍となりました。思いがけぬ親孝行ができましたこと感謝しております。未熟者の私への励ましと受けとめまして、これからも学んでいこうと思います。

柳　歴

昭和六十三年　毎日新聞川柳教室入門
平成　一一　年　NHK学園全国大会大会大賞
平成　三　年　川柳塔社同人
平成十一　年　路郎賞準優秀賞
翠洋会　サークル檸檬所属

平成十五年度　一　路　賞

受賞作品

大阪市　前　たもつ

人の話しっかり聞けと耳二つ

評　口はひとつしか無いのに鼻穴、眼、耳は二つある、ひとつだけでも何とかなりそうなものだが、神様は二つずつ付けて下さった。雑音はシャットアウトして本当の人間の声をちゃんと聞けと神様はおっしゃっている。

準賞の句、こんな愛情の深い母が居て、こんな温かい家庭があれば私は放浪の旅には出ない。**（福士　慕情）**

難解な言葉を一切使わずに端的な表現、現在の世相へ警鐘と捉えて心して行かねばと感じました。

準賞のミツ子さんの句、キングサイズとのこと大きなひまわりを連想、シマ子さんの句、包み込まれるような人間愛に感動をしました。　**（古久保和子）**

準賞作品

八尾市　村上　ミツ子

いつだってキングサイズの母の愛

八尾市　宮崎　シマ子

迷い鳥おいで暖炉はもえている

候補作品

青森県　西谷　大吾

停車する駅は無かった父の貨車

箕面市　出口　セツ子

人種越え愛で地球を包みたい

鳥取県　土橋　螢

虚も実もあって煙草をやめられぬ

前　たもつ

川柳でこのような立派な賞をいただくのは初めてであり、大変な驚きとともに、うれしい気持ちでいっぱいです。

定年後始めた川柳で賞など無縁のものと思っていましたが、これを機会に本腰を入れて頑張りたいと思っております。

これまでご指導いただきました薫風先生はじめ、先輩の方々に厚くお礼を申し上げます。

柳　歴

平成四年頃より川柳を始める
平成五年一月　川柳ねやがわ入会
平成五年二月　川柳塔社誌友
平成七年九月　川柳塔社同人

平成十五年度　各地柳壇賞

受賞作品

岸和田市　原　苑子

手相には出ない幸せ持っている

評　苑子さんの句は、女であるがゆえの奥深い心が感じられ、それを更に高めていこうという強さのうちに優しさが汲みとれます。人間は、表だけを見ていてはいけないのですね。

準賞、候補作品いずれも、さもあらんと心底から納得させられます。　**（山本　義子）**

人の運命が何もかも手相に出るか、そうではないと思います。手相には出てないが貴女は今も幸せです。面白いみつけとユニークなところを戴きました。世の中には手相に出ない幸せをつかんだ人、努力している人、色々だと思います。手相に出ない幸せのある事に益々の応援を致します。　**（吉村　一風）**

準賞作品

個性ある顔だ不足を言うでない　（故）権代　康女

結び目のゆるみに気づく春の冷え　森　茜

候補作品

晩年にやっと帳尻合う二人　坂本　晴美

音たててみたい時あり砂時計　森本　伸二

満月を見ている勇気わいてくる　小島　史子

節くれた指にリストラ言い聞かす　両川　洋々

原　苑子

川柳と出会い一生の趣味にと喜び勇んだのもつかの間、試行錯誤の毎日が続いています。

この度、夢のような受賞のお知らせに、ただただ驚くばかりでございます。これもひとえに諸先生、柳友の皆様のお陰と心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

柳　歴

平成七年一月　岸和田川柳会入会
平成九年十月　市民川柳大会　文化祭賞受賞
平成十年二月　川柳塔社同人

■句集鑑賞

『喜寿薫風』

橘高薫風著

白日紅虹

栗原道夫

『喜寿薫風』には、『橘高薫風川柳句集』（平成十三年九月二十日発行。以下『川柳句集』と記す。）から二六七句、それ以外の句三三句、合わせて三〇〇句が収められている。『川柳句集』は、「乱れ髪」「有情」「檸檬」「肉眼」「愛染」「花径」の章に分かれている。（『喜寿薫風』は、章立てがなされていない。）それぞれの章から自選された句数は、以下のとおりである。

「乱れ髪」　一〇句
「有情」　二一句
「檸檬」　五〇句
「肉眼」　五〇句
「愛染」　七七句
「花径」　五九句

ほぼ『川柳句集』の所収順に配列されているが、次の二句だけ違っている。

鼻先をつんつん歩く好きな人

『川柳句集』では「肉眼」に収められているが、「愛染」の「氷嚢の下から見てる好きな人」の前に置かれている。（P120）

阪神大震災

地震熄んで一輪の薔薇毅然たり

「愛染」の句だが、「花径」の句と並んでいる。（P193）

235ページから『川柳句集』以後の句が三三句収められている。次の句も『川柳句集』にはない句であるが、188ページに収められている。

元旦や昭和の雪はもっと白

この句は、形は異なるが「川柳塔」の平成十一年一月号に発表されたものなので、「花径」の句と並べているのだと思われる。「川柳塔」には、次の形で出ている。

雪うさぎ昭和の雪はもっと白

作者にお聞きしたところ、最初から「元旦や」と「雪うさぎ」の二通りの句を作っていたということだ。

『川柳句集』以外の句で、このように初出時の句と異なった形の句が五句ある。最初の句が『喜寿薫風』に収められた句。下に年月を記したものが、「川柳塔」初出時の句。

1　元旦や昭和の雪はもっと白
　　雪うさぎ昭和の雪はもっと白　11・1
2　葉隠れに武士道プラトニックラブ
　　淡々と武士道プラトニックラブ　14・6
3　喜寿元旦白日紅虹灯台よ
　　志摩波切にて
　　白日紅虹　灯台と喜寿よき友ぞ　14・12
4　老一字狼の尾を巻くごとく
　　老いぬれば狼の尾を巻くごとく　15・6
5　魂魄を天地に分かちグッドバイ
　　魂魄を天地に分かち香華かな　15・6

1は、平成十一年の卯年にちなんで作られた句。「雪うさぎ」だと、「雪」が重なり、「うさぎ」の白と「昭和の雪」との対比とも受け取れる。「元旦や」とすることによって、平成の薄汚れた雪から、昭和の、平成よりは清浄な寒々とした雪を追憶する句であることが明確になる。

2は、原句の「淡々と」という説明のことばを避けたのだろう。

3は、「喜寿元旦」の句にするために、「よき友ぞ」ということばを省いたのだと思われる。初出時にあった前書きの「志摩波切にて」も省かれている。

4は、「老いぬれば」だと平板。「老」の字の「匕」の最後のハネの部分が、老いを感じている作者には狼が尾を巻いているように見

える。「老一字」と切ることによって、「老」の字を通して自分の老いを見つめるという立体的な句になった。

5は、「グッドバイ」によって、「魂魄を天地に分かち」の主体が、他人から自分になった。

これらの改作を見て、私が何よりも感じたのは、氏の自身の作品へのこだわりである。自身の作品への愛着と言ってもいい。

235ページからの三二句のうち三〇句は、「川柳塔」に掲載された句で、発表年月順に並んでいる。次の二句は、「川柳塔」未掲載の句。

僕僕と恋は少年に返えす（ママ）　（P253）

恋をするのももう煩わしいという心境を詠んだものか。お聞きしたところ、241ページの「葉隠れに武士道プラトニックラブ」があって、出来た句だそうだ。

火の色と水の形に苺たち　（P260）

「水の形」は苺の形を水滴に見立てたということだ。正直言って、お聞きするまで私には分からなかった句。「たち」は複数を表す。

次のような句を読むと、先人の句が自然に思い浮かんでくる。

その昔今も昔のかき氷　（P245）
かき氷ここらあたりはもと廓　栞

二句とも現在から往時を懐かしんでいる点では共通しているが、栞作品が世の変遷に重点を置いているのに対し、薫風作品は世の変遷に対して変わらないものを「かき氷」で象徴させている。

酒とろりとろり平成安愚楽鍋（P247）は、もちろん路郎の次の句を意識したもの。（／は改行を示す。）

酒とろりとろり／大空のこころかも

「安愚楽鍋（あぐらなべ）」は、牛鍋店を舞台にして明治初期の世相を描いた仮名垣魯文（かながきろぶん）の作品。平成の世相を話題に気分良く酔っている作者の姿が目に浮かぶ。鍋は当然、すき焼きだろう。

夕桜右大臣より年を取り　（P257）
夕桜とんぼがへりがしてみたし（ママ）　路郎
夕ざくら我七十の血の騒ぎ　栞

京都の知恩院の山門に左大臣と右大臣が居て、右大臣の方が年寄りだという。その右大臣よりも年を取ったという感慨を詠んだ。上五が決まらずにいたところ、路郎の「夕桜」を思い出して出来た句。私は、左大臣よりも位が下の右大臣よりも年を取ったと解釈し、物語を読んでいるような味わいがある句だと思った。「夕桜」で切れているのだが、「お互い年を取ったなあ」と、夕桜に語りかけているような気がする。

童話的（メルヘンチック）な次の句にも、たまらない魅力を覚えた。

三日月で鉛筆削る山の家　（P255）

ここまで取り上げてきた句はすべて、『川柳句集』以外のものである。最近の薫風作品の傾向を探ることによって、自選句集『喜寿薫風』に少しでも近づけるのではないかと思ったからである。

『喜寿薫風』を通読した印象は穏やかさである。「静謐」「透徹」などのことばも浮かんだ。『喜寿薫風』には、「由紀夫の首といくばく距つ焼林檎」「横揺りにあしかが歩く金脈へ」のような、烈しく凄まじい句は収録されていない。現在の氏の心境が、自選するときにも影響を与えたのだろう。

この世の事は奈落にも底　（P244）

散る花に二人の孤独重ならず（P258）

句集の掉尾を飾る次の句を読んで、些かならぬショックを覚えたのは私だけではないだろう。

魂魄を天地に分かちグッドバイ

わがままな読者としては、白日に浮かぶ紅の虹のような句（薫風先生、真っ白になってもらっては困るのです。）を今後とも読み続けたいと願っているのである。

喜寿元旦白日紅虹灯台よ

麻生路郎物語

―葭乃書簡の文学素養―

(10)

東野大八

本稿に随処に引用させてもらっている「葭乃書簡」は、大きなファィバーの手文庫二つに溢れるほどになっている。八十余歳の老女とはみえぬ、しっかりとした筆致の一枚、一枚には並々ならぬ教養に培われた文学素養の香気に溢れている。たとえそれが何気なく思いつくままに記されたハガキ一枚の文面にしても、にじみでる才能に托された女性の奥深い年輪といったものが感得され、時には感動の吐息すら流れでてくるのである。

路郎もこの妻の文学素養を認め、高く賞揚していた節が、川雑の彼の文章の随処にうかがわれる。川柳雑誌（S39・5・6・7）の〝妻を語る〟のなかに、大正三年五月発行の『番傘』五月号誌上〝みなみ〟という短編の一部を再録している。明治期の自然文学の影響をうけたとみられるその筆致には、リアルな風景描写はよく対象が捉えられている。

〝忙しい忙しいと口癖のように言うていながら、毎晩のように出掛けていくのは道頓堀である。と言っても別に役者にヒイキがあるのでもなく、出雲屋の匂いが殊更に好きだからと言うのでもない。とにかく、あの辺をブラブラおねりのように、行きかへりすることが好きである。

バーの白壁に高くかかっている赤銅のランターンや、前茶屋の板敷の大火鉢や、それを囲んだ舞妓の美しい白い襟脚や、黒づんだ道頓堀川にうつるやわらかい灯の色などを見ているとかえることがいやになる。もし私が男だったら紙治ではないが、魂がぬけてとぼとぼと我が家ながら高い敷居を越えたでしょう。私は南向に寝なければおそわれる程、宗右衛門町あたりや、道頓堀川の憧憬者である。

道頓堀と千日前は、目と鼻の近きにあるけれど、私は玩具箱のような千日前を歩くことを好まない。またあの活動写真小屋の無数の電燈は、恰も安物の後櫛にちりばめた新ダイヤのようだ。そして千日と言えば掏摸を連想する。花宗の薬玉のかんざしや、水に濡れた法善寺の敷石道をひきずる下駄の音などは流石に忘れられぬが、私にはそれ以上、千日を鑑賞する力がない。

私は南へ行くと必ず橘屋で臍饅頭を買う。私の十二、十三の時は一個五厘だったが近頃は一銭になった。値段のわりに味がよい。煙草屋の別嬪（べっぴん）さんより有難いオトリであると思った。〟

葭乃書簡（その一）以下要点のみ

正月もすぎ、二月を迎え南紀、大和、京都の梅の便りを耳にしながら、どこへもゆかず家にくすぶっています。女とは生命のある限りお台所とは縁切りにはならぬ宿命を持っています。男が外に七人の敵があるのと同様です。

私はまず一日のうち午前三時頃までは、家庭内のパートタイム、午后四時頃からは完全フリーの身になります。「武玉川」は昨日午後から晩までに残らず読ませて頂きました。みな参考になることばかりで面白く拝見しました。でも破れ袋みたいな頭ですから、すぐにこぼれ落ちて終いますが、必要な時には又思い出す事もあるでしょう。ありがとうございました。

私が住んでいる生駒から大阪の方へ、山ひとつ越せば石切、其の次の額田という駅でございます。その昔、萬葉第一期の女流歌人で天智天皇の弟君にあたる大海人の皇子とは恋仲の額田女王は、多分このあたりに住んでいられたのだろうか、などと思いながら、近鉄で難波まで行くこともあります。去る日、若草山の山焼を見に奈良雲雀ケ丘にいる奈那を訪ねました。雨あがりの後であったので、消防も出揃っているのに見事な山焼はみられませんでした。昔奈良公園で野外川柳会を催し打ち上げ花火で路郎揮毫の川柳を空高くただよわせた事を思い出しました。大和平野はあられ降るような寒い日でも遠くの山々は霞んで見えるところです。先日、〆女さんが訪ねて来られまして一泊どまりでどこかへ行きましょうとお誘い下さったのですが、近頃はホテルへ泊まるにしても、ロープ携帯でないと危い世の中です。街を歩けば交通地獄で「としよりはひっこんでいろ」といわれそうです。レジャーで月ケ瀬の里へ行っても昔のような風雅な梅見は出来そうにありません。まあテレビで、高原の花や小鳥でも見て諦めることにしましょう（後略）

思い出の昔

大ジョッキ並べ道頓堀の夜　　葭乃旧作

さくらん坊乙女こころをギヤマンへ盛る　　〃

君と僕そしてビールと桜ん坊　　路郎旧作

みな飲んでるぞビールが散るぞ夏　　〃

真夜中もネオン流れる戎ばし　　葭乃

久留久さんの残した猪口は九谷焼　　〃

梯子酒最後誰かの顔で飲む　　〃

雨のさかり場を思う時、私はいつも豆秋さんの「橋筋は春の匂いのこうこ巻き」の句を思い出します。橋筋は戎ばし筋のことですが今は、その頃の情緒さらになし。

葭乃書簡（その二）

私は永い間ミッションスクールに居て毎朝半時間は礼拝、後の半時間はバイブルクラスで毎日聖句を一句づつ暗誦させられました。

「あの人はハンサムだなァ」

と心に思うだけでも姦淫罪を犯しているのだと訓育され「人右の頬を打たば左の頬もこれに向けよ」の無抵抗主義にも馴れ、腹立たしさも烈しさも人を疑うすべさえも知らずに青春を過してきました。その為かいまだに現代の社会に対して抵抗も義憤も感じていません。感じたところで仕様がないのですもの。もし私の句にそう云うものがありとすれば「世は進化せりああ傀（かい）らいとなりし我等」位なものでしょう。「四面楚歌ひがむ心がそういわす」「三猿でゆけばうららかなる眺め」のようにカレンダーの下に一日一善の修養録として印刷したらよさそうな句ばかりです。

句の鑑賞を書く時には「川柳の叙景句には人間の存在を忘れません」と人には言うて置きながら、自分の句には自然を賛美した句が多いのです。私は川柳の鬼子かもわかりません。近頃は季なしの俳句が多くなり、人事も盛んに詠むでいられますが、俳句の人事はどうも気が抜けたビールのようで感心いたしません。「喰うてチョンぎす飼いおり」と云う句を詠んだ人がありました。私達はこれは面白い川柳だといいましたら、その人はこれは俳句だと主張するのでした。

俳人が詠めば俳句であり、川柳人がよめば川柳だといい得る程、両者は互いに接近して参りました。もっとも俳句も川柳も昔は同じ母胎から生まれたのが、ある地点から袂を別ち俳句は花鳥風月讃美の道をとり、川柳は人間くさい娑婆への道をとったのですから、後の世で相寄ることも当然でございましょう。

私は最初から川柳というものを非常に広義に解釈していました。「十七字われらの国語なるぞかし」と〝福寿草〟の巻頭へも書いたのですから、十七音字のスタイルで詠むことに変りはありませんが、その内容は昔の和歌の贈答歌のようなものでもよく「蜜柑山お伽噺にある日向」の童謡の境地であってもよく「父は飲み家出の母は美しく」の如く、小説

を圧縮したようなものでもよく「火葬場へ続く桜の並木道」のように幽明境を異にする人と桜花の現世との対照による技巧もよろしく「病人も頭を上げて礼をいい」の人情の描写でも、又「焼場です否応なしにおいであれ」の諧謔味ある句でもよいのです。

「ふだん着で来たのがいっち泣いてくれ」の古句調の穿ち、（これは小松園さんの句）「零零が零からの財布が二つある」の表現上の工夫のある句もよいと思います。

短詩型のものも世の移り変りと共に変化していく傾向はありますが、何も流行を追わなくても老人は老人らしく、ヤングはヤングの意気で川柳すればよいと思うのです。川柳も永年作句していると、何か将来のものとは違った新感覚のものが欲しくなるもので、ある一派の若い人の作品は、こうした意欲のあらわれでございます。然し五分も十分も、或いは半日考えてもなお判って貰えないような川柳は、結局ひとりよがりの句であって、共鳴度が少ないという事になるのです。

嘗って戦争たけなわであった時、統制という題である俳人が

—統制やああてのひらに降る霰（あられ）

と詠みました。その時、私の句は

—統制統制だまって日向見ていたり

というのでした。この二つの句を較べて見ますと俳人の句は純情な心の叫びでございます。

いつわらぬ感情の吐露、私はこの気持を高くかいます。それにひきかえ私の句はやはり川柳人の素質にたっています。無言の反抗が感じられます。権力によって物資の統制はあっても自然は惜しみなくわれわれに太陽のあたたかみを與えているのではないかというすね者の意志表示でございます。

藤村亜鈍さんが「僕は川柳をやるようになってから根性が悪くなった」とよく私に言われました。なるほど川柳は、すなおな表現ができない。一応はひっくりかえしてものを見なければいけないからでしょうか。

葭乃書簡（その三）

「武玉川」お送り下さいましてありがとうございます。川柳のバイブルであるという、「柳多留」も「武玉川」も、私は子育ての生活に追われていたのであんまり読んでいないのです。その理由は江戸時代の風俗習慣を知りつくしてなければ、受ける感度がうすいと思ったからです。あまりに名高い句は知っていますけれど、古句の知識はまことにおはずかしい次第です。

しかし、私は「柳多留」の句よりも、「武玉川」の句に私の好きな句が多いように思います。「武玉川」の叙景句は感覚的で印象が深いと思うのです。

—横町に一つづつある芝の海　（柳多留）

よりも

—闇の途切れるうどん屋の店

の武玉川の方が好きですし

—鶏の何かいいたい足づかい

の柳多留よりも

—鏡にせいてかかる鶏

の武玉川の方が好きです。

—投げられて鋏の心かわりけり

この句は武玉川にある句と思うのですが、句主の感情を鋏へ移して代弁させたところに技巧もあり女心がいたく酌みとれます。

—死で願いの叶う書置

の武玉川に対し現代の句に

—断固ゆるさず戒名にして拝み　一瓢

というのがあります。

私は句の調子と云うものは句主が自分の思想や情念を詠む時の呼吸にまかす可きものだと考えます。十二字詩、十四字詩が好きだからとて、いつもその枠をはずさずに作句していては、また調子のマンネリズムに陥ってしまいます。二十字でも、二十二字でも二十五字でもよいと思います。内容とマッチしたリズムでありさえすれば…。

愛染帖

波多野五楽庵選

出るところへ出るほかはなし心太　海南市　三宅　保州
それはもう昔話になりました
妥協する度に橋桁低くなる　出雲市　園山多賀子
生生流転　卒寿の風に独り族
過去庇う柘榴の赤い涙粒
愛憎の果て水平線と妥協する　西宮市　牧渕富喜子
錆覚にまた深爪をしてしまう
がやがやと通り過ぎ行くものばかり　弘前市　高瀬　霜石
供養ならこれしかできぬ酒を酌む
大根も男も辛い方がいい　弘前市　相馬　銀波
淋しさを隠す汗だね紙芝居
古傷に酔えない酒を注ぎこぼす　松原市　小池しげお
一本杉のいのち見上げているいのち
熱帯夜十一十二一時二時

思惑が透ける真っ赤なシルエット　富田林市　池　森子
この恋と四季折々の花の詩
向日葵の海に抱かれている眩暈　八尾市　井尻　民
裏切りの嘘カーテンが揺れ止まず
蝉しぐれ相呼ぶことに疲れ果て　和歌山市　福井　桂香
空が曇って色鉛筆をあたためる
澄んだ眼に隠した漆黒の銀河　東京都　やまぐち珠美
湧き水になりたい君を潤せる
修正のできぬシナリオ書かされる　西宮市　門谷たず子
どこまでも愛だと思う自画自賛
父の日を家じゅう忘れそれっきり　今治市　渡邊伊津志
七輪でラストダンスをするスルメ
蝸牛　哀れな角も持ち歩く　弘前市　斎藤　劦
洗って洗って私の彩が消えそうだ　吹田市　山本希久子
逃れたくなってざくざく髪を切る　鳥取県　西原　艶子
消えて行くロマンは謎のままがいい　横浜市　金森　徳三
雨は嫌　断ち切るものが増えそうで　鳥取県　田村きみ子
不器用で楷書のまんま老いている　鳥取市　福田　登美

散骨へわたしの罪もさりげなく　橿原市　安土　理恵
蝉時雨わたしの時が過ぎてゆく　和歌山市　木本　朱夏
足裏を荒い続けてなお生きる　和歌山市　西山　幸
紳士録　流れに乗った男たち　弘前市　高橋　岳水
振り返れば真っ正直と嘘少し　弘前市　宮崎ヒサ子
誤ってワタシを消した削除キー　鳥取市　福士　慕情
幽霊でいいさ逢いたい父の盆　鳥取市　武田　帆雀
二人乗る大きな茄子の馬作る　大阪市　前　たもつ
殺菌をされないように生きてやる　大阪市　神夏磯典子
世渡りが下手な墓場の曼珠沙華　京都市　都倉　求芽
風鈴が揺れるあの世この世のはざまにて　西宮市　西口いわゑ
目に見えぬ巡り合わせという悪魔　高槻市　乙倉　武史
誰彼なしに誉め殺しする生き上手　和歌山市　桜井　千秀
未練かな此岸のおんな紅をひく　弘前市　一戸　ツネ
妥協した時からリンゴ無口なり　愛媛県　中居　善信

熊本県　髙野　宵草
みんな寝てテレビが消えてわが天下

寝屋川市　森　茜
固まったままで面接室を出る

鳥取市　岸本　宏章
妥協する余地へイエローカード切る

和泉市　西岡　洛酔
文机の隅で私の過去眠る

吹田市　太田　昭
その強気そろそろ期限切れだろう

大阪市　小泉ひさ乃
花鋏　余分な情け切り捨てる

枚方市　海老池　洋
有終を思う窓辺の夏椿

米子市　白根　ふみ
浮世から隠れる日傘傾けて

横浜市　芦田　鈴美
眠らない街の明りの行き止まり

藤井寺市　太田扶美代
背景の哀を消さねば絵にならぬ

松原市　玉置　重人
ためされているのかルビが振ってある

交野市　田岡　九好
三十年前のことなり蝉時雨

倉吉市　牧野　芳光
人並みに不幸な顔になってきた

鳥取県　土橋はるお
感電死しそうな女とすれ違う

大和高田市　鍛原　千里
割り箸がいびつに割れる別れかな

寝屋川市　江口　度
神ほとけいつもピンチに呼び出され

茨木市　藤井　正雄
うっかりとからめた小指から波紋

唐津市　樋口　輝夫
門札にまだ頑張っている仏

武蔵野市　亀井　円女
涙なら人の三倍ございます

香芝市　大内　朝子
僕にしか歩けぬ道を生きている

尼崎市　春城　年代
どう見ても善人でない目付だな

黒石市　相馬　一花
ベスト着て哀れに尻尾振る仔犬

松江市　津川　紫晃
秋が来る前に指切りしておこう

鳥取市　西尾敬之介
長い列いぶかりながら列につく

唐津市　仁部　四郎
お役所の揉み手に一度だまされた

八尾市　高杉　千歩
ガレージになった田圃へ赤とんぼ

米子市　青戸　田鶴
桔梗おみなえし仏の好きな花にする

鳥取県　吉田孔美子
いそいそと応えてくれた雨後の花

鳥取県　土橋　螢
喜寿というカープ仏が待ち伏せる

和歌山市　松原　寿子
辛い日の面は捨てよう女坂

倉敷市　小野　克枝
悪口を笑顔で返す父の耳

青森県　西谷　大吾
想い出は何故か霞んだ色になる

富田林市　片岡智恵子
気がつけば深追いだったお節介

唐津市　市丸　晴翠
キリトリ線残して消した土石流

尼崎市　長浜　澄子
あいまいに踏み込むまいぞ傍観者

アルゼンチン　松井美稚子
百計を論ずる鶏の夜盲症

美祢市　安平次弘道
背信をなじれば浮かぶ私小説

大阪市　古今堂蕉子
隠れ蓑うまく着こなす人が居る

寝屋川市　籠島　恵子
脱ぎ捨てたかたちで人が来てしまう

唐津市　井上　勝視
突き放し親の愛だと逃げている

大阪市　三浦千津子
妥協点さぐる心の摩擦熱

松江市　安食　友子
彷徨の沼で切符も捨てちゃった

和歌山県　中後　清史
苦を楽に取り込み母は生きている

倉吉市　松本よしえ
ふる里にひとり静が待っている

富田林市　中井　アキ
ふんぎりがついて夜中のシャワー室

和歌山市　楠見　章子
のりしろの辺り噂がおもしろい

和歌山市　古久保和子
落丁のページで遊ぶ水子たち

八尾市　生嶋ますみ
落ちこぼれ一人もいない茄子の花

弘前市　櫻庭　順風
玄米を賢治に負けず食べている

弘前市　中山　雅城
ねぶた笛むかしの友を連れて来る

笠岡市　出口セツ子
幸福が表面だけを滑り落ち

和歌山市　吉村さち子
受け皿のない気楽さと淋しさと

泉佐野市　稲葉　洋
黄信号の位置で決断迫られる

鳥取市　夏目　一粋
ねばねばと納豆のよう妻の愚痴

米子市　中井　ゆき
旅ごころ向きをかえても北に向く

鳥取県　石谷美恵子
いい人だ発言もなく逆らわず

河内長野市　植村　喜代
行きたいとこ一ぱいあるから生きている

堺　市　山本　半銭
蛍はや短い夏の儚なさよ

鳥取市　春木圭一郎
発言を控え一目置かれだす

砂川市　大橋　政良
嘘一つウソと思わす難かしさ

唐津市　坂本兵八郎
しっぽからすり寄ってくるセールスマン

倉敷市　井上　富子
マンションに人魚一匹住まわせる

倉吉市　山中　康子
深情けあたえ過ぎではあるまいか

堺　市　矢倉　五月
黙ってはいるが拳は握ってる

和歌山市　福本　英子
切り捨ての出来ぬ昨日を引き摺って

札幌市　三浦　強一
年輪を刻んだ老いが美しい

鳥取市　近藤　秋星
百まで生きても大往生と限らない

竹原市　正畑　半覚
水風呂につかり人間らしくなる

寝屋川市　平松かすみ
日本の国が不安に成り申し

倉吉市　米田　幸子
寛いで眠る広さの箱でよい

三田市　石原　歳子
子供用百科事典でことたりる

松江市　三島　淞丘
大漁の海に男は多弁なり

羽曳野市　吉村久仁雄
路地の奥花いちもんめの絵本買う

富田林市　古田　千華
錦紗着た言葉が剥げて過去の女

堺　市　桜沢　千世
めこぼしの一つ二つは持つ拳

今治市　野村　清美
忠告も耳に入らぬ有頂天

鳥取市　録沢　風花
当ったらの話で終わる宝くじ

東京都　播本　充子
嘘つきの友人でいる丸い顔

和歌山市　田中　みね
二の舞を踏ませたくない娘の別居

八尾市　村上ミツ子
真実と作り話がドッキング

宇部市　平田　実男
目標は東大という絵馬の誤字

吹田市　岩屋　美明
ウインクの下手な兎で眼が赤い

京都府　丹後屋　肇
ジーパンの主張している膝小僧

日立市　加藤　権悟
三猿に妥協をしてる訳でなし

海南市　堂上　泰女
学園にエーデルワイス鳴って夏

豊中市　水野　黒兎
さわやかなラムネの泡が呼ぶ昭和

奈良県　渡辺　富子
妥協する塔がだんだん崩れ出す

和歌山市　山口三千子
石橋を渡っていても踏み外す

大阪市　鈴木トヨ子
うきうきと待つ御先祖の里帰り

大阪市　板東　倫子
ひとまわり小さくなったお中元

誹風柳多留二四篇研究 59

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生
清　博美・佐藤要人

455 **売物をかんがへて居る唐つくへ**

山田　売物は「④口実にする事柄。いいのがれの材料」（『日本国語大辞典』）。唐机は唐伝来の机で、家財の豊かな事でドラ息子を表現している。

吉原行きの口実を「どら息子思案す」（『川柳辞彙』脚註）の図。

うるものをくふうがむす子まだとりゑ　天四信2

伊吹　賛。ドラ息子に唐机を与えた親としては、『論語』などの学問に励んでくれるものと期待したのに……。

橋本　同。心そこにあらず。

清　賛。唐机の前に坐っていれば、『論語』などの素読であるが、あに図らんや、吉原行きの作戦。

佐藤　賛。

456 **ぐつとおし出してお針ハすい付る**

山田　本句について、清兄はその著『川柳江戸喫煙志』で「お針とは吉原で働く裁縫女、ぐっと押し出しては、縫っている着物か」とされている。礎稿者は当初、煙草を吸い付ける時の遊女の仕草を真似していると考えていたが、

ぐつとおし出シてしんめうたばこなり　安四礼3

という句に出会い、清兄説を採るべきと再考した。針妙は「③一般家庭に裁縫をするためにやとわれる女」（『広辞苑』）で、お針は遊里のそれ。

しかも首題句（原典・天四義2）は引用句（安四礼3）の引句の可能性もある。

おちやつひい鼻の穴から煙を出し　拾一〇23

灰吹きて付ケると内儀ふるく見へ　安元智2

はらさんさどなつて女房多はこすい　安四桜4

伊吹　賛。吸っている煙草の火の粉が飛ぶと大変だから、着物を煙管から出来るだけ遠くへ押しやる。

清・佐藤　礎賛。

457 **ふつていな物を嶋田ハ色にもち**

山田　仙台高尾。

払底は「②ほとんどないさま。希有なさま」（『日本国語大辞典』）で、高尾ほどの者を色に持つなんて嶋田重三郎もまた「払底な」者であろう。

嶋田にハ結す高尾の乱髪　六四6

嶋田とハ九十川程深くなり　六五12

ふつていなものハ女郎のよかりなき　安七鶴4

清・佐藤　賛。

458　**おいらんか名ゥ代きりゝしやんと寝る**

山田　雨譚註に「名代の新造きりゝしゃんとねる（安四天2オ）を悪く直し」とあるが、句意は同じであろう。

馴染客がかちあったりした場合「他の客にはそれぞれの妹分の新造を出すというのが廓内の慣習である。この傾城の代理として出された妹分の新造を名代という。（略）この名代が出た場合、揚代は格別値下げするわけではなく、その上、この名代には手も足も出せないという不文律がある」（『川柳吉原風俗絵図』）。

「きりゝしゃん」は「きりきりしゃん」に同じで、「身なりなどがきちんとしていて、立居振舞いに一分のむだもなく、かいがいしいさまを表わす語」（『日本国語大辞典』）。

首題句は、花魁の名代の新造には「手も足も出せない」のだから、名代は何ら乱れることもなく「きりゝしゃん」と寝ているというのである。しかし、客にとっては誠に不都合な「不文律」で、中には、

やぶれかぶれで名代をおつかじめ　三五41

なんて事もあったであろう。

貞節な新造の出るけちな晩　傍三28

けいせいのもりかへ一ト口チもくゑず　未三4

清・佐藤　賛。

459　**重箱をもたせ餅屋てつもらせる**

山田　江戸では人の死後四十九日には牡丹餅を配るが、それを入れる重箱を持たせ見せ、餅屋で費用の見積をさせるというのであろう。

重箱を見せて餅やてそうだんし　明三義3

くめんする・先重箱の寸を取り　宝十一仁2

ほた餅も新しいのハあわれなり　宝十一智3

清　当時すでに、牡丹餅も委託販売があったものと見える。

佐藤　賛。

460　**女の道のくたびれハ尻に出る**

伊吹　別に女性だけに限ることもないと思うが、長時間歩き続けると、疲れて歩き方がだらしなくなり、それまでピンとしていた尻が、幾分垂れ下がり気味になる様子を言ったもの。江戸時代の男はそれほど疲労感を極端に表に出さないからか、それとも、男の視線から特に女の大きな尻が目につくから、「女の」と限定したのであろうか。当時の女性が長い道のりを歩くのは、古川柳では、六阿弥陀詣が有名であるが、これも限定する必要はなく、一般句とする。

くたびれた道を見て居る坂の上　天五宝2

五あみたにしてもらひたき尻ッつき　拾三18

大野　顔には出ないで尻に出る。

橋本　賛。女性一般に年を取ると出っ尻になるということかも。

粕谷　橋本兄の言われるように年寄ると尻がたれることを言っているものと思う。「道」は人生のたどった道でしょう。

山田　「女の道」ですから右に賛。

清　礎賛。長道中のくたびれでしょう。着物を着ての歩行を考慮に入れなければなるまい。

「女の道」などというと、演歌にでも出て来そうなフレーズだが、江戸時代に「人生のたどった道」を、さて「道」と表現したかどうか。

佐藤　礎稿賛。

女性コーナー

黄昏の忠

藤田泰子選

初盆へこの世の色を選り生ける　西宮市　牧渕富喜子
電話機が手近なとこにありすぎて　東京都　岸野あやめ
順風の舟は港へ寄りつかぬ　倉吉市　野口　節子
幻にならん いち面ラベンダー　藤井寺市　鴨谷瑠美子
淋しさを残して帰る子等の影　鳥取県　福田　登美
矢印はわたくし流に書き換える　和歌山市　古久保和子
一本の芯をしっかり抱いている　大阪市　津村志華子
ほほえみを少し返して秋にいる　富田林市　池　森子
ちぎれ雲　恋の残像追うばかり　吹田市　山本希久子
吹く汗へ木綿は母の愛に似て　大阪市　神夏磯典子
茶柱の夢が消えゆくティーバッグ　大阪市　川久保睦子
開き直ってトンネルで仮眠する　羽曳野市　徳山みつこ
下手に動いてがんじがらめの紐の数　和歌山市　西山　幸
モノトーン白髪交じりによく似合い　鳥取県　西原　艶子
雨続きわたしふやけてきたようだ　愛媛県　黒田　茂代
無洗米手抜きする気は更になし　大阪市　星野きらり
困ったね入道雲をまだ見ない　大阪市　松尾柳右子
言い訳なんかせんほうがよかったね　藤井寺市　髙田美代子
冷凍庫一度は空にしてみたい　熊本県　岩切　康子

キャミソール女おんなとひけらかす　東大阪市　北村　賢子
揺れている私を笑う白桔梗　八尾市　髙杉　千歩
合掌に微笑む風化した地蔵　八尾市　井尻　民
父の忌も母の話の多かりき　堺　市　志田　千代
雑草にごめんなさいと言ってぬく　米子市　中井　ゆき
贅沢なお悩みですねダイエット　横浜市　芦田　鈴美
ゆっくりと暮らすゆっくり窓を開け　芦屋市　黒田　能子
読みかけのページへ雨の降り止まぬ　尼崎市　長浜　澄子
身のほどを少しわかって雨季をでる　堺　市　西村りつえ
上には上　下には下の決まりごと　和歌山市　桜井　千秀
聞き流すことも不遜でない歳に　寝屋川市　堀江　光子
うっかりと御神輿担ぐ羽目になり　愛媛県　花岡　順子
吾亦紅　わたしやっぱりもの知らず　寝屋川市　森　茜
逡巡にひと駅前の途中下車　富田林市　中井　アキ
舌打ちをして風船がわれました　堺　市　桜沢　千世
精霊ながししばし煩悩からはなれ　米子市　白根　ふみ
一日を倍の長さにする炎　和歌山市　榎原　公子
四コマの漫画でいいよ我が余生　大和高田市　鍛原　千里
私には私の思案がある歩幅　熊本市　永田　俊子
父の背に長持唄のしみがある　鳥取市　岸本　孝子
素手でいる命の言葉掴むため　橿原市　居谷真理子
公園で信金さんがサボってる　東京都　播本　充子
ケアハウス見学女ばかりなり　米子市　青戸　田鶴
繃帯を巻いても傷は隠せない　弘前市　宮崎ヒサ子
言い勝った胸に淋しい風が吹く　倉敷市　小野　克枝

心優しいリボン笑いも花もある　米子市　林　瑞枝
戦いの急所はずれた銃の跡　三田市　久保田千代
飾らない人生だから背を見せる　米子市　小塩智加恵
うれしいと人に優しくなれるもの　倉吉市　米田　幸子
愛惜はさらさら持たぬ娑羅双樹　出雲市　園山多賀子
因と果揺れる吊橋てのひらに　弘前市　一戸　ツネ
耳元のナイショが温い七五三　岡山市　土居ひでの
入院中夜の時計で生を知る　交野市　山川日出子
夕立に一息ついた綿の花　倉敷市　井上　富子
脳天を一撃されて波が引く　和歌山市　松原　寿子
雨よ降れ地球もわたしも洗われる　西宮市　西口いわゑ
年金は命限りの福袋　寝屋川市　坂上　高栄
目には目をいやいやよそうそんな事　和歌山市　田中　みね
近ごろはマイナスイオン出す夫　寝屋川市　籠島　恵子
似た人がまた前を行く待ち合わせ　富田林市　片岡智恵子
お向いの座席も551と揺れ　堺　市　矢倉　五月
日が暮れてこれからの絵図画き直す　和歌山市　福本　英子
阪神が負けるとほっと落ち着ける　和歌山市　玉置　当代
面白い話を提げてくる見舞　大阪市　本間満津子
一筆箋添えて心を御裾分け　寝屋川市　平松かすみ
復興支援行かねばならぬ身を思い　橿原市　安土　理恵
母子像へ何故だかうすい父の影　大阪府　米沢　俶子
クローンはいや貴男がふたり居るなんて　大阪市　津守　柳伸
道しるべ丸い地球の信頼感　和歌山市　吉村さち子
手を抜くとそくざにしっぺ返しくる　鳥取市　永原　昌鼓
短いが温いあなたの結び文　東大阪市　笠井　欣子
騒がしい頃がよかった侘び住まい　鳥取県　佐伯　やえ
のび放題アワダチ草に負けている　西宮市　門谷たず子
今年も会えた荒神さんのさるすべり　豊中市　安藤寿美子
生れつき言葉を飾るのは不得手　吹田市　大谷　篤子
楽しみは思いがけない客が来る　富田林市　古田　千華
リズミカルに鳴る風鈴と蟬時雨　鳥取県　吉田孔美子
いそいそを見上げる猫も落ち着かぬ　アルゼンチン　松井美稚子
約束の出来ぬ恋情水彩画　和歌山市　福井　桂香
朝顔に気ままな風が絡みつく　河内長野市　植村　喜代
一人いて好きに暮らして留守ばかり　高知市　小川てるみ
ポケットの中で育む愛もある　東京都　後藤　早智
去年とは違う風吹く家族会　今治市　野村　清美
花時計眠たくなった待ちぼうけ　東大阪市　中岡　妙
繰り言を重ねて遊ぶ鬼ごっこ　八尾市　宮崎シマ子
お役所に融通のきかぬ古時計

富喜子さんの句―桔梗そして蓮の花、お盆を過ぎればこの世は秋、生前仲良しだった、新仏さんとの会話が聞こえて来そうです。**あやめさんの句**―相手の都合など考えないで電話をしてしまい、つい長話。後で少し自己嫌悪に陥ったり、プライバシーなどなんのそのテレホンセールに寝入り端を起こされたり、さりげない言葉の中に社会批判が窺われます。**節子さんの句**―母は港、順風に乗って大海へ出ていった舟、便りの無いのは無事な証拠と思いつつも、ちょっぴり淋しい母心をうまく表現されました。**瑠美子さんの句**―一枚の名画を見ているような気分、北の旅で見たラベンダー畑の青紫の海そしていい匂い、幻想的な風景を十七文字でうまく描かれました。

ラッシュ

播本　充子選

ラッシュからダッシュ遅刻はもう出来ぬ　天涯
覚悟して帰省ラッシュのど真ん中　理恵
スカートを挟んだままで出た電車　像山
夏ゆかた恋の芽生えがラッシュする　隆盛
名水へ順番待ちの日曜日　保州
釣人も鯵もラッシュの防波堤　晴翠
釣りバカがどっと繰り出す解禁日　慕情
大胆に押して押されて乗る電車　岳水
寝ぼけ顔ラッシュの中に吸い込まれ　淞丘
帰省ラッシュ故郷に愛のあるかぎり　半覚
鮨詰めに慣れて訛が風化する　霜石
スリも痴漢も狙いすましているラッシュ　善信
ラッシュ時はバンザイをして乗ってます　淳司
セクハラの温床とかのラッシュぶり　四郎
ラッシュアワー隣の美女のいい香り　洛酔
ラッシュ時は若い女性の方に寄る　伊津志
ラッシュアワー一人も同じ顔がない　悦男
ラッシュ時の不快も給料の一部　深雪
ラッシュ時に小さくなってる旅鞄　みつこ
ラッシュ時の人の流れの無表情　朝子
行くとこがある幸せなラッシュだな　重人
ラッシュアワー改札出れば歩調とる　たもつ

明日からはラッシュに縁のない身分　倫子
ラッシュオフパートの顔と医者通い　哲男
ラッシュ時鍛えてますとギャル神輿　(奥)五月
お祝いラッシュへ悲鳴を上げている財布　茂代
絵そらごとでしたね株や金ラッシュ　あやめ
職安の窓のラッシュに晒す首　(岡)幸生
砂嵐メッカへ続く人の群れ　あずま
団塊の世代ラッシュが来る老後　遠野
冥土から帰省ラッシュの盂蘭盆会　尚士
新世紀田舎街にもビルラッシュ　義男
エベレストさえもラッシュという登頂　ちかし
蝉時雨足取り軽くハイキング　花匠
カナ文字のラッシュに惑う脳回路　強一
アテネ五輪メダルラッシュの若い夢　公誠
恋人ラッシュそんな昔もありました　セツ子

佳

筍のラッシュ三食膳に載る　宏章
孫ラッシュとても財布がもちません　いさお
二日酔い妻の小言が堰を切る　兵八郎
デパ地下のダッシュ午後の六時から　千里
八月の樹に蝉入れ替り立ち替り　美代子

人

悪玉がラッシュらしいなこの数値　孔美子

地

ベビーラッシュそんな時代もあったのに　みね

天

押し寄せる六甲おろし浴びてます　吉岡修

軸

三つ指をついてラッシュへ送り出す

タクト

山本　蛙城選

輪の中にタクト振るひとひとり居る　朝子
クラス会箸のタクトで盛り上がる　雅城
金持ちがタクトを振るとケチくさい　章久
オバサンの個性にけつまずくタクト　妻子
党潰すタクト振れずにいる総理　東吉
葬礼のタクトで養子見直され　四郎
黒幕がタクト振ってる茶番劇　ヒサ子
異分子がまじりこわごわタクト振る　圭一郎
妻の振る今日のタクトに刺がある　鉄治
今はもうタクトも失せて可愛い猫　こずえ
じれったい恋を煽っているタクト　美明
タクトから逃げてひとりの風を読む　たず子
六甲おろしどこかでタクトふっている　一風
アメリカのタクトへ素直過ぎないか　正雄
人類がタクトを振っている奢り　保州
この胸にタクト気ままな影法師　晴翠
定年後メトロノームの不整脈　兵八郎
歳時記のタクトに合わせ生きている　みつこ
車座の軍歌にタクトなどいらぬ　宏章
林間学校小枝がタクト代りする　章司
一拍ずつずらして丁度いいタクト　理恵
あみだくじのタクトに似たり人生図　三代子

一本のタクトとこんな所まで　扶美代
子も二十歳父のタクトを折り畳む　㈱洋　岳水
銃口をタクト代りにした平和
ロボットにタクト譲らぬ意地がある　碧
神の振るタクトにもある変拍子　霜石
最悪の時も頓知で切り抜ける　義男
ジャンケンで決めたタクトが盛り上げる　充子
タクトより背中のあきが気にかかり　㈱章子
ふるさとの山がタクトを振る津軽　劦
過労死へ追いやるタクトだってある　雄々
反戦のタクト両手で振り続け　和香
神さまのタクト次第で来るチャンス　俶子
タクトとは縁ない家族五人住む　哲男
勝つまでのタクトに泣いた終戦忌　遠野
タクトには金の延べ棒使ってる　㈱千代

佳

痙攣をしているように振るタクト　准一
平成のタクトに僕は落ちこぼれ　たもつ
反省のタクトを振って憎まれる　公誠
アメリカのタクトの先がきな臭い　徳三
末席でタクト振ってる咳払い　慕情

人

ひょっとことおかめのタクト意気が合い　愛論

地

突撃のタクト振りたいらしい人　修

天

神様のタクトで今日を踊りきる　出口セツ子

軸

右向けの森にくぐもる指揮の声　たず子

ソフト

平松かすみ選

ちゃん付けで呼び掛けられた郷の道　像山
ソフトでもこわい渋谷のお兄ちゃん　あやめ
お嬢さんソフトな眉にしませんか　㈱千代
ソフトにもハードにもなる里の海　ちかし
交際中とてもソフトな彼でした　たもつ
バラとワイン揃えソフトな声を待つ　富子
ソフトクリーム二人で一つフルムーン　理恵
喜寿米寿ソフトな恋をしています　鐘造
切れた子をそっと羽毛で包みこむ　徳三
怖い先生なぜかソフトな参観日　志洋
楷書横目にソフトな文字のラブレター　郁子
好きですとソフトに告げる手話の指　㈱幸生
ソフトペンすらすらかけぬ固い指　實
火の言葉ソフトに語りだまされた　雄々
ソフトだが芯の強さに上司の目　庸佑
戦術をソフトに変えた風の向き　典子
刺のある言葉を包むオブラート　玄也
宣告へソフトに守るいのちの火　愛論
洗濯をソフトに仕上げして介護　朝子
三食をソフトに母の快復期　志華子
荒れ球を母はソフトに受けとめる　鉄治
おくるみのソフトこわごわ僕がパパ　三代子

赤ちゃんの頬っぺは神の贈り物　たず子
魚のごとソフトに泳ぐ金メダル　あずき
老残の夢はソフトで恙なし　隆盛
読経もし余生ソフトに詩と遊ぶ　一風
大掃除祖父のソフトをまた納う　四郎
一本のゲームソフトが社を救う　獏沓
マッサージ ソフトタッチが気に入らん　時雄
駐禁にソフトな府警手厳しい　正雄
セールスの舌が財布の紐を解く　慕情
語り口ソフトで蜂の一刺しも　㈱章子
やわらかな布団の好きな尾骶骨　美代子
慎重にソフトにキャンセルの言葉　扶美代
味噌汁の味をソフトにした主治医　正剣
粋な噂ソフトタッチで走りだす　修
風向きに合わせるソフトエネルギー　螢

佳

休憩の汗はソフトな風が好き　宏章
夏の陽も緑くぐれば柔らかい　みつこ
どの顔も柔和な感じ志功の絵　岳水
花好きに薔薇はソフトな棘になる　劦
窓際で柔和な面を彫っている　霜石

人

ヒステリック柔軟剤で濯ごうか　ツネ

地

消しゴムがソフトに誤字を消してくれ　伊津志

天

マシュマロに軟着陸をしたくなる　三宅保州

軸

おはようさんソフトに掛けて三世代

初歩教室

題 ― そろそろ

三宅保州

兼題（宿題、課題）に対する作句をするに当たって、いの一番にしなければならないことはその兼題の意味を辞書等で確かめることです。案外、自分が思っていた以外の意味があったり、曲解していることなどがあるものです。何よりも辞書を引くことにより句が浮かんだり句想が広がることが結構あるものです。例えば、今回の「そろそろ」という題をひもどいてみると、まもなくという意味と静かにという意味があることと、他の語を修飾したりする役割の副詞であることなどがわかります。そこから、静かにという意味で作ったり、まもなくという意味で作ったり、また、「そろそろ」という語をそのまま句に使わずに、足音を忍ばせて歩くとか、ぼちぼちあの人が来る頃だからというような表現を使うなど、幅広い句想、表現が広がって行くものです。ところが皆さんの集句を拝見するとかなり作り難い題だったようで同想句もたくさんありました。

【同想句】

「娘の無心」を詠んだ句

懐があの娘そろそろさみしかろ　政子
給料日そろそろ娘来る頃だ　良一

「遺言」を詠んだ句

遺言書そろそろ書いておこうかな　忠子
お父上そろそろですよ遺言書　昇

添 寄ってたかってそろそろ遺書を書けと言う

「包帯等」を詠んだ句

そろそろと包帯はずす医師は神　満子
そろそろと剥がす傷口絆創膏　九好

この場合、傷口は不要。ユーモアを効かし

添 大の男がそろそろ剥がす絆創膏

「焼香の足の痺れ」を詠んだ句

焼香順そろそろ足が痺れだし　つよし
焼香順そろそろ足を揉んでいる　像山

「適齢期、縁談」を詠んだ句

三十路娘に縁談勧め逆効果　益子
結婚にもうそろそろの適齢期　フジ

結婚、適齢期の語が重複

そろそろと言えど娘はパラサイト　章司
いい話そろそろ欲しい適齢期　昌鼓
もうそろそろ身を固めてと祖母の愚痴　善蔵

次は同想の域を超える佳句のお手本です。

縁談が起きて気づいた好きな人　エイ

母おもい妹おもい嫁きそびれ　祝平

「試歩等」を詠んだ句

そろそろと試歩伸びて行く松葉杖　喜子
そろそろと妻の手借りる試歩の庭　美弥子
そろそろと手摺りにすがる術後の身　洋子
リハビリ中そろそろとなら歩けます　登志子
退院しそろそろ歩く生きている　邦柳

次の句は、同想の域を超えた佳句です。

そろそろと動かしてみる病み上がり　大鯰

「逝くこと、身辺の整理等」を詠んだ句

母卒寿そろそろ覚悟要りそうな　いさお
逝く仕度そろそろ終わる老いた母　芳江
そろそろと身辺整理する母よ　ゆきの
身辺の整理そろそろ始めよう　侑子
そろそろと身辺整理始めよう　弘子
永遠の旅めざしそろそろ整理する　志津子
そろそろでなくてポックリ逝くがよい　照彦

次は、少し同想の域を超えた句です。

そろそろと丸うなりまひょあと僅か　円女
そろそろや亡夫が迎えに来てくれる　円女

添 もうそろそろ来いと亡夫の声がする

【添削・批評句】

原 我を張らずそろそろかわいい年寄りに　英旺

添 可愛い年寄りをそろそろ目指したい

原 還暦過ぎそろそろ来そう過去のつけ　はじむ

添 過去の付けそろそろ消してゆく老後
原 帰ろうかそろそろ家が恋しがる　アヤ子
添 旅三日そろそろ家が恋しなる
原 そろそろと思いでにぶる旅支度　とき
添 これからはそろそろ旅に出てみたい
原 そろそろと惰性でいかず型残す　タカ子
添 私の型をそろそろ残したい
原 そろそろと犬が顔向け合図する　弘之
添 そろそろ帰ろうと犬に急かされる
原 吊橋をへっぴり腰でそろそろと　ゆきの
原 そろそろと山は錦の絵巻物　千華
原 胴上げがそろそろ見えた甲子園　智加恵
原 そろそろと世代がわりで若がえり　稔

四句とも説明句。そこからを詠みましょう。

原 そろそろと本論入る真剣に　敬之介
添 酔うてきてそろそろ本音出始める
原 そろそろと斜面手に手を気のやさし　美恵子
添 そろそろと手に手を取って行く老後
原 そろそろと思うに立たぬお客様　清
添 そろそろと帰ってほしい箒立て
原 本閉じてそろそろ寝よう午前二時　忠子

説明句です。ストーリー、ドラマ性を

添 犯人がそろそろわかる頃寝付く
原 ダイエットそろそろ効果あがる頃　侑子

逆説的に詠むと風刺、諧謔が出ます。

添 ダイエットそろそろ匙を投げる頃

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 そろそろとタイムサービス値引き待ち　節子
添 タイムサービス間近そろそろ出かけます
原 改札口そろそろの人通せんぼ　好
添 改札機そろそろ行くと通せんぼ
原 座も乱れお開きを待つ店の人　時雄
添 お開きを今か今かと待つ店主
原 呑みすぎのつけがそろそろ来たようだ　イセ
添 呑みすぎの付けがそろそろ来る頃だ
原 痴呆症そろそろ来ると嫁に言う　こずえ
添 呆けることそろそろ嫁に言うておく
原 そろそろと呆けが来たねと妻が言い　准一
添 ああ夫婦互いに呆けをかばい合い
原 確実に目的果たすかたつむり　信子
添 そろそろとゴールインするかたつむり
原 そろそろと這う子世界へ第一歩　重之
原 十六歳そろそろ女性演じます　栄呼
原 デフレ殿そろそろ退去願おうか　淳司
原 そろそろとばれそうな嘘謝ろう　武
原 肩慣らし済ませそろそろ出番待つ　雅明
原 そろそろと老人会の仲間入り　みね代
原 健康にそろそろお金かかる齢　弘子
原 そろそろと歩き余生の夢語る　孝明
原 子も離れ妻はそろそろ翔ぶ構え　美弥子
原 そろそろと流れる雲も意味がある　信翁
原 生き下手な命そろそろ燃やしてる　映子

【佳　句】

検査終えそろそろ元の不摂生　実千代
健脚がそろそろ駄々をこねたがる　栄子
そろそろと脳細胞も壊れだし　郁代
つくつくぼうし鳴けば宿題気にかかる　益子
赤色がそろそろ似合う年になり　芳江
そろそろと腹の子どもがサイン出す　昌鼓
そろそろと腰をかがめて孫を追う　喜子
持久走そろそろ亀になる夫婦　敏子
そろそろと歩いておれぬ蟻の列　昇
残り火をそろそろ燃やし生きのびる　利子
暗がりをそろそろ歩き怪しまれ　邦柳
暗い道そろそろ行けばなお怖い　善蔵

両句の対比が妙。穿ちがよく利いています。

【今月の推せん句】

もうそろそろカボチャの馬車が来る予感　田中初恵

シンデレラの「カボチャの馬車」の直喩が極めて効果的です。

職降りてスローライフのボランティア　稲川惠勇

「そろそろ」という課題で、今流行の「スローライフ」を使った発想が成功。

【私の句】

表札の父消すべきか七回忌
さりげなく遺影用のも撮っておく

秀句鑑賞

同人吟　川端一歩
―9月号から

八月十六日は京都五山の送り日。大文字がよく見える河原を少し北へ、下鴨神社の古本市は最終日。午後二時から恒例の百円均一売場で大セールが行われる。ビニール袋一枚詰め放題五百円、単行本なら三十冊文庫本なら五十冊は入る。常連客は午前中に品定めをして先頭に並び開始と同時に目的の場所に飛んで行く。百貨店のバーゲン売場以上の混雑と競争。専門誌を漁る、小説随筆を選ぶ、マンガ本を探す、目が血走っている。

好きな本をどんどん入れると後でいい本を見つけても入らない。中に上品な人がいた。騒乱に入らず売場をよく見て回り、ダンボールを開きひもを解き本の山を崩して必要な本を選んでいる。袋はまだ数冊、本当の本好きかも知れない。

川柳観、詠むことは民主のはじめなり。

その時は寝床にもぐる手もあろう

江口　度

将棋に例えれば好手というより妙手。「新手一生」の升田さんを彷彿させる。

よい句とは「だれにでも分かり深みがある句」と教えられた。その時がくれば思い出すために頭にしっかり刻んでおきたい。

借金のCMかくも楽しそう

岩津　ようじ

新聞記事によれば、サラ金会社が政党のパーティー券を大量に買い、協力議員のリストも作っているという。無謀な利息と強引な取り立てに合い、主が自殺した家族はどんな思いで見ているのだろう。

点滴に好きなワインを吊してよ

杉本　孝男

この句を読んで辛口はニタリ。入院しても酒の句をこんなスマートに詠める感性がとてもうらやましい。

年金の元をとるまで生きてやる

古手川　光

高齢者が集まれば、年金と病気のはなし。年金の元をとるためには、長生きをすることそれから減らす側の論理に負けない力、陣地をつくることが大切だと思う。

言い分はまずは素直に受け止める

春木　圭一郎

人間関係であれ仕事のトラブルであれ素直に受け止めたり、必ず解決の道はひらける。接客の仕事をした経験をいえば、まずお客さんの言い分を聞くことだった。人はみなこうありたいと思う楽しい句。

自信ある挙手の拳は微動せず

鶴田　遠野

反対意見があれば討論したらいい。意見が違っても相手の立場を尊重する度量が大事なんだ。会社経営の中で剛と柔を使い分けている姿が見える。下五に好感。

温暖化防止自転車こいでいる

永原　昌鼓

地球の温暖化では抜本対策と合わせて、国民一人ひとりが参加できる具体策も大切だ。環境汚染という大問題を自転車で揶揄しているのがおもしろい。

酔うほどにまじめ仮面が脱げてくる

青枝　鉄治

実体験を指摘されてドキッとした。飲んべえの言い分が許されるならば、仮面が脱げる人間がおもしろい。飲んでまじめ面では酒がまずくなる。人間の断面をするどくとらえたところが素晴らしい。

ゆっくりと喋ると意見合うてくる

井上松煙

ゆっくりとの中に作者の寛い心が見える。ゆっくりと喋ると意見の違いもよく分かる。そしてゆっくりの中でこそ意見の違いが溶け合う道筋も見えてくる。

信頼の中に掟を持つ仲間

熊代菜月

友だちが「趣味の会はどう発展さすかよりどう壊さないかだ」とせっかちな私に注意した。つぶさないためにも約束ごとが必要だ。掟が堅ければルールでもいい。いつも輪の中にいる作者の姿が浮かぶ。

茶柱が立った裏切り決行だ

板東倫子

茶柱が立てば、ほんわかの言葉続くが常。それが裏切り決行とは、思わずうーんと唸ってしまった。不遜にも機会あれば作者に裏切られてみたいと思った。

腹這いになればまさしく山椒魚

新家完司

腹這いになれば、この八音字で句のすべて言い尽くしている。ベテランの妙。

定年を過ぎて、すべての面で姿勢が悪くなった。腹這いになって読書したり、手紙書いたり、目線が合う猫から軽べつされている。

さよならと言わずまたねと肩寄せる

小玉満江

またね、この三文字にどれだけ深い愛が込められていることか。美しいことばで余韻がある。ドラマにそのまま使えそうなセリフ。

作者の優しい人柄を垣間見た。

爆弾がイラクの油田避けている

森茂美

国会で珍答弁が出て顰蹙を買っている。イラクでパレスチナ人のカメラマンが米軍に射殺された。「誤認した」で許せるだろうか、大義のない戦争の犠牲を…。

甲子園鳶の笑いが止まらない

軸丸勝巳

高校野球を観に行って、入る時も出る時も仰いだのがあの鳶。夏は凛々しく秋の紅葉も美しい。枝の勢いは球に食いついていく球児を思わせる。鳶と阪神を繋いだ作者にV。

素人だなあと思っている砥石

小池しげお

職人だった亡父は「刃もの砥ぐ時は無心」と教えてくれた。

主婦が包丁を持てば、スーパーのこと、子どものこと、夫のこと等々考えごとが錯綜して無心とはほど遠い世界だ。材料は日常生活に当てて句に光沢を出す妙はさすが。

ひょっとして妻は怪物かも知れぬ

澤裕子

主婦業を賃金に換算すると給料の半分以上になると言う。主な仕事を拾う、子を生んでまず保育士、家族みんなの栄養士、赤字ばかりの会計士、夫迎える運転士、たまにお喋り雑学士、通夜と葬儀の代行士、つらつら考えるとまさに妻は聖なる怪物である。

生き方を考え直す通夜の席

齋藤さくら

ぬくぬくの仏を前に時には生前の浮気がバクロされることもあるが、多くは家族と会社のため献身した生涯であるだろう。某銀行の企業戦士で逝った人や病いに倒れた人が綴った文集を読んだことがある。「男たるもの銀行マンになるな」悲痛な叫びだ。通夜の席は人の生き方を考える場でもある。

隠しごとせずドドドーンと生きんかな

森井菁居

一つの宴会で一人の友だちを見つけることを信条にしている。ドドドーンと生きる人と友だちになりたい。

夫婦の約束ごとは「隠しごとをしない二人でいよう」だった。これは妻の策略だった。給料も公開だったので、定年までついぞへそくりが出来なかった。

秀句鑑賞

―水煙抄

―9月号から

浅野房子

今年は冷夏と言われている。

降りつづいた長雨も今月はやっと上がり、序でに蝉の声もピタリと止んだ。

無気味な秋の気配を感じつつ、水煙抄の秀句鑑賞をさせていただく。

半袖の腕に絡んだ今朝の秋

前上英一

作者は半袖の腕に秋の気配を感じられたようですが、短かった夏、せめて秋はゆっくり味わって楽しみたいものです。

花火師という影武者を忘れない

黒田茂代

夜空を飾る美しい花火、それは苦労して、美しい花火を作ってくれる花火師という方がおられるからで、ただ口をあけてみとれているだけでは申し訳がない。私も子供の頃、浜寺で土曜日になると花火が上がり、楽しかった思い出があります。

長生きはしたいが線の引きどころ

桑名孝雄

皆、長生きをしたいのですが、病気で長生きをしてもつまりません。健康でこそ長生きをしたいものです。さて、線の引きどころと言われても困りますね。

自分で引く訳にもいかないし…。

回天は五十八年前の夏

稲葉洋

毎年八月になると戦争のこと、終戦の話が出ます。六十歳以上の方は、それぞれ、筆舌に尽くしがたい体験をされたと思います。

五十八年前なら、母も友も生きていたのにと一人取り残された淋しさを思うのは、贅沢なのでしょうか。

ライバルを盾に二番で付いていく

稲川惠勇

ライバルを盾にするとは、面白い発想です。そして自分はゆっくり二番を行く。ライバルもおちおちしてられません。

幸せは妻の寝顔と朝飯と

山口光久

本当に幸せな方ですね。妻の化粧した顔なら、とにかく寝顔を見て心やすらぐなんて、うらやましい方です。やさしいお人柄がしのばれます。

念入りに残り少ない日を歩く

森下順子

これからは一日一日を大切に生きたいとは皆、思っています。そして、こころ豊かな余生を送りたいものです。

少年法加害者救うことばかり

足立由美子

この句は読んでいても辛い句です。

どんな事情があったにせよ、加害者より被害者を先ず第一に考えるのが当然です。

今後二度とこんな事がないようにといいつつまた、事件が起る。やるせなくなります。

ニュースです耳ふさぎたい事ばかり

武島ちよえ

毎日の暗いニュースには全くうんざりします。イラク戦争、フセイン政権、テロ事件、今日もニューヨークの大停電の大きな文字が、紙面を飾っています。

唯一、明るいのは阪神タイガースのニュース位でしょうか。

ここ一番私を飾るものが無い

貞岡佐紀子

ここ一番という時、女は精一杯おしゃれをしたいものです。でも歳を取ってくるとだんだん面倒になってきます。せいぜい身嗜みよく致しましょう。

■句集鑑賞

『慈母観音』

福士慕情著

波多野　五楽庵

〝川柳塔みちのく〟では発刊当初から会員の百句集刊行を事業の一つとして計画して来た。人間として生を受けて、一生の幾分の一かを川柳のために費やしてきた自分史として、百句集を残してあげたい、という私の願いでもあった。この『慈母観音』で十九巻を数え、地方の図書館をはじめ、国会図書館にまで置いていただいている。

慕情さんが川柳を始めたのは平成九年。この年は〝川柳塔みちのく〟十周年で、句会とねぶたを観る会を計画していた。

ライオンズクラブの会員であった慕情さんはライオンズクラブの機関誌『ザ・ライオン』の柳壇に興味を持ち、投句するようになる。

〝川柳塔みちのく〟に会員として参加したのは平成九年二月の句会からで、同人として創作句を発表したのもその頃の事。

母と子が二階と下で咳をする
母倒れ唯おろおろとおろおろと
何時かくる覚悟は脆く崩れ去り
この母が私を生んだ強い母

この平成九年は川柳作家〝福士慕情君〟の誕生した年でもあるが、お母さんが病気で倒れ、亡くなられた悲哀の年でもある。五句発表された五句とも、お母さんの病気を心配される川柳でもあった。

同年八月二日に開催された十周年句会の幹事として会の計画進行に協力してくださった。

思いやりのあふれる慕情さんの態度は、大阪から参加された本社同人皆さんの共感を呼ぶのである。彼の持っている思いやりと、いたわりの心は沢山の交流を作った。

その慕情さんに哀しい試練が待っていた。十月八日、お母さんの御逝去である。

神仏の裏切りに似た突然死
戒名の母の一字が涙ぐむ
母逝きて写経の筆が折れたまま

私の住宅へ行く途中に寺沢川が流れている。その橋のたもとに横に赤い線を引いた一枚の看板が立っている。それは昭和五十二年に氾濫し、川の水位がそこまであったという記録であった。私は朝夕、診療所までの往復をなにげなく歩いているが、慕情さんはその氾濫で弟さん一家が濁流にのまれるという惨事に遭っている川だ。お母さんの悲しみを句集は書き綴る。

母狂乱親に不幸の極みなり
逆縁の母の涙を止められず

幾人もの身内を彼岸に送っている慕情さんは盆になると香炉の灰を取り替え、玄関の前で迎え火を焚く。その後姿は限りなくやるせない。逆縁を経験している私にはそのやるせなさが身にしみるのである。

百句集の巻頭にある

来世にもこの母の子で生まれたい

の句は慕情さんの母を慕う心情が満ちている。後記に葬儀の挨拶が掲載されている。参列の人々に感謝を申し上げようとしたとたんに、慕情さんは挨拶の言葉を失ない、代読してもらった。母の川柳は百句、悲しみも百の句集である。

第4回 四万十川川柳 全国大会参加

四万十川の青い輝き

西内朋月

8月22日、大会選者で選評及び講演をされる橘高薫風名誉主幹を含め一行16名が、8時15分伊丹空港を飛び立ち、9時高知空港到着。

主催者の幡多信用金庫の方々の出迎えをうける。また誌友の桑名孝雄さんから丹精された早生蜜柑の差し入れをして頂く。

早速ガイド付きマイクロバスに乗り込み高知市内観光にスタートする。まず最初は日本三大鍾乳洞の一つ、国の天然記念物の竜河洞に入る。海中から隆起して以来一億七五〇〇万年の歳月をかけて自然が生み出した鍾乳洞とのこと。ひんやりした洞窟内には高さ11メートルの滝や、弥生時代の穴居跡などがあり外界の猛暑を忘れたひとときであった。

そのあと有名な土佐の尾長鶏を見物し昼食。続いて龍頭岬に太平洋を見据えて立っている坂本龍馬の銅像を見上げながら、桂浜へと向かうがあまりの暑さに帽子代わりに龍馬の名前いりの三度笠を買って被った。

桂浜は「月の名所は桂浜」と歌われている美しい浜であるが、あいにくの真夏のガンガン照りの真昼間であり、名物の五色の小石を拾う気にもなれずマイクロバスに戻った。

宿泊地の四万十川の河口に開けた小京都といわれる中村市へ約4時間、ベテランらしいガイドさんの話によると、応仁の乱を避けて中村へ来た公家の一条教房は京風の町作りを推進し、東山や大文字山と名付けた山もあるそうだ。その他当地の故事来歴などを聞いたり、ガイドさん推奨のお菓子屋さんで羊羹を買ったりしながら、賑やかに新ロイヤルホテル四万十に到着。チェックイン後、引き続きマイクロバスで懇親宴の会場の料亭「朝比奈」へ行く直前、料亭の三軒隣の火事騒ぎがあったが大事にもならず、無事に地元の伊野帆傘川柳社と中村若鮎川柳会の方々を交えて宴会が始まった。地元の人の民謡や踊りの披露があり楽しい懇親のひとときを過ごした。

上　龍馬像の前で

下　桂　浜

ホテルに戻りラウンジで全員が珈琲、紅茶を薫風先生にご馳走になり、お開きとなった。

翌23日、日本最後の清流といわれる四万十川の川下りの屋形船に乗り込み、緑深い山間を流れる川の静かな景観や、珍しい沈下橋の風情を楽しみ、川柳大会の会場に向かった。

はるばる来にし……

志田千代

紀貫之が「男もすなる」と土佐日記をものにした頃ほどではないにしても、やはり四万十川は、はるばるであった。大会の案内に、主催・幡多信用金庫とある。川柳と金融機関の取合わせは何だろう。妙に気になった。

昔、遠流の地であり、また小京都を自負される土佐中村市も一時は木炭景気にわき賑わったとか。時が流れ人々が去り、自然だけが取り残され、いま悠久の時を刻む四万十川…。

この自然を守り伝えよう。それも文芸の力でと信用金庫の肝煎りで、短歌、俳句、更に川柳の全国大会を続けていることを、熱く胸を張って理事長さんは語られた。

講評中の薫風名誉主幹

六月の事前投句の表彰式と席題だけで私達大阪のオバチャン組はリラックスムード。当日席題は「台風」で、全員、作句に励む。

選者の橘高薫風先生のお話は「川柳が一番充実した六大家の時代と六人の個性豊かな句の解説、最後に川柳上達の近道はリズム感を養うこと。それには百人一首を声に出して読んでもらいたい」としめくくられた。

次に入選句から先生の選評を抜粋して紹介。

大会賞

源流の一滴土佐を青くする　木下草風

路郎の形をつぐ大きく背筋の伸びた格調の高い句。源流の小さい一滴が青々とした土佐にしたという。大会賞として恥じない句、自信をもって選びました。

中村市観光協会賞

四万十の河童はきっとみな長寿　西出楓楽

長寿の河童は沈下橋あたりで遊んでいるにちがいない。大阪のガサツの水と比べての社会批判の句でもある。

国際ソロプチミスト幡多賞

川の果てなる父のこと母のこと　三宅保州

川には人生を感じる。亡き父であれ、年老いた父であろうと…。共鳴できました。

秀作賞

ロープウエイの中から拝む磨崖仏　大川桃花

仏様は下から拝むものであるのに…かすかに景色も見え、磨崖仏をもってきたのが良い。

このように選者自身が選をした意図を皆の前で披露して下さることは、参加者の納得も得られとても良い企画だったと思う。

帰りを急いた大阪組は、席題の披講が聞けず入選句のプリントをもらい中座することになり、ご迷惑をおかけしたようだ。それでも楽しくはるばるの四万十川への旅であった。

四万十川 沈下橋を背景に

本社　九月句会

九月八日（月）午後五時半
アウィーナ大阪

残暑厳しくむし暑い中での九月句会は、百十九名の参加を得て、定刻開催された。

お話は西村哲夫さん。現役の僧侶である。テーマは個性。同じ親から生れた兄弟でも個性は異なる。生誕時の親の年齢、その後の環境で個性は変化するという。

仏教では蓮の花は仏様の蓮台であり大切な花である。蓮は泥田に白い花を咲かせ、必ず実をつける。これは泥田のような現実社会で、人が花を咲かせ真実の実をつけることを意味する。仏教の発祥の地の印度では蓮は四つの色があり色ごとに蓮の名前が違う。一つ一つの色が仏教の教えの一人一人に合わせて届くようにとの意であろう、と結んだ。

初出席に岸和田市の中島寿海さん、大阪府の神野千恵子さん二名を迎える。（義　記）

月間賞は井丸昌紀さん（大阪市）に輝く。

（司会―玄也）（記名―恵子・真理子）
（受付―瑠美子・伽羅）（清記―扶美代）

席題「本」　出口セツ子選

携帯で夏目漱石斜め読み　桃花
寝た切りへ読み聞かせの本山となる　ルイ子
維新史を漁る老父の読書好き　久峰
立ち読みで知恵を仕入れているピエロ　柳弘
赤ちゃんとママをつないでいる絵本　朝子
プライドへごつんごつんと触れる本　雅文
こころ太らす本を少女に読み聞かす　たもつ
家の孫カボチャに魔法かけている　舞夢
凛とした書架にひっそりある秘本（ひこうばん）　恭昌
紙魚もまたお値打ちとなる稀覯本　茜
読みあさる手引書森を抜けられぬ　恵子
恋をするたびに詩集を買ってくる　朱夏
発信器つけて大事な本を貸す　天笑
パールバックに大地の叫び声を聞く　森子
夜のしじま林真理子の域にいる　いわゑ
マンガ本読みつつ昼寝する至福　房子
本棚で眠ったままの青春賦　直樹
読む本と覚える本にある段差　正雄
本棚は私の履歴書だと思う　寿美子
青木雄二のマンガに社長教えられ　洋
押し花の役に立ってる広辞苑　かすみ
教科書が歴史の闇を炙り出す　冨美子
本棚のみだれは妻の反抗期　冬葉
教科書に載ってないから知りません　弘風
柩には本いっぱいにしてあげる　(志)千代
一冊の本が私を変えていく　ひさ乃
大臣をひとり殺した暴露本　泰子
大正のロマンに出遇う古書の街　倫子
聖書一冊命の重さ知る夜更け　みつ子
広く浅く乱読主義の知恵袋　泰子
秋風が立ち読みしてる古本屋　千里
六法をいつでも読んでいる詐欺師　保州
佳
かなしみを丸ごと洗う本に会う　みつ子
明日ありと自叙伝を書く古稀の年　日出子
ほんやくの本よみふける青テント　久峰
時々は気合いを貰う師の句集　俶子
十六夜の月を枕に読むハイネ　柳弘
人
亡父の声ほしくて古い辞書を繰る　一風
地
本を読みすぎて迷路が深くなる　楓楽
天
自分史の落丁誤字は咎めまい　楓楽
軸
人生と宇宙広がる本開く

兼題「曲がる」　川上　大輪選

父の愛曲った僕を二度もぶつ　照子
曲がったら戻って来ない福の神　かすみ
曲がり損ねて戻ってこないブーメラン　洋
靴ベラの曲がり具合が温かい　昭
プライドをひとつ落して曲り出す　(矢)五月
臍曲がり満場一致にはさせぬ　尚士
曲りたい方へ曲って独り旅　泰子
曲ってみたい北山杉の一本気　俶子

直球が曲がって見えた色めがね　房子
亡き人に逢える気がする曲がり角　みつ子
曲げられて浅い眠りが続いてる　恵子
生き上手一寸曲った事をする　東雲
居酒屋へ形状記憶のよう曲る　つづや
生きるためと曲がるたんびに言うている　美籠
角曲げてから運勢がもつれ出す　美花
好きな人住む方向に曲がる靴　月子
よく曲る体ですなとほめてくれ　能子
曲がらねばそこから何も始まらぬ　菜月
一直線好きな夫はへそ曲り　楓楽
たそがれの辻を曲がると誰も居ず　武庫坊
神様が呼んでいるので曲ります　保州
矢印が天に向かって曲がっている　義
フランスパン曲がったことは嫌いです　度
花屋を曲がると別れ言葉がすぐ言える　寿美
プライドが邪魔して角が曲がれない　かりん
直角に曲がる夫とくい違う　直樹
糠床に紆余曲折を封じ込め　桃花
真っ直ぐに生きてきたのに腰曲がる　朱夏
主義主張曲げて気楽なイエスマン　朝子
曲がること知らぬ額の傷だらけ　柳弘
沈思黙考自分探しの七曲り　利昭
へそ曲がり自分のへそをそっと見る　冨美子
佳
横町を曲がると風は秋のいろ　重人
曲がるのが厭で貧乏しています　扶美代
訃報聞くたびに曲ってくる背中　冬葉
耳掻きが微妙に曲がるここち良さ　寿子
曲がりくねっていても私は無農薬　たもつ
人
曲がりくねった路地に私の椅子がある　美代子
地
尾行するわたしに都合よいカーブ　柳伸
天
直角に曲がる自信のある歩幅　満津子
軸
にこにこと私を誘う変化球　照子

兼題「魔女」　山本三郎選

飲み過ぎへ妻は時々魔女になる　螢
酔いしれて魔女に裸でほり出され　修
大学院に卒業しない魔女がいる　希久子
魔女ばかりいるから句会おもしろい　文
魔女三人寄って男を喰う話　とし子
朝帰りごまかし利かぬ魔女の前　光久
魔女からの便りにあった請求書　舞夢
末席の魔女があれこれ喧しい　冨美子
今日は魔女明日は淑女と七変化　かすみ
魔女と住み働き蜂に変えられる　孝一
南米の魔女に大金吸い取られ　楓楽
面白い魔女の毒なら飲んでやろ　久峰
渋滞へ魔女の箒が欲しくなる　いつふみ
金メダル賭けてしごきに耐える魔女　千恵子
何時までも貴女を思う魔女でいる　ルイ子
東洋の魔女も還暦丸くなり　かりん
魔女になり地獄極楽見てみたい　潤子
婆ちゃんの魔女も混じって踊りの輪　俶子
肥満体ですけど魔女になれますか　倫子
魔女になり夫手玉に取った夢　章久
北朝鮮の魔女か天女か美女軍団　千代
たぶらかす魔女が待ってる北新地　たず子
カミさんは午前零時に魔女となる　志
しばらくぶりで会えば魔女にもある白髪　義
その中に大阪弁の魔女もいる　求芽
子を産むと魔女も普通の母になる　いつふみ
時折に魔女かと思う妻の勘　つづや
魔女だとは知らず飲ませたのは媚薬　希久子
菩薩にも魔女にもなれず米をとぐ　武庫坊
よく見れば魔女に大きい泣きぼくろ　月子
陽が落ちてゆっくり魔女は化身する　大輪
本心を言えば男は魔女が好き　佳
わがままな昨日の棘を抜いて魔女　森子
ひと皮をむけば女はみんな魔女　天笑
魔女も杖振って応援タイガース　保州
魔女だから夫なくても子が出来る　弘一
豊満な魔女で呪いを忘れてる　朋月
人
恋の句を作る傘寿は魔女かしら　耕治
地
呪文いくつ魔女にもなれず米を研ぐ　みつ子
天
悪女にも魔女にもなれず菜を刻む　楓楽
軸
出合い系サイトに魔女の甘い声

兼題「ゆうゆう」　春城武庫坊選

しんがりでゆうゆう完走した笑顔　満津子
ゆうゆうと飯を食っている二浪　シマ子
国訛もってゆうゆう嫁にいく　睦子
忙中閑妻はグルメの店にいる　美代子
夫の留守ゆうゆう過すはずだった　いわゑ
悠悠閑閑不器用なりの日々があり　(矢)五月
盗み食いゆうゆう猫の肥満体　とし子
悠々と街へ出ようよ車椅子　(矢)五月
血圧が二〇〇あっても慌てない　泰子
悠悠自適遠い世界になりました　弘一
呆ける時きたら呆けましょゆうゆうと　真理子
地雷なくしゆうゆう暮らす日はいつか　一歩
ゆうゆうと童話に浸っている余生　哲男
ゆうゆうの顔で議員の仮出所　いつふみ
ノルマなしゆうゆうくらすホームレス　昭子
ゆうゆうと甘い汗吸う大企業　深雪
ゆうゆうと挑戦してる余命表　〆女
荒城の月ゆうゆう歌う青テント　哲男
ゆうゆうと勝組の気で虎ファン　節子
ゆうゆうとした顔で居る空財布　章久
思い出を拾いゆっくり追う夕陽　たず子
写経する心ゆうゆうとはいかず　瑠美子
美術館に朝入ったまま出てこない　度
北の船ゆうゆう入る忘れ物　昭三
ゆうゆうと暮らせないのが日本です　三喜夫
子等に棹渡した舟で世を渡る　文
ゆうゆうとしているようで恐妻家　俶子

ゆうゆう自適感謝忘れず八十路ふむ　一風
ゆうゆうと生きるつもりの古時計　ひさ乃
ゆうゆうと考え込んでいるロダン　洋
ストライクツーまで球を見ています　天笑
低金利ゆうゆう自適の夢も消え　いつふみ
佳
見栄を連れブランド品が闊歩する　雅文
ゆうゆうと明治生れのたくましさ　義
ゆうゆうと媚びたりしない赤いバラ　美籠
ゆうゆうとしている方が影武者だ　大輪
ゆうゆうと生きてぽっくり逝けたらな　直樹
人
ゆうゆう自適してるとボケがしのび寄る　楓楽
地
空想は無限ゆうゆう雲を追う　典子
天
人間が好きでゆうゆう石を積む　潤子
軸
傘寿ゆうゆう流れる風に逆らわず

兼題「あ　う」　阿萬　萬的選

出合う時いつも笑顔があたたかい　あやめ
また時計見る忙しそうな人と会う　満津子
会うたびに会釈律義な蟻がいる　ダン吉
旧友と病院で会い飲む話　朋月
合う合わんどうせこの世はひとりぼち　求芽
合う合わぬご近所すでに派閥あり　哲夫
先生が絵日記で会う児の家族　(矢)五月
虎ファンと言えば即座に打ちとける　楓楽

偶然の再会名前出て来ない　〆女
逢うて来た余韻が顔に描いてある　鹿太
腰曲がる母があう度小さく見え　三郎
趣味趣向合わぬ夫婦で仲がよい　弘風
息の合う人のとなりでほっとする　千恵子
Xデーグリコの下であうプラン　柳伸
フルートから愛の賛歌に出合う夜　孝一
会うたびにびっくりさせる伸びざかり　修
病室の友情傷を見せ合って　保州
鬼仏背中あわせに棲む心　朝子
吉引いた日の帰り道スリに遇い　玄也
身にあった生き方で来た凡夫婦　典子
リースの服身体にあうが落着かぬ　シマ子
両の手を合わすと温い血が通う　睦子
口裏を合わせ冷汗かいている　かりん
目が合って呑み友だちと途中下車　たもつ
痛いめに遭っても手くせなおらない　修
口悪いあいつと何故か馬があう　(奥)五月
うまが合う友とトイレで話しこむ　深雪
ペンフレンド逢えないままがいいのかも　度
逢う前の日には必ず髪洗う　利昭
えらい目におうたと帰る俄雨　倫子
目が合っただけで夫婦という呼吸　大輪
元かれにばったり出あう御堂筋　いわゑ
佳
頑固さは負けぬが二人ウマがあい　いつふみ
職安で会いパチンコであう背広　正雄
また逢うたとっても暇な人らしい　とし子
歯医者でも眼医者でもあう顔馴染　桃花

朝市で逢った女が好きになる　奮　水
人
補聴器の父と話が噛み合わず　桃　花
地
今うわさしてたと笑顔で迎えられ　〆　女
天
あの頃の潮風にあうフルムーン　かすみ
軸
逢うて見てあっさり解けたわだかまり

兼題「売る」　河内　天笑選

投売りという算盤は合うてます　あやめ
土付けて産地直送看板に　高　栄
名が売れて売りそこのうた適齢期　満津子
ウインドウ高嶺の花が売られてる　舞　夢
ナスキュウリ訛りをつけたまま売られ　扶美代
病人がいるのにお墓売りにくる　泰　子
自販機が毎度おおきに礼を言う　利　昭
売りものは美女軍団と脅しだけ　弘　風
馬鹿になることを覚えて馬鹿を売る　千　里
血を売って生計立てたことがある　保　州
買い出しも売り食いもした老母の背　千枝子
テポドンと麻薬のほかに喧嘩売る　修
ラベルはぐ元の売値が見たくなり　瑠美子
不況風老舗丸ごと売り出され　伽　羅
景色売る上層階は高くなる　度
雰囲気を売りものにしてよくはやり　希久子
田舎町駄菓子売ってる低い屋根　〆　女
閉店のいつまでつづく売りつくし　菜　月
折り込みが黄泉の団地を売りに来る　昭
売り言葉吐いてさみしい僕になる　ダン吉
売るものがまだあるうちは生きられる　森　子
売れないでほしい空地の月見草　恵　子
男やもめコンビニに顔売れている　恭　昌
売り言葉かわしプライド守りきる　(志)千　代
良心を売って世間に背を向ける　寿　美
人畜に無害ですよと自分売る　東　吉
昔々足袋の片方売ってくれ　哲　夫
怪しげな日本語で売る偽ヴィトン　章　久
売り上げのノルマと歩く重い靴　冨美子
玉の輿ずうと夢見て売れ残る　睦　子
成人式しっかり名前売っている　ルイ子
飴もらい自分を売ったことがある　正　坊
佳
トラマーク在庫一掃するつもり　重　人
顔売りに一升びんを提げて来る　奮　水
百面相つけて私を売り歩く　みつ子
赤いシャツばかりで通し顔を売る　伽　羅
売切れと貼ってあるのが欲しくなる　扶美代
人
古本にうまい値段がつけてある　真理子
地
百均の売り子百円だけ笑顔　耕　治
天

いなされて宙に浮いてる売り言葉　井丸昌紀
軸
五割引で妻に売りとばされそうだ

第23回川柳塔鹿野みか月川柳大会

日　時　12月7日（日）　9時開場
場　所　鹿野町営国民宿舎「山紫苑」
鳥取県鹿野町今市972—1
☎0857—84—2211
お　話　「大衆と歩む川柳」　斎藤大雄氏
第1部（当日出席者のみ）未発表作品に限る
課題と選者「月」橘高薫風・「民」森中惠美子・「骨」濱野奇堂・「根」前川千津子・「空っぽ」おかの蓉子・「駅」川本畔・「まさか」政岡日枝子
各題2句　出句締切11時半　席題なし
会　費　二千円（昼食・記念品・発表誌）
町長杯他7位まで出席者優先表彰
第2部（事前投句の部—出席者も欠席者も参加）
課題と選者「輪」河内天笑・「欲」梶原サナヱ・「面」高田羅奈・「雑詠」土橋　螢
応募締切　10月31日（消印有効）
参加費　千円（発表誌・各題秀吟賞呈）
参加方法　各題2句内（雑詠は1句）B5〈用紙に連記、住所・氏名・雅号、大会への出欠・宿泊、懇親宴出欠等を明記、参加費（郵便小為替）同封の上事務局へ送付ください。
投句先〒689-0405鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279
中原諷人方川柳塔鹿野みか月事務局宛
前夜祭　12月6日（土）18時半より
会場「山紫苑」宿泊費1万3千円（懇親宴費共）
申込締切11月10日　主催川柳塔鹿野みか月

エッセー

市電と川柳

―大阪市交通局創業一〇〇周年に寄せて

大阪市交通局川柳部
中原　比呂志

わが国最初の市営交通機関として花園町＝築港間をチンチン電車が走ってから今年で一〇〇年を迎えた。

開業当日の業務日誌には「明治36年9月12日　土曜　天候曇　午後七時ヨリ雷鳴　暴風雨　本日開業　午前八時ヨリ午後七時迄往復トモ各車満載……午後七時　雷鳴ノタメ　サーキット・ブレーカー切レ　二・三ノ信号燈ニ損傷ヲ生ゼリ……」とある。昨夜来の雨は朝方にはやんだが、夕方からの天候は大荒れで、九条町の縄打場の檜の大丸太二本に落雷。引き裂かれるという荒れよう。この落雷で電車は立ち往生するという容易ならぬスタートであったらしい。

さて、大阪市電その後の発展は、記念誌や催し物で見ていただくとして、麻生路郎・岸本水府と市電川柳部との関係に若干ふれてみたい。

西区九条に文学好き、旅行好きの青年達が集まり、川柳会「川柳以交會」と呼称して、会報誌『みをつくし』を大正10年5月に創刊した。中心人物の一人として吉川唖人（市電従業員）がいて自宅を発行所としていた。会員数23名。客員5名。当時としては立派な会であったようだ。この以交會には路郎、水府も選者として参加しており、水府の見事な筆が『みをつくし』の表紙題字を飾っている。なお、現在、交通局川柳部の『川柳大阪』紙面の「みをつくし」欄は、あえて旧字の「を」のままを用い、その伝統を後輩に引き継いでいるのである。

やがて大正13年、麻生路郎は『川柳雑誌』を発刊することとなるが、それまでの各柳会誌では定期月刊発行がなされていなかったので波紋は大きかった。この路郎を支えたのが、市電従業員の溢れんばかりの情熱であったのは間違いない。

『川柳雑誌』創刊号・編集室欄には「…川柳以交吟社の同人の方々が、日に月に『みをつくし』が旺盛になり多数の会員を有する結社になったので、創刊当時から同紙の顧問であった私（路郎）に主幹になって雑誌を大きくしてくれぬかと交渉があった…」と述べられており、創刊号は路郎が編集するが、次号からは新進気鋭の竹田芦穂（市電従業員）が編集をすることになった。

『川柳雑誌』発足時には10支部が結成され、大阪7支部のうち、第一支部・橋本二柳子、第二支部・森田輝翠、第四支部・関本雅幽が担当し、本社の編集・唖人、芦穂、会計・二柳子など、いずれもが二〇～三〇歳台の市電従業員で『川柳雑誌』の中核を占め、勤務の傍ら発行に尽力している。橋本二柳子などは自費で宣伝ビラ5万枚をつくり市内に散布するなど、情熱を傾けたのである。句会も各家でおこなう一方、たびたび市電築港託児所を借りて開催している。

昭和14年以降、市電の職場では、鶴町運輸、四つ橋支部（業務部）天王寺運輸で句会がおこなわれていたが、昭和16年、三支部を統合して市電川柳会と改称することになった。会報誌名は『市電川柳』。昭和18年の暮れ、戦局はますます急を告げ『川柳雑誌』は終刊に追いやられることになる。だが橋本緑雨（二柳子）らは、本局で少人数ながらも『市電川柳』をつづけた。

戦後、いち早く復活したのも交通局川柳部であった。『市電川柳』は『川柳大阪』として再開する。命名は路郎。題字の落款は、路郎の信頼厚い緑雨に手渡され、押印されたのである。

（文中敬称略）

柳壇

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

岸和田川柳会　長谷川呂万報

一人だけ遅れて笑う鈍い人　寿海
僕の脳叩くと鈍い音がする　みよ子
神だのみ一円硬貨の鈍い音　野添
濡れるのは覚悟で乗った川下り　錬太
濡れるほど緑が映える故郷の山　洋
半纏も汗で濡れてる試験曳き　盛之
濡れ衣が晴れても心晴れません　房枝
この歳でやはり濡れ場にゴクリ唾　笑司
ちょっかいが過ぎて濡れ衣着せられる　基
仲よくと隣の墓も濡らしとく　路子
青テント濡れて紫陽花だけ光る　ダン吉
ゼロ一つ値段間違え戸惑った　珠子
婚約の指輪の値段母が踏み　照女
家事の値段計算したい疲れた日　弘子
無理だった超安値段のハンバーガー　東吉
時価にぎり先に値段をきく勇気　穣一
お浄土へ行くにも値段上中下　みつ江
大阪のオバハンとことん値切らはり　柳宏子
雷を呑んで描いた虹の橋　仁緑
物怖じをしない若さが天下呑む　蛙城
泥棒は逃げ道計る路地の裏　東雲
計っても計り切れない父母の恩　ゆり子
はかり事下手な細工で笑い者　あい子
熱計る母のおでこは体温計　英雄
すき腹にウエスト計り嬉しがる　ゆい
酒煙草控えて計る血糖値　守
着々とへそくり貯めて計る旅　けい子
ライバルにはかられて知る苦い味　呂万
計量のスプーンで出せぬ母の味　さよ子

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

敬遠は恥だと思う大リーグ　半蔵門
敬遠になれてひとりの茶漬け食う　スミ子
敬遠をされる歳やと知る傘寿　柳宏子
縄のれんくぐればそこはタイガース　秀夫
通天閣が二つに見えるほど飲むな　石舟
無条件飲んだ弱気を責められる　砂輝守
それぞれの財布知ってる飲み仲間　五月
地下街の出口で傘がよく売れる　宏章
デパ地下のホテルの味がのる夕餉　庸佑
地下街に花屋は四季のメッセージ　求芽
地下街は不眠無口で人を恋う　孝一
地下街は何れシェルターかも知れぬ　無禄
地下街に季節の雨は匂わない　比ろ志
利休下駄からから祇園の石畳　礫
風車からから水子地蔵の花枯れて　あやめ
からからと下駄が嬉しい法善寺　晴美
人情も枯れてからから都市砂漠　武史
ハローワーク出てからからの道を行く　萬的
蝉しぐれよく聞きとれぬプロポーズ　宵草
鳴き続け蝉は反戦訴える　典子
かなかなの声に亡母が蘇る　高栄
蝉が翔つ一期一会の殻残し　初恵
八月が巡ると蝉が泣きじゃくる　諷云児
蝉しぐれ義理のひとつをせかされる　活恵
金の成る木枯らしてから運がない　照子
逢いびきの蛍は群れに遠くいる　泰雄
告白を聞く公園は蝉しぐれ　〆女
停止線ここで理性をとりもどす　重人
成り行きに任せてみるか石を蹴る　澄子
公約が薄化粧したマニフェスト　尚士

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

隅っこでチャンス狙っているひとり　ちよえ
隅っこがなくて地球に陽があたる　はるみ
人生の決算という儚い日　かつ子
一隅を照らしてくれる阿弥陀様　聖子
盃にぽとり涙のわけがある　恵美子
残り火が別れの盃焼き落し　好栄
川柳の恩師の延命祈る月　民子
変化球盃それも受けとめる　博利
決算と睨みあってる黒い影　清泉
少年の日はかえりこず草いきれ　白汀

東大阪市川柳同好会　森下愛論報

失うてからの小石がよく光る　朝子
有頂天あれから僕を見失う　ダン吉

イントロの長さに愛を見失う　柳弘
スキャンダル妻の笑顔が戻らない　東雲
天国も地獄も越えたスキャンダル　弥生
暴露して得する女困る男　賢子
人生に負けて仏の手に還る　章久
阪神が負けると父が喋らない　太郎
舌戦に花持たされて負けと知る　幹生
負けられぬカルテ一枚裏返す　雅文
子に負けた日から埴輪が笑わない　度
負け犬にだけはなりたくない背筋　とみを
シルクレイン雅にけむる苔の寺　良子
にんにくが好きで女に嫌われる　シマ子
何もかも許す気でいる好きな人　美弥子
旅の宿で雨を見つめていた孤独　萬的
想い出がゆっくり解ける島の雨　湖風
裏切りの背中を溶かす黒い雨　愛論

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

病床の母に体温計の嘘　吟笑
お茶でもと言われて話長くなり　治延
冷飯も食うて男の貌になる　あきら
こだわりを捨てれば丸い輪が画ける　ひかり
妻の手にイミテーションが丁度合い　賢
妻の夏あれだけ動きやせもせず　勝
ふる里の駅で素顔に戻る嫁　いさむ
イエスマンばかりで会議すぐ終る　かおり
自由とは紙一枚の軽さかな　初恵
梅雨明けを待ってましたと騒ぐ蝉　放任
夫婦仲苦手に慣れて共白髪　輝夫
真青な八月の空敗戦忌　八重子

川柳塔みぞぐち　小西　雄々報

山盛りのご飯が旨い野良の昼　久子
感謝してご飯いただく戦中派　鈴枝
仏にも喜び分かつお赤飯　智恵子
赤米を食べいにしえに想い馳せ　和代
農家です何は無くても米の飯　豊枝
ご飯どき電話のベルに腰重い　公美枝
タイマーへ炊飯たのみ参観日　弘子
大釜で炊いたご飯で味がよい　静江
歳ごとに明日も生き抜く飯を食う　正光
仏飯を供えた後に膳囲む　雄々

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

発車ベル白いハンカチ振り続け　千恵
健康に老いを忘れてひと泳ぎ　節子
亡き母の口ぐせ極楽の余り風　しづ子
次の世も会えるものなら極楽で　幸子
傘寿祝い曽孫も揃い極楽です　正子
皿洗いせせらぎと聞く流し台　寛之
信号の長さも楽し立ち話　東園
水無月の地球に青き雨の音　半蔵門
ストレスが屋台で総理を呼び捨てる　昭三
秋が来る秋の絵を描き老いてゆく　武庫坊
一年を括る一字はきっと虎　勝巳
読み切りの一篇として生きていく　久子
人恋いの風棲む部屋は広すぎる　里江
老斑を見せ合うているおない年　年代
生きる欲衰えつつも半夏生　薫
あきないをおろそかにして西鶴忌　光穂
てのひらで豆腐を切っている絆　芳子

竹原川柳会　時広　一路報

僕の席にときどき亡父が来て座る　蘭幸
無料ですテレビ桟敷の指定席　敬子
高座から愉快な吹き矢飛んでくる　正宏
ひびきあう若い仲間の座に解ける　栄恵
終電車お隣さんも舟を漕ぎ　節夫
起死回生まだ信じてる座りだこ　菁居
正座して新茶の香る四畳半　民恵
叱られる子が真っ正面にきて座る　静風
ひ弱なのが一尾残った金魚鉢　房子
金魚すくい孫の笑顔を連れて来た　幸子

佳句地十選（9月号から）

山口　美穂

赤い傘買った私のための雨　ヨシ枝
手を合わす母によく似た野の仏　舞夢
ユーモアが少し足りない肩のこり　つや子
うっかりしてましたと重宝な口　千歩
笑ってるうちに楽しくなってくる　義
つまづかぬように語尾だけ濁しとく　禄骨
神様を信じられない日の涙　(安)泰子
文章も文字も自己流だが温い　てる
糸電話辿ればみんな母の胸　怜
歯ぐき出し笑える人と今は居る　章子

日々好日金魚もいっしょに弾んでる　汎美
夢ゆらり金魚もゆらり恋をする　淑子
好きな色園児が書いた金魚です　規代
雑草の伸びる早さに負けられぬ　孝枝
窓いっぱいに風鈴の涼しさよ　笑子
向日葵も私も笑顔夏が来た　史子
離れていても心と心ひとつだよ　千枝
杖の要る夫を普通と受け止める　慶子
賞味期限書き替えながら生きてます　万年
友の杖僕が使えるありがたや　夏喜
白い杖見えぬものが視えて来た　輝恵
百歳へひょいと魔法の杖で飛ぶ　半覚
マドンナのイメージ杖は杖でよし　不朽
七十五心に杖は立てている　一力
塞翁が馬杖にして今の椅子　一路

川柳塔打吹　大森　孝恵報

八十路でも乾きたくなく紅を引く　セツ子
へちま水乾いた肌に吸いこませ　たけ代
一滴の目薬癒す目の乾き　和子
墨汁の字が乾くのを待って貼る　博丈
涙目が乾かぬうちに爪を染め　三津子
脳味噌が乾かぬようにテレビ見る　重忠
ずぶ濡れの恋納屋裏に乾してある　季芳
危ないめさせて強い子元気な子　紀美恵
向う脛したたか打って火花散る　玲子
恋風に乗って危ない橋渡る　美知江
我を通す男へ二の矢とんできた　雄々
距離感がうすれ危ない古稀の坂　善江
古稀を過ぎてくてく歩く夫婦坂　芙美子
てくてくと渡ってみたい虹の橋　公恵
残り福みんな拾ってててくてくと　石花菜
てくてくとでこぼこ道も夢がある　龍枝
てくてくと動ける親に手は貸さぬ　幸子
長い方がいいな二人で歩く道　芳光
真実を探してくてく浄土まで　螢
紫の火花を抱いて彼を待つ　克枝
衣装くらべ火花散らして競い合う　友楽
盤上の静かな攻めに火花散る　京子
正直に生きても火花降りかかる　順子
ブレーキの効かぬお方と一つ屋根　節子
休肝日あるのないのと口喧嘩　禎元
火花見てよろこんでいるへそ曲り　勝見
火花散る予感狸寝入りする　照彦
思春期は危ないけれど虹も立つ　しろう
満たされぬ心の乾き十二歳　泰山
危ないと駆け寄る方が躓いた　孝恵

川柳大阪　高木　信酔報

物騒で子を持つ親の悩み増え　きよし
所帯持ち一人前と認められ　兵庫
改革は老後に辛い事だらけ　ひろゑ
子育ての仕草一つに神を見る　本蔭棒
正座あり居眠りもあり法話聞く　楽子
鉛筆の芯には嘘はおまへんな　宏
叱られても魅力が強い母の膝　章久
あの妻が嫁の言う事聞いている　利昭
古漬けに亡母の想いをかみしめる　喜楽
ポケットに男の見栄も持って出る　笑風
もうおまへん母さんポッケ裏返す　ダン吉
いいくじを引いたと思う嫁と住む　春蘭
第何条暗記鋭く突く検事　一風
どこを切ってもいちびる千歳飴　元紀
大阪の平和の人文字胸を打つ　敏
日本晴れ富士が爆発するらしい　比呂志
新緑が雨に打たれて光る朝　美花
大空の広さに溶ける無の心　柳弘
今日の無事夕焼空に感謝する　鉄心
進歩したあとおまへんと朱が入る　一歩
持ってます頭の知恵と和の心　功
男前言われてみたい死ぬまでに　叭笑
持ち上げて落とし場所なく誉め殺し　青道
バラを持つ両手にトゲがかくれてる　洛酔
嫁の肩持ってまあるく生きる知恵　重人
嫁ぐ朝父が朝から見当たらぬ　かよこ
よく持った母さんどうも有難う　司
嫁姑人の前では機嫌よし　照月
持ち駒のひとつが僕を悩ませる　まつお
肩書きをはずせば温い風に会う　信酔

川柳塔唐津　久保　正剣報

盃に浮かべた月も酔っている　兵八郎
認められ自然に力入れている　實
父に矢を向けて敷居が高くなり　輝夫
再会の友思い出はエンドレス　晴翠
病院の順番取りと五時に起き　高明
近くなるいい人でしたと言われる日　勝視

出荷する方をカラスは知っている　水笑
梅雨はあけたが僕の扉はまだ開かぬ　虹汀
制服を脱いだ素顔も正義感　四郎
ヘルパーに押されて初夏の陽を浴びる　正剣

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

生臭い話になると目が冴える　三男
一夏の生命だ蝉よ鳴きなさい　紀久子
生臭いドラマを消してからひとり　裕美
一つ穴のムジナに分からない匂い　順子
一周忌まだ生臭い茄子の馬　保州
ルーツ探ると風は一気に生臭し　輝子
絵手紙に書いた一行生臭い　稚代
六ヶ国首が揃うて生臭い　英子
犯罪かも知れぬ少し生臭い　三喜夫
生臭い話聞いてる上の空　怜
これも愛うるさいほどに世話を焼く　利治
うるさいが姑もいなけりゃ張りが無い　よしこ
口うるさい母の躾に感謝の日　美子
溜息へ時計の音が胸を衝く　寿子
おはようの笑顔に心透き通る　優子
爽やかな気持で家裁右左　さち子
颯爽と歩けば悩みなど消える　大輪
鬱消えて朝のめざめの爽やかさ　冨美子
爽やかな朝だ走れと足が言う　和重
世界新爽やかだったインタビュー　正博
爽やかな仕草そろいの夏衣装　豊太
人生のレシピだんだん辛さ増す　和子
生き方のレシピは簡素なのがいい　あき子
レシピだと言うから鰯おちつかず　鉄治
マンションのレシピパスタがよく似合う　克子
手抜きする今日のレンジを知るレンジ　智三
レシピなどないが主婦歴五十年　和代
おふくろのレシピに愛の匙加減　和香
藪医者のレシピ気になるこな薬　佐一
日曜日パパのレシピが子等に受け　和

川柳ふうもん吟社　杉本　孝男報

サバイバルの対角線に敵が待つ　洋々
サバイバルやっぱり金が物を言う　圭一郎
短足も和服姿はあでやかだ　孝明
切なくて合わぬ話に槌を打つ　大鯰
サバイバル時には無駄な汗もかく　志げ緒
クラス会渡った橋が皆違う　裕花
頂点の椅子を目指してサバイバル　(山)節子
他人めくケンカをしても夫婦です　(澤)裕子
サバイバルゲームに子供押し出せぬ　春名
晩年へ刻が短くなる想い　信子
他人めく妻の言動気にかかる　金祥
短いと思う大事な人と居る　無限
兄弟で金の貸借他人めく　宗明
幸せは短く過ぎて苦はながい　千代子
他人めく心を溶かす花見酒　のり代
臍くりの嵩から他人めいて行く　螢
逆らったその一言が他人めく　良子
選挙戦今日の席取り最後かも　はつ江
羽根ないがペン一本で翔んでやる　一瑶
ライバルの噂ばなしに耳を立て　益子
夏祭り燃える女を演じ切る　あけみ
短いが父の一言効いてくる　一京
旧名は欲しい合併サバイバル　昌鼓
サバイバルゲームに勝った再生紙　雅女
パワー全開子等は弾けて夏休み　夢路
いつのまに隙間風吹き他人めく　朋恵
なにごともなかった日には感謝する　一粋
恋心短歌に寄せてうちあける　茂登子
正論を振りかざす子が他人めく　毅
倒さねば殺されそうだサバイバル　孝男

長柳会　加島　由一報

香水の扇子男を惑わせる　淳司
夏祭り浴衣美人になる親子　たけし
部下からの意見飲み込む腹の虫　武男
ベディキュアの下駄で浴衣もはずんでる　史
浴衣でデートあとの予定は涼風まかせ　敬二
大ジョッキ夏の味覚に満ち溢れ　輝子
夕焼けに溶ける浴衣の肩車　和代
酔うことも出来ぬ幹事のウーロン茶　良男
無礼講言われ飲んだがえらい目に　もこ
娘の浴衣仕立直して孫が着る　ひろし
金魚掬う同じ絵柄の浴衣着て　芳野
罪を飲むように水飲む原爆忌　一慧
負けて勝つ言いたいことを飲みこんで　正美
十八歳眩し過ぎますこの浴衣　潤子
ピチピチのギャルも浴衣にかしこまり　三和子
浴衣がけあの日あの夜の不整脈　和子
亡妻に似た浴衣姿の娘にどきり　けい子

ユニクロの浴衣が揃う盆踊り　冨美子
飲み放題そう言われても僕は下戸　英美
宿浴衣みんな笑顔のハイチーズ　正一
飲み込みは早いがすぐにギブアップ　幸雄
寄り添って浴衣ほのぼの遠花火　直樹
熱き血を浴衣に包み逢いに行く　由一

富柳会　池森子報

くちなしの白がわたしを攻めてくる　深雪
備忘録火の輪くぐった頃の詩　紅紫朗
備忘録に詰めておきたいありがとう　浩子
あちこちに火傷のあとがある地球　花梢
火遊びの傷ずっしりと闇の中　冬虹
頂点に立った男の火傷跡　一慧
思いきり愛の備蓄をしておこう　和子
毒舌が心地よいのは多分愛　扶美代
チャンネルをあちこち替えて独りの夜　勇
削除キー叩き修羅場をくぐり抜け　亮幹
ひたすらに走り私に突き当る　アキ
撒いてきた作り話がすぐ発芽　キミエ
遅くてもすぐでも困るウエディング　夕子
緑陰で人間力を溜めている　奈保美
好きになるとあやうい足がもつれだす　哲矢
難問を背筋伸ばして考える　巳代一
バラ一輪切って今日のはじまりに　和喜子
喪が明けてときどき母の樹をゆする　鬼焼
火傷だけ残しサラバと王子様　奏子
ケロイドは隠さず八月を語る　初太郎
俺ひとり他人扱いされている　宏至

夏の章やけどの痕が二つ三つ　ひろこ
即答はしない男の自尊心　鐘造
隠しても素直に語る影法師　洋介
語らない話の中にあるダイヤ　一夫
火の玉を夫婦やりとりしています　東雲
寄り添うて風にのりゆく夏の蝶　春蘭
すぐそこと言われて歩く道三里　たかし
打ち明けた裏から洩れてくる内緒　欣之
誘われてすぐにしっぽを太く振る　森子

川柳塔まつえ吟社　津川紫晃報

ただひとり甘える人を決めている　芳山
童謡を唄って甘えるおもちゃ箱　ちえこ
ふる里に甘え許してくれる母　昭二
ふらり来て甘えていいよ母の海　知恵子
合歓の花甘えたい人もういない　多賀子
甘えている時計だろうかすぐ狂う　文子
味方にも敵にもならず一人居る　邦代
追い風を味方にゴールまで走る　蘭
快い風だ味方の肌ざわり　玲子
わたくしの味方はメール桃さくら　きみ子
手を洗い嗽しているのが味方　螢
一枚の踏み絵が試す敵味方　ちかし
世界地図夜明けのいろがみな違う　日出子
窓しらみ心を決める時がくる　たけし
職人が本音を吐いている夜明け　操子
朝顔も私も夜明けから開く　治代
参道の冷気夜明けの神と会う　房子
ああ夜明け今日も私は生きている　畔

波しずかロマンス生まれる熱い砂　政子
海辺まで二つ並んだ恋の足　茂美
一夏の恋が海辺に埋めてある　昌枝
凪の日は波の美学を聞く海辺　桂子
おおらかに海辺は人をひきつける　静恵
金鎚がじっとみつめている海辺　きみえ
かぼちゃ顔心も丸く生きてます　幸子
顔洗う冷たい水に気を貰う　秀子
顔の皺八十路へ通す筋があり　注湖
早起きをして朝顔とよくしゃべる　淞丘
二日酔いの顔で眼鏡を拭いている　叮紅
かき氷ふと少年の顔で食べ　紫晃

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

化粧水ピタピタ花枯れを防ぐ　ひろこ
したたかに塞き止めておく風のおと　諷人
闇の中に馴れては闇を防ぎたし　八重
防犯に隣近所が手をつなぐ　実満
防ぐこと知らずに生きている金魚　永子
何も彼も長雨にあい駄目となり　武子
娘から転ばぬ先の杖がくる　幸枝
陣痛のその日生まれた猫の年　孔美子
虫眼鏡にもなるペンダント買うおしゃれ　きみ子
炎天に梅を干してるお婆さん　睦子
防ぎたい皺にも古稀のファンファーレ　富久江
野菜たっぷり体脂肪寄せつけぬ　みさ子
ほのぼのと育児に励み虫歯なし　菊乃
防災のサイレン町を縫い村を縫い　かつ乃
防いでも防いでも来る蜂の群　保子

豆蔓の嵐を防ぐ杭を打つ　久枝
ぼけ防ぐつもりの趣味を追っている　和子
日焼け止め塗る面積の広さかな　公子
命刻む確かに振子進んでる　くに子
大漁の港が紙面にぎやかす　八重子
港には悲喜こもごものドラマあり　房子
出帆に凪が港に花を添え　みどり
絵日記にプールで泳ぐ港の子　節子
定退の錨を下ろす舟溜り　彩子
活気ある港カモメが誇張する　弘子
どっちにも転ぶ女がいる港　はるお
巳の年の港に八度目の巳年　喜与志
港まで帰る力は溜めている　汲香
港から帰ってこいという狼煙　螢

川柳塔みちのく　小寺花峯報

蝶の羽化まばたきしてる孫の瞳　あすなろ
梅雨空を押しのけ夏が戸をたたく　きよし
梅干しを食べる前から顔しかめ　てる
猿まわし昔は街に来たもんだ　隼人
猿面冠者ねぶた囃子に魅了され　順風
三猿になってまあるく生きている　慕情
暑気払い梅酒たしなむひとり膳　銀波
肩たたき絆うれしい親子かな　花匠
猿真似は絶対しない戦中派　雅城
三拍子揃って足を踏みはずす　愁女
俎がとんとん起床の合図です　井蛙
真似ごとが出来ない猿で落ちこぼれ　花峯
梅干の種もしゃぶれと言う名医　一花
祖母の肩とんとん豆が煮えるまで　劦
はったりはよそうよ猿が真似をする　五楽庵

西宮北口川柳会　黒田能子報

あっさりと負けて認めた夜の冷え　萬的
お互いに勝ったと思う負けたとも　哲子
兜虫勝負させてる男の子　トミヱ
夕日の燦ゴッホに勝った凄い赤　孝一
勝負より試合の態度ほめてやり　石舟
元気だと認めさせてる空元気　江美
非を認め一層強くなる絆　澄子
仲直り非を認め合い午後のお茶　良恵
それなりに認めてくれる人がいる　能子
番外の芸に食われている主役　曙蝶
二番手を走ると風もやわらかい　たず子
番外地薄むらさきの花が咲く　房子
平社員二番煎じの訓示聞く　美代子
番犬は哀し眠ると叱られる　鹿太
番外の花が一際うつくしい　いわゑ
やがて嫁く孫の姿にほろりかな　キク子
子供からのやさしいメールついほろり　光子
老老介護わが身に置いてついほろり　嘉代子
原爆忌手話の祈りにほろりする　松煙
逆縁の親友を見舞ってついほろり　庸佑
押売りのほろり話に婆ころり　いたる
遠方の長女が見舞い母ほろり　昭三
幕は下り余韻にホロリ泣いている　絹
婿殿の帰るコールであわて出す　利子
麓まで秋が来ているネブタの夜　てる
新婚の嫁がやさしく介護する　光久
夏バテへ鰻味方につけておく　歳子
流れ星故郷遠く老いにけり　春蘭
喜んでもらって汗がとまらない　求芽
一期一会の声を集めて蝉しぐれ　比ろ志

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

お互いに礼をつくして座をしめる　柳宏子
失礼にならん程度に酔うてます　六点
外面は礼儀正しい仮面つけ　悦子
貴方より後で逝くのが礼儀かも　泰子
九条へ礼儀忘れた特措法　みつこ
あの曲を聞くと思わず涙する　フジ
ビートルズの曲はマジック皺消える　桂子
クラシックのお口直しに歌謡曲　いさお
どん底を奮い立たせた歌謡曲　一知
ひばり節わが青春のレクイエム　久仁子
曲名は知らぬがとても良い調べ　敏
空しさを支えてくれる愛の曲　吐来
迷ってた愛を深めたセレナーデ　りつえ
一本杉は別れの曲を忘れない　元紀
人間の器量テストだけは計られず　昇
気にそわぬテストは仮病いきている　敦子
試練つづく神のテストを受けている　ダン吉
テストさえ済めば忘れる単語帳　耕策
変化球投げて男をテストする　扶美代
子のテスト母の祈りも付いてゆく　志洋
テスト終え優しい風の窓に立つ　さとみ
ほとんどの人がこのごろトラになり　専平

シャッターがほとんど下りている市場　かつみ
ほとんどが叩けば埃出る議員　章司
ほとんどが賛成と見た甘い読み　庸佑
ほとんどの人は真面目に生きている　一壺
英断のほとんど妻に背を押され　久仁雄
温室の花ほとんどが狂い咲き　洞庵
ほとんどがなぜ食べ残す自給率　重人
ほとんどは笑って済ます丸い石　美代子

尼崎尾浜川柳会　田辺　鹿太報

日に三度シャワーを浴びるビルの夏　その
太陽に思いをかくすサングラス　江美
試歩の脚陽がサンサンと背を押す　まさ
人面のキツネと出会う十三夜　鹿太
夜詣りの鬼気迫りくる石灯籠　美代子
夏休み子供天国親地獄　玉枝
朝の窓開けて冷気の心地よさ　よし子
夏を病み耐えて笑顔も遠ざかる　カズ子
太陽と同じ匂いの母の胸　秋子
耐えること母の背中に教えられ　信子
太陽に負けてなるかと蝉しぐれ　亀与子
耐えること知らぬ姑嫁で騒がしい　イサミ
鬼ごっこ日暮を知らす寺の鐘　昭三
陽が燦燦握り飯食うこの旨さ　孝一
調子いい時には寺に背を向ける　全彦
耐え抜いて十八年目のVロード　義芳
だっこだっこすぐ草臥れる座り込み　耕治
ささくれた手に職人の自負がある　正治
経験をしたから君の身になれる　澄子
生真面目に酒は薬と信じてる　求芽

京都塔の会　都倉　求芽報

京洛は一望出来ず菜種梅雨　春蘭
雑草に負けてしまった蒔いた種　武庫坊
広告のやせ薬には手を染めぬ　年代
梅雨明けがやがて来ますと老母ポツリ　美穂
病院にかくれて泣ける場所は無い　あやめ
わあっ八十歳　おやじは四十で死んだのに　和友
久し振りからっと晴れた梅雨晴れ間　達子
後ろめたさ吹っ切るシャワーシャボン玉　輝美
牙を剥く自然の猛威底知れぬ　高栄
セーラー服が毒牙にかかるネオン街　満子
今年こそ本気らしいぞ虎の牙　啓子
年齢が牙むき体攻めてくる　幸代
Eメール甘い誘いに牙潜む　ふりこ
ハッタリもまぜて牙むく北の国　萬的
やわらかく牙を隠して生きている　礫
法の裏歩く族が牙みがく　百合子
衣も食も足りているのに世はいびつ　英旺
頑固だが信頼するに足る男　庸佑
おんな一人生きるに足りる米を研ぐ　諷云児
お互いに足るを知ってる老夫婦　正坊
足りな目に作った時に客が来る　益子
食足りてからの貧しさ問い直す　葉子
あの時の言葉が足りず悔いの葦　求芽
老い二人米一合で足りる日々　恭昌
心地よく風と遊んで足るを知る　〆女
直線を行く人生の裏表　芳子
直線の飛行機雲が旅そそる　宏子
凡人で直線コースしか知らぬ　典子
直線を信じた道が曲がりだし　弘之
直線しか知らぬ男の曲がり角　比ろ志

三幸川柳教室　古久保和子報

子や孫に届けたいから鍬を振る　登美代
行き届く介護へ母は子にかえる　みね
味付けをされた噂がすぐ届く　准一
目の届くうちに躾をして置こう　武
届かない愛にも母は揺るがない　公子
無い袖を振って届けた義理一つ　さち子
一夜干し届いて酒が欲しくなる　和子
四方山のはなしも届く置き薬　町子
大勲位汗の現場に縁がない　次根
介護する嫁に誠の感謝状　信子
先生も茶髪も来てる桜花賞　豊太郎
畏まり頂く賞は食べられぬ　清
賞味期限自身の舌で決め直す　一歩
燕の子口一ぱいに努力賞　よし子
皆勤賞貰えるほどの医者通い　当代
賞状を入れる額だけ買ってある　和代
努力賞くらいは妻のサシスセソ　朱夏
賞状に喋らせている応接間　清史
賞状の数だけ踏んで来た修羅場　千秀
友情の一言失意から抜ける　義男
友情を論じた時は若かった　智三
泣いてくれる笑ってくれる友が居る　イセ
友情は或いはガラス玉ならむ　保州

今度こそ渡すポッケにある手紙　幸
今度からオイと呼んだら黙秘権　昇
今度ベル鳴り出すまでに出す答　碧
今度こそ酒の飲まない人選ぶ　鉄治
木を植えて今度また逢う日を信じ　桂香
今度こそと挑んで右脳空回り　かず子
今度こそ殻を抜けようカタツムリ　起世子

熊本川柳会　高野　宵草報

わたしの川少し濁して妥協する　俊子
マルサ手を焼くほど脱税もたくみ　あや子
七夕の笹に願いが揺れ動き　久子
ダイエット忘れ好物手がのびる　百合子
遠目にはパッチワークに似た棚田　エツ子
日記帳ど忘れ字典そばに置き　末
妥協案不満はあるが呑んでくる　義申
短足の僕にはホテルより旅館　百笏
野辺送り雨悲しみを倍にする　清香
へそくりを貯めて女房の裏社会　柳詩
方言が真っ先に出るクラス会　とし子
わがままを聞いてるうちにウツたまる　康子
年金の紐の範囲の暮しぶり　敬久
何事も無かったように陽は昇る　紀子
歩いたら見知らぬ人と会釈する　宵草

川柳ささやま　遠山　可住報

横糸の馴染みがあって生かされる　恵美
弱いから相手を思いやりも出来　純子
一服に境界線を教えとく　多美子
煮こぼれを知らぬ弱火の好きな母　美智子
生と死の予感に仏の掌を探す　八重子
ライバルに追ってゆきたい車間距離　冨美
そして女哀しみ抱いて米を研ぐ　つや子
弱音吐けば老骨ぐらり崩れそう　君代
コツコツとライバル心で家を買い　康子
弱音吐く命はげます家族愛　朝子
良き仲間ライバルであり真の友　かほる
久しぶり明日は友に逢う予感　冨子
親友のつもりライバルだったかも　美紗子
老夫婦ライバル辛抱常に持ち　開子
七十歳まだライバルのつもりで居　哲男
補聴器がはずれて予感くるい出す　とみ子
一部始終知ったライバル杖にする　靖子
名案が出て一服の茶がうまい　可住

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

天職に炎える男が美しい　〆女
夏の恋カンナの赤も炎あげ　契子
京の夜五山の炎夏送る　長一
終の日の荷風日記のかすれ文字　蛍柳
ハスキーな女性の声にある魅力　祥風
かすれてる線が生き生き書道展　禮子
賛成はせぬがお義理でする署名　正三郎
莫山の一筆生きているかすれ　久子
ライバルの目に何くそと言う炎　雪子
美しいかすれの遺言まだ書けぬ　保子
キムヨンジャかすれた声のコンサート　ヤギエ
ぽつぽつ失礼しようか茶がうすい　いさむ
ぽつぽつと痺れて来たぞ和尚さま　禄骨
いよいよの時をぽつぽつ考える　黒兎
小さな義理欠いて大きなツケを抱き　勝

川柳塔おおとり　原　みさを報

自分史に焼けたページの跡がある　彩子
しっかりと焼けた器といわれたい　艶子
二時間で焼けるみんなが通る道　真一
日に焼けた背中も娘ざかりかな　螢
故郷が見える球児の日焼け顔　雅通
夕焼けの空が奏でる童唄　黙光
台風が去ってしっかり寝坊する　邦昭
台風も好きなコースがあるらしい　風花
台風も計画のうち盆休み　道子
金魚の死一日こども無口なり　由多香
掬われてからの金魚の一代記　幸次郎
おとなしい金魚狙って掬われる　せつ子
二学期へ金魚の墓も忘れられ　宏章
出目金にお世辞並べて客が来る　紀子
もの言わぬ金魚相手にひとり言　登美
すくわれた日から金魚は狭く生き　舎人
夫唱婦随金魚の糞と言われても　冨貴子
装いは控え目亡夫へ墓参の日　雄々

かわはら川柳会　上田　俊路報

驚きの姑の重ね着大暑の日　悦子
孫が来ておどろくほどに知恵がつき　道子
驚くのは早いまだまだ出る汚職　泰良
励ましが驚くほどの成果だす　雅予

犬の芸聞いて驚き見てほめる　かず惠
翼なし歩いてみえるものがある　好道
年金は翼あるのかとんでゆく　登生
愛と鞭二つの翼舵を切る　静子
未来の子翼ひろげて舞いあがれ　余吏子
華と散った翼の上にある平和　寿子
折り鶴の翼に祈り込めてある　俊路

川柳塔なら　坊農　柳弘報

拾て来た猫が一番でかい顔　積子
井戸ざらえ思い出綴る縄梯子　敏子
ワープロを覚え退屈打ってみる　彰治
退屈な日は心中に鬼が棲む　蘭香
十人目その気にさせる球拾い　登美子
好奇心拾い集めて天寿まで　ふりこ
妻が居る晩酌よりも縄のれん　博一
泣き虫の男と乗った縄電車　義
どん底で拾った愛がまだ続く　理恵
だんだんと妻の縄張り広くなる　富子
縄のれん神の懐よりぬくい　真理子
拾われぬ一円玉の嘆き節　弘風
腹のなかさらけ出してる縄のれん　むつみ
投げ縄で高嶺の花を引き寄せる　秋泉
縄跳びも孫に及ばず古希を知り　絹子
天平の弥陀も退屈古都は雨　章久
歩には歩の哲学がある縄のれん　春蘭
定年に退屈でしょうと役が来る　春雄
大きい靴が百円玉を踏んでいる　冬葉
夕焼けをくぐり抜けてる縄電車　佳子

にんげんが好きで退屈とは無縁　朝子
後進を育てる決断潔し　弥生
子育てに迷うてひらく亡母の本　道子
ローカルでスカウト拾う名投手　太一
退屈な手帳悲しいほど白い　重人
温床の死角で育つ非行の芽　秋雄
日本を託すはたちが頼りない　雅文
荒縄の幸せ祈る夫婦岩　洋子
風のないくらしに男の背が曲がる　國治
けつまずくたびに大きな愛拾う　孝子

高知川柳社　川竹　松風報

気付かない癖を他人が知っている　かよ
身上調査小指の癖もあるそうな　孝雄
料理好きそのくせしない後始末　圭二
この癖は自分似だなと苦笑い　幸
再婚へ癖もいっしょに連れてゆく　京子
紫陽花のためなら我慢出来る雨　和江
屋上の鉢菜園のミニトマト　竹萌
脇役の誇りは捨てぬかすみ草　圭風
紫陽花の心変わりに負けている　てるみ
粒選りの言葉で風も花になる　哲史
仏壇の花を値切ったことがない　佳風
列島に四季それぞれの花の色　功
花を摘む愛と呵責がせめぎ合う　美々
白百合がトドに変身五十年　成美
お花屋に足が止まっている平和　悦子
人知れず咲いた野草にまた出会う　典雄
花束贈呈男一ぴき泣くもんか　三郎

川柳クラブわたの花　吉村　一風報

悪友の冗談も飛ぶ回復期　恭一
病床の中で人生ふりかえる　奈良司
海のさち山を育てて得る恵み　正純
網棚の荷物降りずに環状線　一道
愛子さまカメラ馴れしてご満悦　(本)たえこ
海恋うか砂を吐かないあさり貝　(赤)妙子
一日を反省してる床の中　ますみ
ちょんまげを切って反省したつもり　まさと
今月も会計簿からの呻き声　いつふみ
顔が売れ有名税が高くつき　義明
生涯のほぼ見え今日もまた端居　春江
出張で妻も息抜きリフレッシュ　順生
智恵子抄丸暗記したおさげの日　知佐子
門限へ無口な父の仁王立ち　美代子
水かけ不動雫に光る愛の詩　民明
交わす度酒に呑まれて出る本音　八寿子
先ざきは仏にまかせ日日好日　はじむ
じめじめの梅雨をかき消す子の便り　(増)道子
子の成長示す我が家の米目盛　宏至
飛び去った子の行先を案じてる　ミツ子
冬眠もいいがそろそろ起きないと　キク子
鼻先をあわがくすぐる大ジョッキ　君江
肩書をつけて僻地へ飛ばされる　宏
縁台の歓声を呼ぶホタル舞い　一風
親飛び越えた子の髭面が頼もしい　きらり
空しい日心に空巣入るかも　欣子
電話でも言えることわり筆運ぶ

川の字に境界線の子の寝息　幸枝
永田町遊泳術は秘書のうで　晴美
一粒で美事やせます夢の中　俊子

川柳ねやがわ　平松かすみ報

地下鉄に立つとサリンを思い出す　博泉
痴漢スリみんな地下鉄乗ってます　一炊
地下鉄の夜のホームは皆無口　とし子
地下鉄のラッシュよさらば定年日　朝子
石のよう言ったら聞かぬ孫の意志　勲
固まって生きる知恵持つ蟻の列　たもつ
仏の手遍路の群れを乗せている　日出子
信仰に固まりせまい視野となる　度
ブレーキが効くスピードは保ってる　亜成
年寄りを置き去りにするIT化　良知
スピードを緩めて趣味に生きる老い　ルイ子
スピードが出すぎて困る物忘れ　弘風
救出に行くスピードが拝まれる　雅文
母座る前にお代わり出すカレー　沙置子
スピードで見せる小粒の土俵技　一風
君とならスローライフを楽しめる　修
命まであげると女言うてくれ　洋
口ほどに株儲かっていぬ気配　光子
僕の太陽 僕の星だとプロポーズ　れい子
大げさだあいつの先祖ラテン系　勇太郎
大誤算会社倒産するなんて　柳宏子
美女のイヤリングが大げさに揺れる　祥昭
断り状切手ゆがめて貼って出す　弘一
観覧車老いも乗ってるアベックで　さち子
イミテーション宝石箱に笑われる　高栄
この恋を老いらくなどと言わせない　利昭
信仰でピンピンころり逝けますか　かすみ
子供の目甘く見ていたのが誤算　庸佑
百円の差見比べていてけつまずく　茜
孫もまた立派に継いだ落ちこぼれ　仁清

くろぼこ川柳会　前坂なお美報

神様に願いが届くまで祈る　あらた
地図のない国まで届く舟を漕ぐ　菜美
鼓笛隊子らのリズムがよく合った　小生
ちょっとだけリズムを変えて出合う朝　美智子
満月に酔っていい夢見られそう　悦子
ほろ酔いでピンクに染まる白い肌　涼子
石鹸も小さくなれば捨てられる　(伊)富子
石鹸で洗い流してリフレッシュ　ふみ子
真実を映す鏡が欲しくなる　重忠
真剣勝負武蔵に学ぶこと多い　常子
花菖蒲みごろですよと届けられ　つや子
世が世なら何が届くかおそろしい　はるお
太陽のリズムで生きているものよ　小鹿
あめんぼうワンツースリー田で踊る　みち子
真実は告げず墓まで持っていく　一眸
過去に酔い明日へ踏み出せない一歩　幸子
石鹸の匂いが好きな猫と住む　和代
石鹸で磨いた椅子がよく滑る　遊子
真実を明かし裏切り者になる　静生
真実に触れると澄んでくる眼　(石)富子
風鈴のリズムは風に逆らえず　よしえ
酔ってるがまだまだ理性捨ててない　なお美
真人間になるのは棺に入るとき　一揆
石鹸を証拠隠滅罪に問う　公弘

ふくべむら川柳　村上　信子報

大宇宙束縛されず遊泳す　操子
不景気でスポンサー株も影潜め　静子
スポンサー予算ギリギリつめてくる　和甫
無視されてそれで私は元気づく　信子
地獄見たそれで歩幅を変えている　はじめ
正論がスポンサーよりまげられる　昭恵
虹二つ宇宙が味方してくれる　春恵
スポンサーもどきで有事法きまる　寛子

岩美川柳会　石谷美恵子報

長老の発言わさびの味がする　稔
永田町の景気対策謎ばかり　重忠
発言をすると決って役がくる　孝男
満点のお方の影が寂しそう　一京
カーブした眉母からの贈り物　公乃
拉致の謎解けない人の青リボン　螢
金持神社は四十曲がりの先にある　季芳
発言の右往左往に目がまわる　蟹郎
謎々が好きだと孫が離れない　一夫
余りある皆な皆なが灰汁なのさ　和歌子
発言権妻が九割握っとる　一瑶
ニンゲンの中古が余りかえっとる　石花菜
一喝の雷それは母でした　忠良
雷が洗濯物を巻きあげる　はるお

謎とけぬまんまに釘を打つ柩　睦子
余るほど娘はいるが嫁に来ぬ　圭一郎
知らぬ間に曲がってしまう臍がある　芳光
足腰の弱い分だけようしゃべる　(野)節子
なにもかも余る暮らしは不幸せ　一粋
竜宮の謎知っている深海魚　よしえ
父さんの雷生きる素地となり　公子
いつどこで果てるか人は謎を秘め　静生
月も星もモナリザの笑み撒き散らす　克枝
海の青誰も一度は思案した　(山)節子
謎少し持って夫婦も仲が良い　裕子
歯切れ良い発言いつも金がない　照子
余るほど物が豊富でゴミが増え　菖子
少しだけカーブが欲しい夫の性　美恵子

岬川柳会　八十田洞庵報

玉の汗ぬぐい男の仕事だな　和美
無茶を言う男かわゆし孫悟空　孝子
一歳児預けに走るヤングママ　和香
居眠りの父の番組ソッと替え　俶子
これ以上無茶を言うなと整形医　愿
父さんの軍手はすぐに穴があく　蛙城
働くのが嫌で老いたのではないよ　桜琴
国のためなどと働く悪い知恵　洞庵
出稼ぎの父待つ子等は春を恋う　十美
反対をしたのに孫が無茶可愛い　茂平
話合う前に憶測腰が引け　昌夫
心付け無用の貼り紙どう読むの　里子
マナー知る教育ママでいて欲しい　勇

大波も小波も越えて無茶と知る　令子
働く気体いやいやせめぎ合う　富美子
無茶飲みの罰だと医者は見抜いてる　年子

サークル檸檬　西出　楓楽報

二列目にわたしの指定席がある　正坊
私からしばらく逃げる本の中　みつ子
お身拭い霊験あらたなるエステ　あずき
赤い花いつも咲かせている隣　房子
古傷を洗うと痒くなってくる　楓楽
ああ男　粗大ゴミとは哀しいね　千代
ちょっかいになってしまった端金　遠野
戦争テロ平気になってくる恐さ　たもつ
愛は錆覚　線香花火消えるまで　希久子
遺伝子を組みかえ美人だけの世に　光久
遺言の均等法でもめている　保子
吉出てと躍起になってひくみくじ　義子

むらくも川柳会　毛利　幸報

てくてくと歩くあなたについてゆく　信夫
てくてくが自慢の父の足の灸　清吉
糊効いた木綿の浴衣母匂う　定子
てくてくと主に犬も歩を合わせ　明朗
夏の夢宇宙空間泳ぎたい　彰
心地良い浴衣ひととき夏の風　安男
夏祭り浴衣が街を練り歩く　幸
ボケ防止せっせと対話しています　八重子
集団のどこまで続く蟻の列　恵美子
花火見に人が集まる夏祭　ます美

待つという女の神話遠ざかる　ふさえ
勝ったからビール一杯追加する　昭子
今日はまた天気と思えばまたも雨　美喜子
夏休みんなそれぞれ予定あり　ツル子
探し物思わぬところに置き忘れ　寿
お父さんたまには参観見に来てね　美恵子
孫の守りつくづく亡母へ感謝する　節江

南大阪川柳会　吉川　寿美報

巻添えの殉職哀れ民家火事　朝代
巻添えを嫌う遺伝子継いでいる　初太郎
巻添えを覚悟男の胸叩く　朝子
下の子のヤンチャに兄が叱られる　なぎさ
巻添えはもうご免です有事法　柳弘
うなずいただけで張本人にされ　シマ子
子供らを巻添えにした離婚劇　遠野
世も末と心痛める日々多い　敏幸
世も末の地獄絵図見たヒロシマ忌　ダン吉
幸せな未来を願う遍路笠　萬的
叱らない社会未完の子が育つ　千里
末ながく誓ったはずの鳳仙花　志華子
掴まれる尻尾はないぞ無位無冠　三男
勝ち組の舞台ささえよ無位の人　明正
作業着の染みにプライド詰めてある　珠美
呱々の声今無位末は大臣に　章久
無位無冠幸せでしたねえあなた　柳伸
ポケットに無位を収めている自分　東雲
役職はいらぬ研究続けたい　直子
まっ白な手帳が眠い無位無冠　重人

無医村の島へ赴任の女医ひとり　雅文
裸で生れ人は裸で死んでゆく　たもつ
虎の子の名刀蔵の奥にあり　千梢
床の間は禁煙名刀飾ってる　庸度
名刀を手に入れ父はご満悦　佑
平和維持家宝の名刀錆びている　ひさ乃
式次第目録通りに進まない　弘泰
目録は人生歩む道しるべ　タカ子
腕前は目録静かなお人柄　柳宏子
三方の上で目録畏る　寿美

川柳さんだ　北野哲男報

六十路すぎみだしなみにと薄化粧　康子
朝顔の薄いピンクに夢露一つ　雅司
薄い紙中身は重い誓約書　俊昭
着ることのない薄物も風に当て　千代子
先祖呼びイメージ浮かぶ墓参り　直美
イメージよりきれいに咲いた花に酔う　房江
故郷の風も染めてる曼珠沙華　ちあき
イメージは母の生きざま追っている　順子
枯葉一枚がわたしにへばり付く　忠
不味いから効くかも知れぬ青い汁　朋月
一葉が一枚になる新紙幣　藤朗
納骨が済んで葉桜見上げおり　哲男
病葉を手に取り明日の我が身知る　千代
いたずらではめた指輪がはずれない　泰子
買物をメモに書いたがメモ忘れ　修
この不況カラスもなげくゴミの味　一之
図書館で読書二の次涼んでる　歳子

赤ちゃんを片手に抱いて踊りの輪　サクラ
水死事故親子姉妹の情哀し　章子
ハーフだと言うから美人かと思う　正和

いずも川柳会　佐藤治代報

漁火に男心を燃やす船　和歌子
青春を漁場に賭ける子の進路　多輝子
夜の舞台大きな声で氷売り　ミツエ
黄昏に活を入れてるかき氷　テル子
釣り道具こっそり置いた不漁の日　啓三
気がねなく娘世帯に入り込む　英子
私を笑わす犬を飼っている　玲子
飼い馴らす犬も時には綱を切る　みち子
氷水甘い雪を待っている　歌子
トロ箱に漁師の汗が落ちている　邦子
人許し氷の水をぐっと飲む　スズコ
氷山の一角ですと事もなげ　芳枝
わたくしの海の漁火まだ消えぬ　久子
気がねなく西瓜も座る過疎のバス　寿美
母逝って亡母の好みに突き当たる　桂子
昆虫に嵌った孫の夏休み　昌枝
漁場には海の男の詩がある　多喜
氷まだ溶けそうにない西東　芙佐子
長電話溶けてしまったかき氷　まこと
飼葉桶ころがす牛の息荒く　房子
お好みの色が出て来ぬ空の色　満江
鯨飼うまさ夢だった大当たり　蘭水
氷より冷めたい役をふってくる　茂美
二次元の世界で飼っている生命　ちかし

好むのと好まぬ違い唐辛子　きみえ
鬼も仏も飼っているから怖くない　文子
空と海碧い好みに自負がある　多賀子
真ん中に座って両方に気がねする　すみこ
かなづちで氷を割ればヒロシマ忌　章峰
今さらに好みでないと言ったとて　れいじ

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

盆休み体なまった仕事好き　知香子
明日の休み夢みてるのか児の寝顔　郁子
休みにはきっと雨降る雨男　都代子
どんぐりのメンバー寄って仲が良い　庸佑
メンバーの順も監督手腕うち　玲子
柔道四段の甥の夫婦に貸す二階　石舟
嘘一つ交ぜて幸せ演じてる　蛙
呆け役も演じ抜け目のない男　萬的
演じてるような夫婦のペアルック　春
演じようなんて構えぬ私です　博子
遺伝子の数はネズミも近いらし　啓生
ふる里で遊んで帰る日の早さ　慶子
力んでも手応えのない不況風　諷云児
高校野球　老人だって気が躍る　タミ
声変り息子そっくり孫の声　英子
わが論理押して玉砂利踏む社頭　禄骨
ポイント制あれば嬉しい診察券　見清
心地よく響くジョークのわさび味　満寿巳
終戦日　永遠に忘れぬ八十五　久太郎
としよりの住みにくい世で深呼吸　千津子
ヨーロッパ暑いニューヨーク暗い　実

スポットを浴びてる吾子のトーシューズ　メ女
夫からごめんねと言えば丸く済む　則彦
何もかもほったらかしで死んでやろ　寿美子
本を読む自分をつくるために読む　正坊

城北川柳会　川久保睦子報

酔っちゃった少うし飲んだおビールで　達子
鈍行の幸せ夫とかみしめる　トヨ子
ローマの休日三回観ました若かった　政子
坪庭で開き直った赤い花　とし子
関西の景気動かす虎軍団　柳一
八十路往く峠の風をまだ知らず　綏子
表面はていねい痛いとこを突く　東雲
それくらいでも私には重大事　正
目を入れたダルマが息をはずませる　重人
美男子の医師に患者はおしゃれする　あい子
譲られた善意も輪廻か有り難い　高栄
心配の種が尽きない母の胸　志華子
ふと父に負われし記憶夜店の灯　春蘭
姑さんの上手は決していかぬ妻　求芽
タテ縞の占める席から横に揺れ　史風
片想い愛には遠い人を恋う　柳弘
紫外線負けたくないと夏帽子　昭子
案ずるな凡聖一如言うてはる　修
億ションを見上げて生きる青テント　茂
計の電話初めて知ったふりをする　千歩
遊園地主役は母の背で眠る　はじめ
今目の罪自問自答のしまい風呂　倫子
父さんの大きな傘を信じてる　典子

長梅雨の気分を晴らすタイガース　公一
擦れ違う車窓に見えた過去の人　久留美
灯台が星にウインクする岬　あやめ
酸欠の街でもカラスタフに生き　千里
カレンダーどんどん余命剥いでゆく　順三
雑草が占めてる町の一等地　ひさ乃

倉吉川柳会　竹信　照彦報

水打ちを屋根までしてる夫の涼　和子
凄い父母八人育てダイヤ婚　日出子
老眼鏡だけでは足らず虫めがね　泰輔
八月の暑さ癒せぬ原爆忌　季芳
タイガース今年の夏を暑くする　悠子
虫食いの記憶を埋める同窓会　芳光
クーラーが効いて静かな兜虫　螢
寝ぐるしい夜がないまま早や残暑　(前)喜美子
暑い夏原発免罪符を貰う　玲坊
元気だせ暑さ寒さも有難い　賀寿恵
省エネを無視する力士秋は負け　ゆり子
同窓会枯木に花が咲く日なり　石花菜
同窓会白髪に禿に鶴と亀　重忠
嫁二人迎えてわが家は夏の陣　十三男
米作り暑さが足りぬ早や照って　勝誉
童心にかえり花咲く同窓会　龍枝
手にポロリてんとう虫の七つ星　よしえ
暑くても自然大事にした昭和　康子
世界中戦の好きな虫と虫　きみ子
もの凄く大食漢の古時計　幸子
暑いとは言うてはおれぬ児が五人　節子

暑気あたり鯛も半解凍になる　玲子
暑ければ脱ぐ何より素肌の思いやり　克枝
法律が凄く立腹十二歳　次男
百までも生きる元気がほしいなあ　酔芙蓉
手鏡は凄く私の顔きらう　雄々
点取虫が議員になると黄金虫　忠良
白髪染めシャネルも掲げて同窓会　茶子
冷夏でも土用半ばがわかる虫　登美枝
密やかに土台揺るがす白い蟻　照彦

堺川柳会　河内　月子報

恋人の靴はでかくて頼もしい　楓
好き嫌いゆうたら妻に逃げられる　時雄
美しい花に魅せられ怪我をする　舞夢
人生の余白に華の絵を描こう　冬虹
弾のあと自慢のタネにしています　像山
他人には小さい怪我に見えている　日の出
あけすけにあんた好きよと古稀の恋　梓
奥様が単身赴任されました　(矢)五月
しっかりの母の声援うるさがり　八千代
広島の夏をブランクにはさせぬ　つづや
嫌われる事は言わない祖母の役　かりん
お色気も添えた気合のギャル御輿　恵勇
不器用な二人の恋はほんまもん　鐘造
本番を前に男の目が燃える　好
ブランクの時も散髪代がいる　扶美代
睨みきく熱血漢が減っている　さくら
ばあちゃんの恋は名前が出てこない　小雪
嫌っているのを気がつかぬから困る　伽羅

一度位笑わせたいな仁王様　俶子
戦を嫌うだけで平和は守れない　深雪
なりゆきでしっかり者の妻となる　(志)千代
母ちゃんが睨んでるので飯にする　玄也
しっかりのままさよならがいいたいな　みつこ
子の貯金箱でピンチを切り抜ける　なぎさ
屋台骨ブランク越えてよく支え　公誠
嫌ってた鬼に似てくる影法師　りつえ
野良猫と心通わす勝手口　潤子
怪我しなやしなやと母は老い給う　半銭
睨んだらにっこり笑顔かえされる　篤子
ピンチはいつもナンマイダブで遣りすごす　天笑

川柳エスポ　山本三郎報

絵手紙のピーマン愛を詰めて来た　はつよ
コメをとぐ音母らしくなっている　三代
川柳でわがくらしむき垣間見せ　団地
また来るネ小さい孫の投げキッス　れい子
夕やけ小焼けかぎっ子無心でボール蹴る　一幸
勝手には使えぬ息子になりました　とし子
列島を震撼させた十二歳　昭一朗
老いてなお睨みを利かす主夫の意地　みさと
睨んだら睨み返してくる野犬　三峰
改装費睨んだ通り足が出る　ルイ子
横綱が負けて睨むという話　さち子
ライバルの昇進袖の下と睨む　とよ子
睨めっこだるまも転ける僕の顔　任宥
進言も言葉次第で睨まれる　政雄
我が心常に見守り元気づけ　ゆき子
母ちゃんの睨んだ顔の目が笑う　高栄
自己主張大げさなほどテレビ向け　一炊
道ばたの花にさそわれ旅じたく　星花
ストーカー勝手に惚れた恐ろしさ　さとし
ありがとうひらがな五つ心から　文子
赤い靴三代ちゃん雨を待っている　さくら
セクハラは駄目よと睨む目が誘う　三郎

翠洋会　穴吹尚士報

軽軽と俵かついでギャル御輿　会美
口軽い男メンバーにはできぬ　正坊
野仏に軽く会釈の野良帰り　正雄
叱られた日から気持が軽くなり　桃昭
生き直すチャンス大病のり越えて　花春
オカリナを吹いてチャンス待っている　千歩
チャンスには弱いが謝るのが早い　舞夢
せっかくのチャンスお金のいる話　蛙
息つぎが下手でチャンスを見のがして　孝一
二度とないチャンス逃がした三回目　千梢
見落としているんだ毎日チャンスだよ　伽羅
女房に敷かれていたら楽ですな　絹子
敷き馴れた布団へ大に旅帰り　富子
濡れ落葉敷いて湿ってくる余生　日の出
雑草もふんずけられて立ち上がる　さと美
はみだしっ子親のレールを歩かない　尚士
ワイドショー知ったかぶりの文化人　石舟
じわじわと地球をワヤにする文化　志華子
ベゴニアの花の下なるカフェテラス　蕉子
有言実行 水泳界の快男児　東雲
缶ビール開けるぐらいはまだ出来る　恭昌
走り過ぎ虎も今頃息切れだ　理恵
百日紅登り切れずに兄が逝く　久峰
玉砕の友なつかしむ盆の月　照子
恋多い女でいたい枯れるまで　叡子
送り火の八時我が家もお灯明　良一
孫帰り布団に残る世界地図　義
日々好日人に迷惑かけながら　澄子
にこやかに開き流してる生き上手

第22回鳥取県没句川柳供養大会

作者の分身の没句を迷わず成仏させてやりましょう

施主挨拶—両川洋々　弔辞—竹内朋恵
読経—藤木大善　代表焼香—各川柳会会長

とき　12月14日(日)　9時受付・開場
ところ　金労災ビル(☎22—8234)　JR鳥取駅前
参加費　精進落しの宴　4500円(昼食・懇親会)
川柳大会のみ参加2500円(昼食・作品集呈)
兼題と選者「敗者復活吟」木本朱夏・「悶」吉村一風・「スポンサー」北川拓治・「無職」鈴木公弘・「男でしょ」細田裕花・「大胆」池原天馬・「溺れそう」盛田夢路・「世界一」池澤大鯰・「泣き笑い」福光京子
席題　なし　各題2句　締切11時
表彰　総合10位(出席者優先1句1点)
欠席投句　1000円(切手可、作品集呈)
(11月末日〆切り)
投句先　〒680-0033 鳥取市二階町3-102 植田一京宛
後援　鳥取県川柳作家連盟

第54回 西宮市民文化祭川柳大会

と　き　10月19日（日）開場12時
締切13時30分
ところ　西宮市民会館（市役所南隣）
会　費　1,000円　（呈作品集 郵送）
宿題・選者（各題２句・席題なし）
「　底　」　佐藤　純一　選
「痺れる」　筒井　祥文　選
「メール」　亀岡　哲子　選
「鮮やか」　松本初太郎　選
「退　屈」　石井　冬魚　選
「げっそり」　福島　直球　選
投句締切り　10月11日
投句料（80円切手×8枚）
便箋１枚に6題12句（当方清記選）
投句先　〒662-0023　西宮市城山12-8
水無瀬冨久恵　☎0798-73-4666
交　通　阪神西宮駅東出口北１分
JR西宮駅南側下車歩13分
懇親会　4,000円　当日受付
共　催　西宮北口川柳会　西宮川柳会
学文川柳　甲子園川柳社

文化祭吹田市民川柳大会

お気軽にあなたのお越しをお待ちしています

日　時　10月26日（日）午前11時開場
各題2句　**締切り** 午後12時50分（多忙者9時受付）
場　所　吹田市文化会館メイシアター３階
梅田から北千里行で約15分（阪急吹田駅西出口前）
お　話　本田　智彦 氏
宿　題「なさけ」　辻　葉 選
「連想吟」　桑田砂輝守 選
「天　狗」　三好　聖水 選
「秘　密」　奥田みつ子 選
「　耳　」　長江　時子 選
「　道　」　片岡　湖風 選
会　費　1,000円（秀吟賞・参加賞・軽食呈）
懇親会　4,000円（10月15日迄に事務局へ）
当日追加申込は出来ませんので御注意下さい。句会はどなたでも自由に見学できます。作品集が入用の方は「住所」「氏名」を受付へ御提出下さい。
事務局　06-6821-6202　太田　昭
〒565-0851 吹田市千里山西4-37-1-401
主　催　吹田市教育委員会・文化団体協議会
吹田川柳会

第30回記念堺まつり協賛

紙上川柳大会

出句要項
便箋４枚（４題分）の左右に同じ句を２句ずつ記入。番号により整理するため無記名のこと。
封筒には住所・氏名を明記。
出句先
〒593-8305 堺市堀上緑町２丁16-3
河内天笑 方　堺川柳会
出句締切　10月15日
投句料　1,000円
賞　各題秀句賞
題と選者
「くすり」西口いわゑ・門脇かずお 共選
「手　紙」河内　月子・泉　比呂史 共選
「負ける」藤田　泰子・金築　雨学 共選
「ふたり」木野由起子・河内　天笑 共選

岸和田文化祭参加

第53回 岸和田市民川柳大会

日　時　10月19日（日）12時開場
会　場　岸和田市立春木市民センター３Ｆ
（南海電車春木駅下車100米）
お　話　「鶴　彬」　岩佐ダン吉
兼　題　各題２句・出席者に限る
「久しぶり」　居谷真理子 選
「他　人」　川端　一歩 選
「軽　い」　山本　蛙城 選
「舞　台」　牛尾　緑良 選
「叱　る」　長谷川呂万 選
「貫　禄」　橘高　薫風 選
締　切　13時30分
会　費　2,000円（大会誌・軽食付）
賞　文化祭賞・同奨励賞・文化協会賞
操子賞・きしせん賞
連絡先　狸　村（0724-27-5029）
ダン吉（0724-28-0325）
主　催　岸和田市・岸和田教育委員会

第４回 いたみ市民川柳大会

と　き　11月３日㈷　**開場**　午前10時30分
ところ　伊丹商工会議所・伊丹市産業情報センター6階
TEL 072-773-5007
阪急伊丹駅北東徒歩4分・JR伊丹駅西北徒歩7分
お　話　「漢字おもしろ学」　佐藤　一男氏
題と選者（各題2句・出句締切12時、出席者に限る）
席　題　「　　」　竹森　雀舎　選
「いたわり」　久保田半蔵門　選
「こつこつ」　小松原爽介　選
「主　張」　赤井　花城　選
「大　胆」　河内　天笑　選
「もっと」　片岡　湖風　選
参加費　1,500円（軽食・発表誌呈）
賞　各題ごとに賞及びラッキー賞あり
問合先　いたみ川柳会事務局
〒664-0858 伊丹市西台5-5-26
岡村方　TEL&FAX 072-772-3655
主　催　いたみ川柳会
後　援　兵庫県阪神北県民局・伊丹市・市教委　他

第13回 枚方市民川柳大会

日　時　10月26日㈰　午後１時半開場
場　所　枚方市立枚方公園青少年センター3F
（京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分）
余　興　悠々弦楽四重奏団　演奏
宿　題　「青　年」　濱田　良知　選
「　二　」　小林すみえ　選
「気晴らし」　油谷　克巳　選
「レンズ」　中村登美子　選
「寝　る」　高田　博泉　選
「濃　い」　田頭　良子　選
席題なし　各題２句　締切　午後２時半
参加費　1000円（発表誌呈）欠席投句拝辞
賞　市長賞・市教育委員会長賞
市議会議長賞
主　催　くらわんか川柳会
後　援　枚方市・枚方市教育委員会
午前中は「鍵屋資料館」でお楽しみ下さい。（会場の近くです）
連絡先　〒573-0081 枚方市釈尊寺町28-4-301
足立淑子　Tel 072-853-8153

第27回 寝屋川市民川柳大会

日　時　11月３日㈷　正午開場
会　場　寝屋川市立総合センター４階自習室
（京阪寝屋川市駅下車　バス西口①乗場より守口市駅行・③乗場より守口市駅行・太間公園行・古川橋行）
兼題と選者「シナリオ」　大内　朝子　選
「投　資」　川上　大輪　選
「天　国」　藤田　泰子　選
「先　生」　奥田みつ子　選
「錯　覚」　足立　淑子　選
「月並み」　江口　　度　選
席　題　ありません
出　句　各題とも２句　締切１時
賞　各題秀句に賞状と記念品
会　費　1,000円（記念品・作品集）
投　句　10月30日必着（切手400円）
送り先　〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
高田博泉内　川柳ねやがわ
主　催　寝屋川市川柳協会
後　援　寝屋川市文化連盟・川柳ねやがわ

第53回 富田林市民文化祭
川　柳　大　会

と　き　11月１日㈯　午後12時30分
（昼食は済ませてお越し下さい）
ところ　富田林市中央公民館(0721-24-3333)
（近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200米）
お　話　北澤紀味子氏「晶子と露子の美の競演」
宿　題　「残」坂元　一登　選（堺番傘）
「次」松本初太郎　選（番傘北斗）
「大」大森　一甲　選（時の川柳）
「熱」赤井　花城　選（ふあうすと）
「もう一度」片岡　湖風　選（番傘本社）
「嘘」池　森子　選（富柳会）
席　題　なし、各題2句　**締切** 13時30分
会　費　1,500円（作品集・お茶）
賞　秀句呈賞
懇親会　4000円（当日受付）
主　催　富田林市・富田林市教育委員会
㈶富田林市文化振興事業団
後　援　富柳会
連絡先　池　森子　TEL&FAX 0721-25-0603

柳界展望

○第47回愛媛夏の川柳大会は、8月3日大洲市社会教育センターで開催され、171名の参加者の中から本社関係受賞者は次のとおり

〈知事賞〉（総合一位）

宮尾みのり（松山市）

○第4回四万十川川柳全国大会は、薫風名誉主幹の選により、633句のうち次の句が選ばれ、8月23日高知県中村市幡多信用金庫で表彰式及び句会が開催された。

〈中村市観光協会賞〉

四万十の河童はきっとみな長寿　西出　楓楽

〈国際ソロプチミスト幡多賞〉

川の果てなる父のこと母のこと　三宅　保州

〈秀作賞〉

吉岡　修・大川桃花

〈佳作賞〉

奥田みつ子・志田千代・山本希久子・山本半銭・前たもつ・中澤伽羅

〈席題の秀句〉

雨戸開け台風は又それたらし　志田　千代

○第7回川柳展望全国大会は、8月24日ベルクラシック空港で145名の参加を得て開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり

道草が好きで入道雲いる　高瀬　霜石

帰る家出来たよ僕の青テント　河内　天笑

生返事するのに丁度よいあ・し・た　鈴木　公弘

○第50回八尾市民川柳大会は、8月31日170名の参加を得て八尾文化会館で開催された。当日の本社関係天位

浮き草になって抱かれてみたい海　星野きらり

拾われて仔犬安心して眠り　宮崎シマ子

成功へ王道はない蟻の汗　海老池　洋

○第4回文学ルート5市本社関係入賞者は次のとおり

〈優秀句〉坪井孝一・竹治ちかし・伊藤玲子

〈秀句〉伊藤寿美・酒井一壺・松尾和香・安平次弘道（2句）米田恭昌（2句）青枝鉄治・宮本三喜夫・土橋螢出口セツ子・竹治ちかし

○島根県益田市の柿本人磨短歌大賞に出口セツ子さん（箕面市）が入選

○園山多賀子さんのエッセー3編が、季刊「山陰」夏号に掲載された。

▽出　版△

□「そうりゅう会」では、7月26日第2合同句集を発刊　編集村上玄也氏　B6判52頁

□福士慕情氏は、川柳塔みちのく句集19集として『慈母観音』を発刊。序文は波多野五楽庵氏　A5判44頁

▽御芳志御礼△

□川柳展望社から金一封を拝受

▽人事動向△

○薫風名誉主幹は四万十川全国川柳大会選者として、高知県中村市行。みつ子副主幹　たもつ・楓楽副理事長他13名同行。

▽訂正と削除△

8月号＝P16上段2行目、祈り続けてる→**折**り続けてる　P41上段8行目、「胸やけが続いて…」を削除

9月号＝P30上段16行目、亡夫→**亡父**　P100上段2行目、月→**木**　P102上段5行目、セツ子→**節子**　P113上段16行目、再開→**再会**　P118上段21行目、五十肩→五十**腰**　P121 2段の15行目、嫌いで→**恐くて**

常任理事会＝9月8日(月)出席20名　①14年度会計報告及次年度予算案　②まつり各担当最終検討　③六賞関係　④新任役員確認　⑤合祀祭について　⑥アンケート返信報告　⑦同人1名承認　⑧その他

次回常任理事会＝9月29日(月)13時からアウィーナ207号

新同人紹介

石堂潤子（いしどう じゅんこ）

―岳人・正子・直樹推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳サークル卯の花	16日(木)正午から 発つ・無人駅・いきいき 誰・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
城北川柳会	**18日(土)　吟　行** やれやれ・固い・ホール 自由吟	**お問合せ先** 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
岸和田川柳会	**19日(日)　正午から** **第53回　市民川柳大会**	**10月号　P.129参照** 春木市民センター3F
東大阪市川柳同好会	**19日(日)　正午から** **第31回　東大阪市民川柳大会**	**9月号　P.120参照** 東大阪市立社会教育センター3F
川柳ねやがわ	19日(日)午後1時半から 救う・強気・騙す・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半から 境・筆・話・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
堺川柳会	**第30回 堺まつり紙上川柳大会** **10月15日締切**	**10月号　P.129参照** **投句先** 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3　河内天笑
もくせい川柳会	20日(月)午後1時から 渡る・リズム・にこにこ 自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
南大阪川柳会	22日(水)午後6時から 荷物・沼・ねつ・何糞	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブわたの花	24日(金)午前10時から 故・飾る・追加・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの市民川柳会	26日(日)午後1時から 高速・逃げる・ムード 「すんなり」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	26日(日)午後1時から 急・レンタル・旅ひとり	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
京都塔の会	27日(月)午後1時から 米・塗る・淡白	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	27日(月)午後7時半から 漫画・水・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

10月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	2日(木)午後1時から ただし・筆・参加	奈良市立中央公民館4F（近鉄奈良④出口歩5分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼　崎 いくしま	3日(金)午後1時から 坐る・旅・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 隠・辞書・雑詠	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉　吉 川柳会	4日(土)午後1時から カード・女優・すべる	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐　津	6日(月)午後1時半から 主婦・本人・いろいろ	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
川柳塔 打　吹	11日(土)午後1時から 皿・ぞくぞく・こぼす	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879　高多博丈
川柳塔 ま つ え	11日(土)午後1時半から 旗・里の秋・体調	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
川柳塔 みちのく	11日(土)午後4時から 崩れる・寄付・面白い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5　波多野五楽庵
川　柳 藤井寺	12日(日)午後1時から 安い・チャンス	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105　髙田美代子
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 牙・アニメ・そんなこと 「ない（形容詞）」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良
八尾市民 川柳会	13日(月)午後1時から 指・勝つ・宝石・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15　宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 土俵・笑う・ひび・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308　西口いわゑ
ほたる 川　柳 同好会	14日(火)午後1時から 種・染まる・はっと	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎
尼　崎 尾　浜 川柳会	14日(火)午後1時半から 舵・遊ぶ・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太

編集後記

☆六賞受賞者の皆様、おめでとうございます。毎年10月号は受賞の方々の笑顔が浮かんできて、編集のペンが弾み、やり甲斐を一入感じる月となる。

☆さて、いよいよ食欲の秋。一時期ファッションの様相を呈していたファーストフード（レストラン、インスタント食品を含む）の、特に子供達に対する弊害が問題になって久しい。このほど遅まきながら環境省白書に、「食文化を見直そう」と取上げられ始めた。

☆ファーストフードに対抗するスローフードは、既に80年頃イタリアから始まっている。ゆっくり食べるということに端を発し、食材の安全性をもう一度見直し、地産地消（その土地で穫れたものを、その土地で暮らす者が食べる）の考えに至っている。

☆この考えは本誌904号（平成14年9月号）の目次下に遠山可住さんが、「人の運は食に在り」と題して、執筆しておられる。再度お読みいただきたい。

☆片や、どんどん忙しくなる現代のビジネスマン。体によくないのはわかっちゃいるけど、モバイルフードがやめられない。それは、ケイタイを肩と耳で挟み、応対をしながら片手でファーストフードという食事。街角で見かけるこんな若者は、忙しいからというより、むしろイキ振っている様だ。

☆平均寿命まで生きられるとして、あと2万2千935回の食事ができる。最後の食事まで、一回一回を大切に、おいしく味わって食べたいと願っている。（ふ）

ひとこと

柳人の劣等感

某誌のアンケートに俳句は難しいので川柳の道に入ったと。某結社の鼎談に俳人は文学部卒ばかりや叶わんという旨の発言。

某討論会で隣席の俳人パネラーの句が分からないと公言した柳人パネラー。なんと柳人に劣等感の多いことか。

俳人の大多数の伝統派は死語ともなりかねない古色蒼然たる季語を墨守せよと指導する。

学歴は経済学部も法学部も医学部も理学部さえも、そして短大、高女卒もあり、文学の博士課程修了者は少数おられるが、川柳の方にもいるではないか。

俳句は難しいのではなく煩いだけだ。川柳の穿ちの方がはるかに難しい。劣等感は無用だ。

（山本　蛙城）

○計算は苦手、数字も覚えられず、ひたすら敬遠ばかりしてきたが、一方では数字は多弁、文章より端的で説得力があると認めている。日常の会話にも数字が入ると、何となく納得させられてしまう。

○コーヒーの日本人一人当り一年の消費量は三三〇〇グラムで、一番多い国はドイツの七五〇〇グラム、アメリカは四三〇〇グラムと聞けば、日本もかなり欧米に近いことがわかり、食生活の変化、コメの消費が減っていることまで、うなずける。

○最近よく言われるマニフェストも、単なる公約ではなく、数値目標を明らかにするということであれば、より確かである。

○因みに数詞を使うと川柳も具体的で、真実味のある句になるとカルチャーで学んだことがある。「神様に頼んで五年子ができず　高橋散二」「四十九キロ肩で風切るほどに痩せ　高杉鬼遊」「蝉三日蛍二十日の尊厳死　谷垣史好」等がある。

○数字には説得力があるというものの、時折統計のマジックに引っかかったりもしている。

○日本の人口は現在約一億二七〇〇万人、少子化により、このままいくと机上計算では、三三〇〇年には、たった二人になるという。数字はやっぱり恐い。（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（12月号）　地名　　姓・雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

作品募集

12月号発表（10月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　藤田泰子選
「時」　吉田孔美子選
「鉛筆」　岩佐ダン吉選
「知恵」　山本半銭選
初歩教室「ケーキ」（3句）　三宅保州担当

課題吟（3句）

1月号
課題吟「輝く」「てのひら」「氷柱」
初歩教室「今年」

第55回　大阪川柳大会

とき　11月22日（土）11時開場
ところ　大阪市立北区民センター
（06-6315-1500）
（地下鉄「扇町」駅、またはJR環状線「天満」駅から3分）
会費　1000円（発表誌呈）
宿題（各題2句・13時締切・席題2題）
「いのち」　板尾岳人選
「光」　赤松ますみ選
「時事雑詠」　柏原幻四郎選
「描く」　高橋定男選
「教室」　礒野いさむ選
「弱い」　瀬川瑞紀選
賞　各題の秀句に大阪市長賞贈呈
主催　番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文学コロキュウム・川柳グループ明暗・川柳天守閣・川柳瓦版の会
後援　大阪市

本社11月句会　6日㈭午後1時から
兼題「拾う」「拭う」「干す」「ゆさゆさ」「送る」

第22年度　夜市川柳募集

第5回「森」　辻葉選
ハガキに3句　10月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・茴香の花・一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇三年（平成十五年）十月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二一一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（FAX）六三六—六九一四番
振替　〇〇九八〇—五—三三三六八番

メールアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十五年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九一七号

定価 八百円（送料 八十四円）

平成15年 鳥取県文化団体連合会主催事業

第27回 鳥取県川柳大会

日　時　10月26日（日）10時開場
ところ　新日本海新聞社　5F大ホール
（JR鳥取駅南口より徒歩3～5分）
開　会　13時20分　披講14時
兼題と選者（各題2句・席題なし）
「下　駄」　牧野芳光選
「舞　う」　政岡日枝子選
「　袋」　佐々木裕選
「母　校」　恒弘衛山選
「仰　ぐ」　福島直球選
「知　事」　西出楓楽選

出句締切　12時
表　彰　鳥取県知事賞 他
会　費　2000円（作品集・昼食呈）
欠席投句　1000円　9月30日締切、用紙自由、作品集呈
事務局（投句先）
〒680-0805 鳥取市相生町1-110
小林由多香方　鳥取県川柳作家協会事務局
（TEL 0857-23-1170）
主　催　鳥取県川柳作家協会・鳥取県・鳥取県文化団体連合会
後　援　新日本海新聞社

医療法人社団
湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）
放射線科
ホスピス

診療時間　月～金 9：00～17：00
土 9：00～13：00

電話 大阪(06) 6771－4861(代)
http://www.yukawa.or.jp
〒543-0033
大阪市天王寺区堂ケ芝2丁目10－2
JR大阪環状線桃谷駅徒歩3分

雑誌 05703－10